
レジナレス・ワールド

新羅三郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジナレス・ワールド

【Nコード】

N7503Y

【作者名】

新羅三郎

【あらすじ】

——強くてニューワールド。VRMMO「レジナレス・ワールド」プレイ中にいきなり意識を失ったシュウとサラ。気がつくと、ゲーム世界そっくりな「現実」に放り込まれて。ゲーム時と同じ能力を持ちながら旅する二人の間に、人化する銀魔狼、ハイエルフの美姫らが割り込んできて——

01（前書き）

——強くてニューワールド。VRMMO「レジナレス・ワールド」プレイ中に起こった不幸な局所現象。巻き込まれた2名の男女に、ただ一度の「機会」が提供される。それは、彼らのために与えられた新たな世界で暮らすこと。

「う…ん」

はるか地平線が春の陽気にかすんでいる。そこにさわやかな風が渡っていく。

そよぐ風が美しい新緑の草を揺らし、彼の頬ほほをくすぐった。

気持ちよさとくすぐったさに目覚めると、隣から、同じような声を上げる女性の声が聞こえ、たのなかしゅう田野中修の意識は、一気に覚醒する。

寝ころんだまま横を見ると、そこには、良く見知った美しい女性の顔があった。

「あれ？ サラさん？」

「ん… シュウくん？」

シュウの家の一階上、同じマンションの住人である。シュウより2こ上の二十歳。

美しいナチュラルウェーブのあわい金髪は、普段は無造作に束ねられているが、降ろすと腰まであるほどに長い。今はなぜか降ろしている。

瞳は透き通るように美しいブルー。光の加減で美しく変化し、見るものを魅了してやまない。

北欧系の大柄で整った肉体。

日本人の男の眼を釘付けにするほどの大きさを誇る美しく形の良い胸、その下になだらかなカーブでくびれていく腰と、そこからふくらんでいく発達した骨盤にあわせた肉付きは、彼女の造形を一目見ただけですべての男に強烈に印象づける。

それでいて年齢がわかりにくいほどあどけない表情をするので、整いすぎた彫りの深い美しい顔なのに、少しも冷たい印象を与えない。

本業のモデルであるふたつ上の彼女の姉のユリアは、普段から冷

静で無表情で、さらに整った容姿と美貌を誇っているため、一種近寄りがたい偉容だが、サラは、豊かな表情がとても魅力的で、シュウにとっては、サラのほうがより異性として惹かれるタイプだった。

二人は、草の上で仰向けの姿勢で顔だけ動かしお互いの姿を確認し、それぞれひじで上半身を起こしあげる。

サラの眼が、シュウの顔から、すっと下半身のほうに流れる。

その目線に応じてシュウも、自分の下半身に。

「きゃっ！」

サラが思わず悲鳴を上げる。それはほんの小さな悲鳴だったが、シュウの意識を一瞬で沸騰させるに充分だった。

「なっ…！ えっ！ えっ？」

何一つ身につけていない生まれのままの姿。目覚めの瞬間の男性特有のあの状態になっていなかったのは幸か不幸か？

シュウは飛び起き、いわゆる体育座りで股間を隠し、両手で出来るだけいろんな物を見えないようにガードしてみた。

そして、固まってるサラをみる。

顔から、胸、そして…。

青ざめたシュウの顔がみるみる赤く染まっていく。

その視線に気がついたサラが自分の姿に気づく。

「あ…：…ご、ごめっ」

「いやっ！」

とっさに左手で胸を隠そうとするサラ。だが、胸に巻き付けた左手が、サラの大きすぎる胸の形を複雑に変えることで、むしろ男にとっては『眼に毒』な事になっていく。

「さて」

ほぼパニック状態と言っている二人の精神に冷や水を浴びせるほどに冷静な、だが威厳に満ちた男性の声が、二人の正面から発せられたことで、この、不可解で、あり得ない状況に変化が生まれた。

「田野中修、サーラ・ヨハンセン。落ち着いたかね？」

二人の目の前に、青白く光る直径5cm くらいのガラス玉のようなものが浮かんでいる。

そして、どうやらそれが「しゃべって」いるらしい。

その声は、どうもある程度年配の、男性のような響きだった。

「まず、二人に詫びねばならぬ事がある」

それは、存在するだけで二人に威圧感を与え、興奮を沈静化させるに充分だったが、その詫びの言葉がきっかけになって、二人はやつと硬直から解き放たれた形になった。

「――君たちは、今ここで目覚める直前、何をしていたか覚えているだろうか？」

「…ゲームを、してたと思います」

とまどいながらシユウは答えた。眼をあわすと、サラも小さくうなずいた。

VRMMO。21世紀中頃に急速に発展したヴァーチャルリアリティ技術を応用した体感型仮想現実装置をつかって、オンラインでプレイできるロールプレイングゲームの一種。

神経パルスを模倣することで、ある一定のレベルまでは五感をだまし、プレイヤーによりリアルな娯楽を提供するそのゲームは、急速な普及によってコストが下がると同時に、かつてない規模の市場を形成していった。

意外にもお互いが知らなかったが、二人は、『レジナレス・ワールド』というMMOに参加しているプレイヤーだった。

「そうだ。二人とも、感覚的には、つい今しがたまで、自分の部屋でゲームをしていたと感じておるであろう？」

二人は小さくうなづく。

「君たちは、意識を失った瞬間に、事故にあった——我々のミスで」

要を得ない説明を総合すると、シュウとサラは、なんらかの理由でこの世界に『存在』することになってしまったようだ。

その理由も、意味も全くわからない。何を聞いても、この目の前の玉は、詫びるばかりで理由をいわない。

ただ、この世界はレジナレス・ワールドに違いなく、そして、二人はここに存在すること。そして、元のレジナレス・ワールドと違い、ログインしているVRマシンはないことはわかった。

「私たちの装備はどうなったんですか？」

サラが尋ねる。さすがに、全く意味もわからない上、丸裸にされ、なにも荷物も無しにこの世界に放り出されれば。もし、レジナレス・ワールドの中というのなら、一晩で命はないだろう。

「ああ、すまない。君たちの荷物は、概念上の——ステータスといったか？その中にすべて収められている」

二人は、それまでプレイでやっていたように、ステータスを開いてみる——あった。

だが、あったのはアイテムガジェットのみで、ステータスパラメータや、装備画面は見あたらない。

「これ、どうやって装備するんですか？」

シュウは尋ねてみた。

「取り出して、自分たちで着用してくれ」

「へえ、リアルですねえ」

シュウは、視点移動でアイテムを選択し、取り出してみた。

——どさ。

目の前に、選択した装備——侍の羽織袴が現れた。
ふわり、と目の前に浮かび上がり、手に取った瞬間、ずしり、と重さが加わる。なかなか便利なものだ。

同じように、草履・刀と、アクセサリであるすばやさの指輪と陣笠を選び、早速着替えてみた。

何となく見てはいけないような気がして反らしていた視線をサラに向け、ちらっと盗み見る。

ほっとするような、残念なようなところだが、サラはすっかり、美しい白銀のプレートメイルにブーツ、そしてふた振りのレイピアを腰に佩いていた。

シユウと視線が合うと、ちょっと照れたようにはにかんだサラ。それを見て、また真っ赤になってうつむくシユウ。

「ところで、ステータスがきちんと機能していないようですか？」
サラが光の玉に尋ねてみた。

「そうだ、残念ながら、この世界は、厳密にはゲームではない」
光の玉は、とんでもないことをいいだした。

「君たちは、この世界で、今まで過ごしたように生きていけるだろう。だが——」

光の玉は、また衝撃的な事実を伝えた。

つまり、この世界は、二人にとって現実そのものであり、パラメータなどで計ったり見たりすることの出来ない「リアル」であると。「君たちの『死』は、そのままの命の終焉だ。そして、君たちが何かの命を奪えば、それらもまた、『死』を迎えるであろう。これはゲームではなく、復活点などもない」

「そ、そんな！」

「その事実を知っているのは、この世界では君たちのみだ。我々は、この世界を守り、維持はするが、手出しはしない」

「冗談じゃない！ あんたらのミスだろ。俺たちがなにしたらってんだよ！」

「そうだ、我々のミスだ。そして、我々に来る、これがすべてだ。後は君たちに任せよう」

「お、おいっ！」

目の前の光の玉が徐々に薄れていく。

「時間が来た。君たちの行く末に、幸多からんことを……」

唐突に消えた光の玉が去ったあと、二人はしばし呆然と草原に座り込んでいた。

全く意味がわからない。

ほんの一瞬前、プレイ中だった二人は、目の前が暗くなったと思ったら、すでに全裸でここに横たわっていた。少なくとも、そうとしかいいようがない。

「ステータス」

シュウはふと思い立って、ゲームシステムの確認を試みたくな

った。やはり、ステータスにはアイテムガジェットしか存在しない。

アイテムをずっと確認していくと、なぜだか一番下に、金貨や銀貨が入っている。

これもあり得なかった。

所持金は普通、個人ステータスの上部に表示されている。

その個人ステータスが存在しない。

「システム」

環境設定やログアウトを管理するガジェットを呼び出そうとした。

しかし、全く無反応だ。

「サラさん、どうです？」

シュウは、サラにも同じ事をやってみてもらってみた。

だがやはり、お互い何をやっても、開くのはアイテムガジェットだけのようだ。

後々、このアイテムガジェットと中身だけでも、この世界では大変な恩恵だったと気がつくのだが、まだ、この混乱の中の二人にとっては、それどころではなかった。

一通り試すことを試し終えると、二人は草原に並んで腰掛け、また呆然と空を眺めていた。

風はひどく心地いい。

若草を揺らしながら、風はなだらかな草原を駆け下りていく。

ふと見上げると、うすい白い雲が、奇妙なほど速く流れていく。

（こんな状況じゃなかったら、本当に最高なんだけだな）

シュウは、そう思いつつ、ちらっとサラを見てみた。

そのシュウの仕草を感じ、サラは、ついに耐えかねて泣き始めた。
「うっ…うっ、ふっ」

訳のわからない不安さ。だが、この感覚は——すくなくとも、この五感に感じる生々しい現実感は、二人がここに放り出された事実をなにより雄弁に肯定している。

ふとシュウは、先ほどの光の玉のように、サラまでずっと消えてしまうような恐怖感と孤独感に襲われて、泣いているサラの頭を抱き寄せた。

ほんの一瞬、驚いたようにシュウの顔を見上げたサラは、今度は自分の意志でもう一度シュウの胸に顔を埋め、声を殺し、肩をふるわせて泣いた。

「さて、ごめんなさい」

サラの顔は腫れ上がってひどいものだったが、しばらくするとだいぶ落ち着いていたのか、『えへっ』とした表情を作ると、シュウの体から身を起こした。

「ところでシュウ君、レジナレスやってたのね」

「サラさんこそ。意外ですねー」

幼なじみというほどでもないが、お互い、同じマンションの上下階室ということもあり、家族ぐるみで見知った仲ではある。

今どきの男の子であるシュウがゲームにハマるのはともかく、サ

ラは、これほどの美貌の女子大生だ。正直、あまり熱心にゲームにこだわるようには思えなかったので、意外な一面を見た気がする。

「うん、学校の、友達がね、すごい娘こがいるの」

サラは、仲の良い同級生に誘われて、興味半分にはじめたらしい。そこで、その友達と一緒に行動するうち、みるみるうちにレベルは上がり、装備は整い、そして、ゲームの要領をつかんでいくと、あっという間に頭角を現していったようだ。

つまり、

「ハマっちゃったんですね」

くすりとシュウが笑うと、サラは、むーっと頬をふくらませた。
「シュウ君は？」

「俺も似たようなもんですよ」

シュウも同級生にかなり熱心に勧められた。

まあやっぱり、評判の高いゲームだったし、シュウも人並みに興味があった。

VRは、意外なツテを持つ父親が買ってきてくれた。

兄は大学進学で一人暮らしをはじめていたので、シュウは部屋にVRを設置してもらい、レジナレス・ワールドにどっぷりはまりこんでいた。

「ところで、その格好、聖騎士ですか？」

「うん。二つ名もあったんだよ」

「えっ、それは……すごいですね」

女の聖騎士で二つ名。何となくぴんと来たシュウは、

「もしかして、舞姫ですか？」

即座に浮かんだその名を聞いてみた。

「えー、なんでわかるの？」

照れくさそうに、サラははにかんだ。

「いわれてみればサラさんのイメージですし……僕にも二つ名あったんですよ」

サラにいうと

「ちょっと待ってちょっと待って。当てるっ」

サラは眼を輝かせながら、シュウの顔をのぞき込んだ。

こんな状況なのに、シュウはその表情にかなりうろたえた。

「黒竜殺し？」

「よくわかりましたねー」

「シュウ君の今の格好」

「ああ」

ゲーム上ではお互い、分身を使っているから、ここでこうして名乗りあわなければ、まず知るよしもなかっただろう。

ちなみに二つ名は、特定のクエスト一番乗りの証であり、その中でも、止めを刺すなどのフラグで獲得するものだけに、強さだけでなく、チーム力や運も関わるトロフィーになっている。

舞姫は、都市を襲うモンスターの大量のイベント時に、最も大量のキルを獲得した一人に贈られたはずだった。女性なので「舞姫」。剣舞のことだ。

黒竜殺しは、その名の通り、ブラックドラゴンスレイヤーに贈られたトロフィーだ。

ドロップは、所属チーム——ギルド単位で受け取れるが、二つ名の称号は、一人に限ることが多い。

黒竜殺しは、止めを刺したプレイヤー限定。だからずいぶんやかまれたり、からかわれたりしたものだった。

シュウがレジナレス・ワールドにハマれたのは、試験休みから夏休みにかけての期間だった。

さすがに2学期が始まると、それまでのようなギルドチーム前衛でフル稼働、とも行かず、やむなくジョブチェンジをして、わずかな時間に『生産職』を楽しむスタイルに切り替えた。

一応、エスカレータで進学が決まったシュウだったが、2学期の

成績も無視できないため、春まで廃人プレイはお預けだったのだ。

一方、舞姫は、ほんの一週間くらい前だったはずだ。そう尋ねると、サラは自慢げに胸を張った。

「イルスヴァニア防衛戦よ」

「すごいですね」

シュウも噂は聞いていた。

トップギルドのひとつ「光の楯」が、街に向かって突進する魔物の群れに呐喊とっかんして、魔物撃滅の橋頭堡になったという。

その中でも、舞姫は桁違いのキル数を稼ぎ、運営表彰の形で名前が付けられたという。

「もちろん、ギルドの力だけだね」

サラはいうが、そうではないだろう、それだけじゃないのはシュウには手に取るようにわかった。

こんな雑談でも、二人の心は、なんとか動き出せるほどには軽くなった。

「サラさん、ちょっと動いてみましょうか？」

「そうね、状況もわからないし、出来たら、街を探したい」

お互い、同じ懸念を抱いていたようで、ほっとする。

さすがにこの状況。もしここがレジナレスだとしたら、二人つきりで野宿は、どうしても避けたいところだ。

立ち上がったシュウは、サラに手を伸ばす。

自然な振る舞いでその手を取って立ち上がると、サラは、またはにかみながら

「ありがとう」

とシュウにいった。

とりあえず二人はあたりを見渡す。

まず今の位置に心当たりはあるのか？

「シュウ君、ここ、見覚えある？」

「いいえ、来たことない気がします」

なだらかな斜面になっている草原、太陽の位置から考えると、斜面は北から南に向かって下っていて、反対側には森がある。

さすがに状況がわからない段階で、森にはいるのは避けたいので、とりあえず、下ってみよう、ということになり、二人は歩き出す。

今見えている地平線は、おそらく5 km ほど先だろう。5 km ということは、あそこまで行くのに1時間半くらいかかることになるか。

シュウは大まかに計算した。

「どうして僕が『黒竜殺し』だってわかったんですか？」

沈黙を恐れるように、二人は歩きながらとりとめもなく話す。

「だって、黒衣の『侍』でしょ？」

「ああ、なるほど」

二つ名持ちは、正式サービス開始から3ヶ月で、20人くらいだろうか。

大体ジョブによって格好が決まってくるし、それぞれ好みの色があるので、そういった情報は掲示板などでうわさ話になっていたりする。

「それにしてもサラさん、その格好似合ってますねー」

シュウは、横に並ぶサラに心からそういった。

サラはシュウより頭ひとつ以上長身だ。

そして、足も長い。シュウの腰近くにサラの股の付け根があり、微妙にシュウの劣等感を刺激する。

「ふふ、ありがとう。シュウ君も似合ってるよ、侍」

「ええー？そうですかねえ」

シュウは自信がない。まあ普段袴など穿かないので何となく落착かないのだが、そういえばずっとゲームでは袴だったな、と思うと、さほど違和感もなくなってくるから不思議だ。

履き慣れないといえば、足袋と草履のほうがやはりまだ馴染ましい。

「いっそ、靴にしようかなあ」

シュウが愚痴ると

「ええー、ダメよー」

サラがなぜかニコニコしながら不満を漏らす。

「だって、すぐくサマになってるよシュウ君」

「歩きにくいし、地面平らじゃないから時々痛いんですよ。ごめんなさい、やっぱり靴にします」

「ぶう」

サラがかわいくふくれるのを見て、シュウは苦笑しながら、ステータスを開き靴を選択する。

移動力補正のある靴はレジナレスでも人気のアイテムで、シュウもちゃんとアイテムにストックしてあるのだ。

履き替えて歩き出す。最初は単に歩きやすくなっただけかと思っただが――

「サラさん、早足の靴持ってます？」

「あるよ？」

「ちよつと履き替えてもらえます？」

サラにも履いてもらい、様子を見る。

「うわ、これ効果あるわね……」

そうなのだ。どうやら、魔法効果の装備品は、はっきりそれと体感できるほど効果がある事がわかった。

「ほんの気持ちですけど、楽になりましたよね」

「そうね。でもそうしたら、ネックレスとかピアスとか指輪とかも、ちゃんと装備した方がよさそうよね」

サラがふっと漏らし、憂鬱エンカウントそうに顔を曇らせる。

そう近くない先に、遭遇するだろう、魔物との戦いを思い、気が重くなっているのだろう。

「そうですね、ちょっとこの辺で、装備をちゃんと見直しましょう」
二人は立ち止まり、アイテムを漁ることにした。

二人の所持品をあわせると、現時点で最適と思われるのは、ステータス異常回避の指輪、ゲーム内では防御力+10だった護りの指輪。魔法回避のネックレスなどが効果的だろうと思った。

また、シュウにはないがサラはピアス穴があるので、耳に魔力増強のピアスを付けた。

腕輪のたぐいも、素早さが上がる腕輪を両腕にはめた。

また、武器防具のたぐいも見直してみた。

シュウは、侍クラスだった頃のベスト装備だったが、サラは、聖騎士の重装備である両手剣を使用するので、レイピアをしまい、現時点で持つ最高の剣、ドラゴンスレイヤーを左腰に佩いた。

さらに、炎属性のナイフを、右の尻あたりに邪魔にならないように下げた。

ちなみに、シュウの装備する日本刀は、無銘ではあるが、炎属性+3が付与されている。脇差にも、風+3という贅沢なものだ。

装備を調ととのえて、二人はあらためて南下を再開する。

2時間ほど歩いただろうか、行く手に川が見えてきた。そして、舗装されてこそいないが、道も発見できた。

特に根拠はないが、シュウが

「川上より川下のほうが街の規模も大きそう」

というと、サラも

「なるほど」

と妙に納得してうなずいていた。

そこで、二人は川沿いの道を東に下ることにした。

疲労はさほどでもないが、さすがにのまずくわず無飲無食で半日近く歩いているので、二人はバテはじめてきた。

「ポーションでも飲んでみますか？」

「飲む！」

——予想以上にひどい味がした回復薬を飲むと、何ともひどい顔を見合わせ、なぜか二人してしばらく笑った。

そうして再び、舗装されていない荒れた道を連れ立って歩いていると、遠くにぼんやり、人工物らしき姿が見え始めた。

人の暮らしの気配を感じるというのは、どうしてこうも安心感があるのだろうか。

だが、旅というのは、ほっとした頃、というのが、なぜだか悪いことが起こりやすい気がする。

村のほど近く、ちょっと先に馬車が見えたところ、何かその馬車の周囲でただごとならない気配を感じ、二人は駆け出した。

二人の男が、馬車の左右に別れて、黒い何かと戦っている。

御者らしき男は地面に倒れ、動かない。

二人が幌をかけられた商人用の馬車から離れようとしないうことは、中の様子はわからないが、おそらく誰かが乗っているのだろう。

「——ゴ布林！」

一体一体の戦闘力はさほどでもないが、守る二人の男に対し、ゴブリンは40体ほどで攻めては引き、また攻める。

数で押す波状攻撃に、男たちは翻弄され、ひどく疲労しているように見える。

装備からすると傭兵か、冒険者か。

一人一人はさほどなまくらには見えないが、とにかく数が多い上、御者をやられて逃げるに逃げられないらしい。

シュウとサラは、それぞれの獲物を抜いて左右に別れて斬りかかった。

早足の靴の効果か、通常では考えられないほどあつという間に現場にたどり着く。

「フンっ！」

およそ普段とはかけ離れた裂帛の気合いを放ちながら、サラは両手大型剣のドラゴンスレイヤーを横薙ぎに一閃する。

鈍く黒い色に光るそれは、一振りですべて4-5匹のゴブリンを両断し、激しい血しぶきを周囲に散らしていく。

シュウも、素早い身のこなしから抜き身の日本刀を縦横に振り抜き、あつという間に7匹のゴブリンを斬り伏せている。

思わぬ援軍に一瞬あつけにとられた警護の男たちも、すぐに状況を悟ると、ゴブリンに伐って出ていった。

ほんの一瞬で攻守が逆転したのを悟ると、あつけないほど潔く、ゴブリンたちは逃走を始めた。

生まれて初めて体験する血と臓物のひどい悪臭の中、シュウとサラは、こみ上げる吐き気をこらえ真っ青な顔をしながらも、襲われていた男たちのほうへ戻った。

黒い出で立ちのシュウはまだしも、白銀のプレートアーマーに白い肌をしたサラは、返り血を浴びてすさまじい外見になっている。

その様子は、助けられた男たちでさえ言葉を失い、ややもすると

彼らさえ怯えさせているように見える。

「大丈夫ですか？」

シュウが声をかけると、呪いから解かれたかのように男たちは生気を取り戻した。

「あ、ああ。助かった、感謝する」

「サラさん、その人見てやってください」
道に伏せたまま動かない御者を差しシュウがいうと

「あ、うん……」

まだ右手に血まみれの剣を握ったまま呆然としたサラは、のろのろと倒れた男に顔を向けた。

これはダメだな。シュウはサラをみて直感した。

「すいませんが、その人お願いできますか？」

シュウは警護の男たちに声をかけると、荷馬車の中を覗き込んだ。中には、恰幅の良い商人風の男が一人、がたがたと震えながらうずくまっていた。

「すいません」

声をかけるとびくっと飛び起き、シュウを見て、また固まった。

「何か拭くものお借りできますか？」

シュウがいうと、やっと意味を理解したのか、柔らかそうなタオル大の布を何枚かくれた。

シュウはそれで顔をぬぐったが、なかなか血糊が拭えないので、やむを得ずサラの手を引きながら河原に降りていった。

川で手を洗い、顔を洗うと、やっと人心地つけたシュウは、そのまま布を水に浸すと、サラを石に腰掛けさせ、顔と手をぬぐってあげた。

「サラさん？大丈夫ですか？」

「え？うん」

サラはまだ心ここにあらずといった呆然自失の状態だった。

シュウは、サラの手から剣をはぎ取ると、濡れた布で血糊を拭き取り、乾いた布でから拭きして、サラの腰の鞆に収めた。

そして、サラの顔を胸に抱きしめて、そっと耳元でささやいた。

「サラさん、終わりましたよ。もう大丈夫です」

サラはなにも答えず、ただシュウの腰を力一杯抱きしめた。

「なあ、あの二人何者だろう？」

助けられた男たちのうち、右側にいた若干若い男が、左の大柄な年配者に小声で話しかけた。

「わからん」

大柄な男は、食い入るように見つめていながら、興味なさそうな声色で素っ気なく答えた。

「装備も腕も半端じゃない。だのにあれは、初陣のあとの新米みたいな……」

「わからん」

今度は明らかに不快感を漂わせながら、大柄な男は若者に振り返りいった。

「なににせよ、俺らに取っちゃあ、命の恩人だ」

その様子は、街からも見えていたのだろう。

やがてしばらくすると、街の護衛らしき男たちが20人ほど、連れだってこちらに駆けてきた。

彼らに紛れ、シュウとサラもゆっくり街のほうに歩みを進める。

ひどい手傷だが、御者の男もなんとか命を取り留めたようで、今は馬車に運ばれ、揺られながら街に向かっている。

「おまえさんたち、何者なんだ？」

街から駆けつけた男たちのリーダーらしき貫禄のある男が、シュウに尋ねた。

「あの腕前はすさまじい。なににせよ助かった、礼を言う」

シュウは曖昧に笑いながらその礼にうなずき返した。

「すいませんが、とにかく体を清めたいし、休みたいんです。今日は朝からなにも食べてませんし、一日歩き通しで疲れてるんです」
シュウは、並ぶと頭ひとつも高いサラの肩を抱きながら、リーダー風の男にいった。

「任せてくれ。宿と食事、風呂の手配は俺たちです。おれはガイラス。おまえらの名前を聞いていいか？」

「僕はシュウ。こっちは、サラです」

「格好からすると冒険者か？」

「訳あって旅してます。特に冒険者というわけでもないんですが」
「そうか。とにかく歓迎する。旅といったが、やはり王都を目指してるのか？」

「ええ、まあそうですね。急ぐ旅でもないのですが」

勝手がわからないので、シュウものらりくらりと歯切れが悪い。
「ならゆつくりしていつてくれ。ようこそ、レリウの街へ――」

レリウは、小振りながらしつかりとした外郭を持つ都市だった。
人口はさほど多くはなさそうなものの、暮らしぶりからそこそこの地力があるようにも見える。

シュウもサラも、この世界においては一財産というにふさわしい金銀を持っているので、金の面での不安は、多分さほどないだろう。
反対に、それらを狙われる方がよほど恐ろしい。

まあとにかく、ここの、この世界の様子をしばらく学ばねばならない。

シュウは、まだ茫然と竦んだままのサラの肩を抱く手に力をこめ、ガイラスの招きに応じ、街の中心近くにある一軒の宿屋へと向かっていった。

ガイラスの顔なじみらしい宿の女将が、シュウとサラの血まみれの姿に一瞬肝を冷やしながらも、すぐに事情を悟ったか、風呂のお

湯を用意しに走り回った。

女将に、誰かサラの入浴の介添えを、と頼むと、何を心得たのか、「任せておきな。こう見えてもあたしは若い頃、エルナー様のお屋敷に奉公に上がってたんだ」と大きな胸を叩いて見せた。

サラの容姿と出で立ちから、女将は、サラがやんごとなきご身分だとも思っただろうか。まあ問題になる誤解でもないので放っておく。

金はいくらかとシュウが聞くと、

「まあ今日のところは奢おごられてくれ」

とガイラスが大きな口を開けて笑った。

人間、現金なもので、風呂に入り、身なりを整え、食事をすると、胸にわだかまった嫌悪感より、疲労と眠気が勝っていく。

入浴中の様子を女将に聴き、また、先ほどの食事の様子を見ていたシュウは、サラがかなり参っている事をひしひしと感じた。

「サラさん、じゃあお休みなさい。なんかあったら隣にいますから」シュウはそう声をかけると、自室に戻った。

サラの精神がダメージを受けるのはわかる。

正直、シュウにとっても先刻さつぎのあれは正直、堪こたえた。

手に伝わる肉を切る感覚。噴き出す血。生暖かいそれが自分の顔に、服に、手にこびりつく。さらに、あの血と臓物の匂い。

魔獣ゴブリンとはいえ、生き物の死にもものぐるいの叫びと、断末魔のうめき。

寝るしかないな。シュウは布団の中で苦笑する。

ふと違和感を覚えて眼を開ける。

陽が落ちてからもどこかしら喧噪の絶えなかったレリウの街も、ようやく寝静まっているようだ。

自分の布団の右側に誰かがいるのに気がついて顔を向ける。

そこには、しどけない寝顔をしたサラがいた。

どうしたんだろう。怖くて一人で寝られなかったのだろうか？

ただ、シュウも今日はさすがに限界だった。

空腹と疲労、そして緊張。

それらから解放された肉体は、思考さえ許さないほどシュウの意識を睡眠へと引きずり落とす。

あれから街までずっとそうしていたように、せめて、サラの肩を

抱いてあげよう。

再びシュウは、深い眠りへと戻っていった。

「おや、夕べはお楽しみでしたかね」

「……それどころじゃありませんでしたよ」

にやりと笑う女将に起こされ、シュウはゆらゆらと起き上がる。

まだ布団では、サラが寝息を立てている。

「ガイラスとグレイズが下に来てるよ。あんたに話があるようだが、後にさせるかい？」

「グレイズ？」

「ああ、あんたが昨日助けた商人だよ」

「ああ……着替えるから待ってもらっていいですか？」

「あいよ」

女将は、水を張った洗い桶に新しいタオルを置いて出て行った。

シュウは、昨日洗濯を頼んでまだ帰ってこない羽織袴の変わりに、別の羽織袴で身なりを整え、洗い桶で顔をすすぐと階下に降りていった。

「おはよう、シュウ」

ガイラスが、一階の食堂風になっている広間のテーブルに腰掛け、シュウに声をかけた。

「おはようございます、ガイラスさん」

「おはようございます、昨日は危ないところをお助けいただき、誠にありがとうございます」

例の恰幅のいい商人、女将がグレイズと呼んでいた男が、おずおずとシュウに声をかけた。

「いえ、たまたまですし、おかげで昨夜は私たちも助かりました」
半日以上無人の草原をふらつき、食うや食わずだった一日の終わり

にしては、非常に心地よい風呂と寝床だった。生き返った気がする。招かれるまま座り、シュウは、女将の心づくしの朝食を食べながら、二人の用件を聞くことにした。

「実は、シュウたちにグレイズと一緒に王都まで行ってもらいたいと思ってさ」

ガイラスはそう切り出した。

早い話が、昨日の立ち回りを見ての用心棒、ということらしいのだが、シュウは、サラの様子が気になってあまり気乗りがしなかった。

王都に行くのは心が惹かれるのだが、別に急ぐ旅でもないし、それよりゆっくりサラが心を落ち着かせてくれた方がよほどありがたい。

いち早くその表情を読み取ったグレイズが、困ったように目線でガイラスを促した。

「ここんところあまり魔物に出くわすこともなかったんだが、昨日のあの騒ぎでさ」

こいつがひどく不安がってるんだ。とガイラスはいう。

「それに、あんたらもし王都を目指すんだったら、一石二鳥じゃないかと思ってな」

まあ確かにそれはその通りなのだが。

「それはそうなんですが、僕たちも誰かと約束があるわけではありませんし、サラの調子が戻るまで、ここで休んでいたい気もするんですよ」

すると、今まで黙り込んでいたグレイズが、こちらを窺いながら話し出した。

「で、でしたら、シュウさんだけでもいかがでしょうか？」

グレイズがいうには、普段であれば、街の警備の若いのが数人で、充分まかなえる護衛なのだという。

だが、昨日、ここいらでは数十年ぶりになるゴブリンの集団での奇襲に遭い、グレイズも、護衛の面子も肝をつぶしているのだという。

だが、人口もそれなりにあり、人の往来も活発なレリウにとっては、物流の停滞は非常につらい。

そこで、シュウやサラといった凄腕の冒険者が滞在している今、ガイラスにもう1台馬車を仕切ってもらい、2台で王都まで大量に必需品を買い出しに行きたい。

というのがグレイズとガイラスの考えらしい。

「出立の予定はいつですか？」

「明日、あるいは出来るだけ早い方がいいのです」

少し相談します。シュウは告げると、それっきり黙って食事をした。

さすがにおながが空いたのか、サラは昼前にやっと起き出してきた。

どうやら確信犯だったらしく、シュウの布団に潜り込んだことは全くノータッチだった。

だったら、明日から同室でもいいかな、とシュウは思う。

とりあえず、1階のフロアのテーブルで、サラの食事が終わったあと、先ほどのガイラスたちの頼み事をサラに相談してみた。

「また、昨日みたいな事になるのかしら」

サラの口調は静かだったものの、明らかに気乗りがしないことは明白だった。

「じゃあ、僕一人で行ってみようか？どちらにせよ一度王都ってところの様子は見たいし。サラさんはその間、ここでゆっくり街とかを見ていてくれればどうかな」

「えっ……」

「片道10日くらいかかるかも知れないみたいな話だったから、ま

あ20日くらいしたら帰ってこられると思うけど、いいかな？」

「……」

サラはうつむいてしまい、なにも話さなくなってしまった。

「とりあえず、気分転換に買い物に行きませんか？」

シュウが提案してみる。

「買い物？」

サラがあまり気乗りしないような口調で返すと、シュウは小声でサラに耳打ちした。

「下着、とか」

サラは真っ赤になりながらうなずいた。

小振りながらも、レリウの街は活気のある良い街だった。

縫製の技術はあまり良くないのか、服や肌着のたぐいはデザインも機能性も良くなかったが、二人ともそうした手持ちが全くなかったのも、ここで10着以上のストックを買いそろえた。

そもそも、VRMMOの世界では、全くと言っていいほど下着の必要がないために、アイテムとして一切持っていないのだ。

シュウがサラにいったら即理解していたので女性用もそうなんだろうが、とにかく、パンツにゴムが使われていないために、使い勝手というか履き心地がひどく悪い。

裁断も、おそらく立体裁断になっていないのだろう。上着に干渉してごわごわした肌触りなのが残念だ、とシュウは思った。

だがまあ、ないよりはマシなのである。

その後、武器屋や防具屋を見て回った後、まだ少し早いが、二人は宿に引き返した。

武器や防具は、めばしいものがなかった。そもそも二人は、この世界の常識からいったら非常に高性能な品々を大量にストックしているから、まああらためて買いたいと思えるほどの品がなかった

というのが本音であろう。

シュウたちは宿屋に戻り、女将に

「今日から相部屋にしたい」

と告げると、女将はすぐに了承した。

ベッドはツインがあったので、そうしてもらった。

料金のことを聞くと、ガイラスが払うと行って帰ったとのことで、価格のことを聞いても女将は答えようとしなかった。

あまり世話になるのは居心地が悪いので、シュウとしては本当は自腹で泊まりたかったのだが、やむを得ないだろう。

二人がそれぞれの部屋から移動をしているとき、女将がサラを呼び止めた。

「ねえあんた、凄腕なんだってねえ」

「……なんでしょうか？」

「一瞬でゴブリンを10匹くらいばっさばっさ斬っちまうんだってね」

「……」

「うらやましいねえ」

サラは、カチンと来たのだろう。女将をにらむと、小声で吐き捨てるように言った。

「何がうらやましいんですか」

「うらやましいさ。あんたはその腕であの坊やを守れるんだからね」
いままでの、サラをからかうような口調から一転し、女将はしみじみと言った。

「あんたちよと下においで。お茶でも飲んで話そう」

「あれ、どこに行くんですか？」

「女同士の話だよ。あんたは部屋でも片付けておいで」

サラと女将は、一回のカウンター奥にある厨房のテーブルに腰掛けた。

サラにお茶を勧めると、自分も軽くお茶をすすって、女将は話し始めた。

「もう20年になるかね。あたしの旦那も、よく頼まれちゃ護衛の仕事をしてたのさ。

だけどある日、あんたらと同じように、ゴブリンの大群に出くわしちまってさ」

死体はひどい有様だったらしい。

街の人間たちが大挙して搜索に出たものの、馬と荷は奪われ、4人分の死体が散乱していた。

「うちのなんか、頭と足がなくなってたし、いくら探しても見つからなかったねえ。

内臓もすっかりなくなって、ぽっかり穴があいてるようだったよ。食われちまったか、どうしたもんか」

そこで女将は、サラをじっと見つめた。

「あんたは、そういう奴らと戦ってるんだ。あの日、あんたらがいなければ、あいつらは、奴らにそうされてただろうさ」

「……」

サラには、とっさに返す言葉が浮かばなかった。

「あたしにあんたの腕があったなら、亭主を一人で行かせたりしなかったろうね」

そういうと、女将は自分の茶碗を流し場ですすぎ、勝手口から表に出て行った。

夕食の時間になると、再びガイラスとグレイズが宿屋を訪ねてきた。

シュウとサラを交え四人で夕食を摂りながら、明日以降の予定を話したいようだ。

「僕も王都へ行ってみたいですし、とりあえず一緒にしようと思います」

シュウはそういうと、サラを窺った。

「私も、行きます」

何があったのか、サラはずいぶんあっさりとそういった。

シュウは、不思議に思いながらも、心の底ではサラの変化を喜んでいた。

やはり、20日以上も離れるのは心配だし、なんといっても、淋しいのだ。

どんな理由はわからないが、こんな世界に突然放り出された二人だから、どこかしら共鳴している部分があるとシュウは感じている。だからこそ、出来る限り常に一緒に行動したい、とは思いつつ、でも、まだそうサラに頼むことが出来ない歯がゆさも、シュウは抱えていた。

ガイラスとグレイズはとても喜んで帰った。

明日からは、二人にとって、新しい冒険が待っている。

翌朝目覚めると、サラはまたシュウのベッドに潜り込んでいた。洗い桶に水を張って持ってきた女将に

「夕べはお楽しみでしたかね？」

と聞かれて、シュウは

「はいはい……」

と答えた。

ガイラスとグレイズはすでに宿屋に来ていたので、サラとシュウでテーブルを囲み、朝食を済ませた。

別のテーブルには見覚えのある護衛が二人。そして初顔合わせになる護衛も二人。

つまり、ここにいる八人が、今回の道行きの顔ぶれということだろう。

食事が終わった後、早速二台の馬車に分乗し、王都への旅がスタートした。

王都へは、このまま川沿いの道を東に下り、5日ほど行ったところにあるライダンという都市から南東に進むようだ。

このコースの良いところは、なんといっても片道10日間、野宿が一度もないところだ。

いうまでもないことだが、野宿せねばならない道のりというのは、それだけでさまざまなリスクを抱えることになる。

夜盗、野獣、魔獣に、もちろん自然現象さえ。

だから、一見遠回りに見えても、一度ライダンまで出るコースを必ず取る、とグレイズはいった。

それはおそらく、とても賢い判断なのだろう。シュウは思った。

第一、野宿はリスクだけではない。疲労も大きいのだ。

旅においては、疲労も重要な課題になる。

疲れているとまず、ミスが多くなり、集中を欠くようになり、理性より感情で物事を判断するようになり、そして体調を崩しやすくなる。

おそらく、商人としてはそのどれもが致命的な失敗につながり得るだろう。

見た目はちょっとだらしないが、このグレイズという男、これではなかなか優れた商人かも知れない。と、シュウはちょっと彼を見直

していた。

ガイラスとグレイズという、この世界の二人の大人とよく話す機会を得られたのは、サラとシュウにとって非常に有益だった。

ガイラスは冒険者、グレイズは商人という立場で話してくれるというのもとても参考になった。

そして、サラもシュウも、この世界では相当な「強者」であるということもわかった。

「まず、あのレベルでゴブリンを蹂躪できるというのは、王家直属の騎士や、教会の聖騎士でもどれほどいるか」

ガイラスはいった。

「最初の一撃で何匹か狩り上げるといのはまあ^{りよりよく}膂力があれば誰だってやりうるけどな。あんたらは、たった二人で何十匹のゴブリンを駆逐したんだ」

「全滅させたんじゃないくて向こうが逃げ出したんですけどね」

なんだか持ち上げられてるような感じになってシュウは苦笑した。

まあいずれにせよ、MMO的世界の中でいったら、プレイヤーキヤラ的な強い存在はあまり多くない、ということだろう。実際問題、あんなのがごろごろ居るRPG世界というのは、ちょっと異常なのかも知からない。

それにしても、あの光の玉にはじめにいわれてはいたが、本当にこの世界は、リアルだとシュウは思った。

NPCとかモブとか呼ばれる存在が、一人一人意志を持って動いている。

それは、シュウやサラにとっては、気の紛れにはなるが。

サラにとっては、ここ数日の旅程は、こんな世界に巻き込まれた自分に『納得』させるための良い機会になった。

あの宿屋の女将の言葉は、確かな衝撃となって、サラを襲った。ただの近所の少年だったシュウと二人つきり、なぜこの世界に放り投げられたのかはわからない。

だが、もし——シュウがいなかったら。

サラは、見た目は頼りないこの少年のことを考える。

2コも年下で、自分より背も低くて、18歳になるのにどこか幼さがあって、なのに『かなり』自分よりしっかりしている。

宿屋の女将の言葉で自分が戦慄したのは、

「もし、シュウ一人行かせて、帰ってこなかったら？」

という事だった。

初戦の様子を見る限り、確かにシュウはかなりの使い手だろうと思う。

だが、寝込みを襲われたり、だまし討ちを食らえば、どんなに優れた者でも、容易に命を落としうるだろう。

自分が彼と共にいない状況で、もし彼が死んだら、自分はそれに耐えられるだろうか？

ここ数日、サラはシュウに甘え、夜中に彼のベッドに潜り込んでいる。

彼がそばにいないければ息苦しいほどに依存しているのだ。

それは精神的な依存であって、おそらくまだ恋愛感情ではない。

——本当にそうだろうか？

彼がこの世界の他の女に、もし恋をしたら。自分と行動を共にしなくなったら？

自分はそれに耐えられるだろうか。

それにしてもシュウは、ベッドに潜り込んだ私にいくらでも手を出すチャンスがあるというのに、まったく手を出そうとしない。

それどころか、幼い娘をあやす父親であるかのように、ただ優しく肩を抱いてきたりする。

それがうれしい反面、腹立たしくもある。

この少年は自分に全く、魅力を感じていないのだろうか？

サラは、シュウの気持ちを測りかねて少しいらだってもいる。

だが、この点ではサラも女性としてまだ成熟しきっていないのだらう。

シュウは、無意識であるにせよ、サラのこの行動——自分の布団に潜り込んでくることの真意を理解しているのだ。

だから、双方がはつきりと恋愛感情を成立させない限り、シュウがサラを女として抱く日はこないだろう。

シュウは無意識に恐れているのだ。サラと一時の気まぐれで男女の仲になったとしても、その後、つまらないいざこざで、彼女との関係が壊れることを。

穏やかだった旅に暗雲が立ちこめたのは、4日目の午後だった。

昼食を摂るために馬車を止め、護衛たちが火をおこし炊事をはじめた時に、シュウが、前方右側の森の気配に気がついた。

「ガイラスさん、サラさん」

火のそばに座る二人にさりげなく近づき、シュウは、その変化を告げた。

「囲まれています」

グレイズの馬車には今、王都で売るためにレリウで仕入れた特産品が満載されている。

その一部は、途中の経由地で売却し、代わりの商品を詰め込んだりしているが、多くは、レリウの産業である乳製品や加工肉などの食料品や皮、布などだ。

つまり、魔獣にとっては、食欲をそそる香りを常に漂わせながら

獲物たちが歩いていることになる。

だが、彼らにとって、何日か前に起きた衝撃を引き起こした『人間』がそこにいることが、ここまで彼らを襲えない理由だった。

そこで、彼らは再び数に頼ることにした。

さらに彼らは『知性』に勝る仲間を引き入れることにも成功した。オークという。魔法も使え、知恵も人間に引けをとらず、そして戦闘力では人間以上の存在を。

オークは、ゴブリンの獲物が、通常の倍にも当たる物資を積み込んで旅をしている事を見抜いていた。

おそらく、よほど警護に自信があるのだろう。

だが、数日様子を窺っていたが、一行ははずか8人。

こちらには、魔法が使えるオーク5人。それぞれが魔法のほか、弓や剣も使える。

この5人でも、あの8人を蹂躪しきれのではないかとオークは踏んだ。

さらに、100匹を超えるゴ布林が集まっていた。

この先、ライダンを超えると、人間たちの軍隊が存在する。だが、ここで襲えば、決着が付く前にライダンから人間どもが駆けつけることは無理だろう。

オークは、襲撃を決意し、まずゴ布林に前後をふさぐことを指示した。

そして、ほかの4匹のオークに作戦を与えた。

「前後を囲まれてる。ゴ布林だな。えらい数だ」
ガイラスはいった。

護衛の男たちに火を始末させ、グレイズを馬車に避難させる。

「さて、どう戦おうか」

ガイラスは、シュウを見た。
「殲滅するしかありませんね」

シュウはため息混じりにいった。

「馬車ではたぶん突破は難しいでしょう。」

ならば、まず行く手をふさいでるゴブリンを殲滅して、そのあと馬車を進めながら後ろから来るゴブリンを防ぎながら、ライダンに向かうしかないでしょう」

「そうだな」

「ライダンにはあてになる戦力はあるんですか？」

「こっちの異常に気がつけば、100人近い兵は出せるだろう。だが、来るまでにはかなり時間がかかる」

こちらの護衛のうち、二人には馬車の御者をしてもらわねばならない。

もう二人は、前後で先走りのゴブリンの始末をしてもらうとして、左右に残すのは、サラとガイラスになるだろう。

とすると。

「ガイラスさんとサラは左右で馬車を守ってください。前後には一人ずつ。馬車はいつでも走れるよう、御者を付けて待機してください」

「わかった」

「サラさん、だいじょうぶ？」

「もちろん。私も一緒にいなくていいの？」

「僕の殲滅が遅れたら、後ろから来るゴブリンが間に合わない。だからサラさんお願い」

「わかった」

「ガイラスさんは極力、馬車の周囲を離れないでください。前が片付いたら馬車に乗ってください」

「おう、たのむ」

「じゃあ、行きましようか」

シュウは、腰に刀を差したまま、ステータスを開いて、一降りの長刀を取り出した。

その光景を、ガイラスは茫然と見た。

「な、なんだそりゃ…」

シュウが取り出したのは、刃渡りが2メートルもある長刀。斬馬刀だ。

見た目こそ美しい日本刀のそれだが、刃渡りに加え、柄の部分も1メートル近くあるそれは、禍々しささ^{まがまが}え漂う銀光を放って、見るものに存在感を与える。

抜いた鞘だけをアイテムガジェットに戻し、シュウは数歩前方に進み、斬馬刀の峰を右肩に乗せて担いだ。ガイラスはサラに、茫然としつつ尋ねた。

「おい、今あれどっから出したんだ？」

サラは、この世界にアイテムガジェットなどというものは存在しないことを知らない。その質問の意図がわからなかったので、答える代わりに、自分の持ち場に歩き出した。

「なんだか、本当にすげえな」

ガイラスは、理解することをあきらめ、自分の腰にある両手剣を鞘から引き抜いた。

シュウは、前方にゴブリンの大群——およそ50匹——が集結するのを歩きながら待った。

そして、完全に街道を阻む形で包囲を完成したゴブリンに向かって、一気に駆けだした。

足に履く早足の靴が、人間離れした速度をシュウに与える。

ゴブリンたちが一瞬、虚を突かれた瞬間。肩に乗せていた斬馬刀を右下段に持ち替え、シュウは、立ち止まった。

止まった慣性を一気に刀に乗せ、シュウは斬馬刀を横薙ぎに振り切った。

間合いに入ろうとした周囲のゴブリンが10数体、その一閃で肉塊と化した。

左に振り切った斬馬刀を返し、シュウは左手の一群に向かって走

った。

粗末な武器を手にしたゴブリンたちは、一瞬で目の前の光景に恐慌した。

浮き足だった左翼のゴブリン20体ほどを、シュウは斬馬刀で刈り取る。

右翼のゴブリンはすでに潰走をはじめている。

ズシャ。

その瞬間、激しい殺気がシュウを襲った。

ほんの一瞬よけきれず、痛みが脳髓まで駆け上がった。

「ぐっ」

とっさに右手で脇腹をさわると、服が裂け、皮膚にも一閃の切り傷が付いていることに気がついた。

「魔法使いがいるぞ！」

シュウは50メートルほど後方の仲間にかんだ。

「オークだ！」

前の馬車の御者をしている護衛が悲鳴を上げた。

「くそっ。最悪だ」

魔法を使うオーク。それはもはや、商隊の護衛風情が立ち会える相手ではなかった。

王軍の騎士や魔術師が一軍を編成して戦うべき相手である。

ガイラスは、全滅を覚悟した。

「ガイラスさん、サラさん、馬車に乗って！」

シュウは斬馬刀をアイテムガシエットに放り込み馬車に駆け寄ると、指示を出した。

前後を守っていた護衛も馬車に乗せ、御者の二人に馬車を出すよう命じた。

「サラさん、二台の馬車にレジスト出来る？」

「大丈夫！」

「じゃあお願い」

後ろの馬車の御者台にサラを乗せると、シュウは一人その場に残った。

背後から襲いかかろうと駆けだしたゴブリンの一群を殲滅するため、再びアイテムガジェットから斬馬刀を取り出す。

オークたちは、目の前で起こった戦闘を、啞然と見守っていた。だが、馬車が逃げはじめたことですぐに正気を取り戻した。

馬車を止めるなら、馬を殺すのが手っ取り早い。

前方に二手に分かれた4匹のオークたちは、自分たちに向かってくる馬車の馬めがけ、＜ウインド・カッター＞や＜ファイア・ボール＞の呪文を唱えた。

だが……。

サラはすでに、＜レジスト＞を完成させていた。

前方から飛んでくる＜ファイア・ボール＞と＜ウインド・カッター＞を見て、ガイラスは、あと数瞬で自分が死ぬことを理解した。隣で御者をする護衛の男も同様に、あきらめに似たため息を漏らしていた。

しかし、目の前でそれらの攻撃魔法が、障壁に当たって碎けるのを二人の男は見た。

レジストされた自らの魔法を見て、4匹のオークは冷静さを失った。

自らの限界まで、彼らはさらなる攻撃魔法を紡ぎ出した。

馬車の周囲は、乱れ飛ぶ魔法とそれが碎ける残滓ざんしで、輝くほどきらめいた。

恐怖で、馬たちはすくみ上がっていた。その中を、サラが淡々と歩いていった。

ついに、4匹のオークの魔力が尽きた。

巻き上がる粉塵ふんじんと魔力が晴れると、美しい金髪の女が、自分たちに向かってゆっくりと歩いてくるのが見えてきた。

オークたちは、今起こったことなど忘れ、あの女を征服したいという純粋な欲求に捕らわれた。

——あの女を組み伏せ、征服し、陵辱し、所有したい。

光り輝く白銀のプレートメイル。

手には、魔力で金色に光り輝くロング・ボウ。

彼らが心の底から忌み嫌いつつ、しかし自分らに隷属させたいと心から欲する、あのエルフ族に似た人間の女。

オークたちは、腰の刀を抜くと、サヲを捕獲しようと駆けだした。ほんの一瞬前の力量差など、もはや彼らの思考からは欠落していた。

50匹のゴブリンと1匹のオークは、戦鬼のように立っている一人の少年に殺到した。

あれを倒せば後はどうにでもなる。

みたところ、あの小僧だけがこの商隊の戦力なのだと、指揮するオークは直感していた。

ゴブリンたちが奴を組み伏せたら、それらごと破碎してくれる——。

オークは、魔法の準備をしつつ、その瞬間を待った。

50匹のゴブリンたちは、無秩序にただ一点。シュウに群がった。だが、ただ一匹としてシュウに触ることは叶わなかった。

シュウは、右足を軸に、斬馬刀を横薙ぎにして数回、回転した。

その瞬間、残ったオークは、<ファイア・ボール>と<ウインド・カッター>を、その光景の中心に向かって、全勢力で交互に打ち続

けた。

周囲に積み重なったゴブリンの残骸は、それらの魔法でなおも粉砕され、一帯は血潮と肉片で赤黒く染まっていく。

流れるように自然な所作で、右手側の2体のオークの頭を、サラは射抜いていた。

サラの手にしたロング・ボウは、炎の祝福を持ったもので、射た矢が敵に当たると、ファイアボールと同等の魔法を発揮する。

サラに射抜かれたオークの頭は爆碎し、頭を失った体はそのまま崩れ落ちた。

左手の2体は、その隙に一気に駆け出し弓の間合いの内側に入り、両サイドからサラを捕らえにかかった。

サラは惜しげもなく弓を投げ捨て、腰の剣を引き抜き、迫るオークたちを呆気なく斬り伏せた。

——シュッ。

剣を振り血糊を払い、足下の弓を拾い上げると、サラは馬車のほうに戻っていった。

魔法を打ち終わった瞬間、オークは、一瞬上空に黒い影を見た。そして、それが、オークの知覚したこの世の最後の光景だった。

右手に刀を、左手に脇差を握ったシュウが、5メートル近い距離を一足で跳躍し、3メートルほど上から一気にオークを斬り伏せた。オークの放った火と風の魔法は、このふた振りの刃に施されたそれぞれの祝福によって、すべて切り捨てられていたのだ。

ゴブリンの肉塊を体に浴び、眼だけが白い赤黒い姿のシュウは、刀を払うと鞘に戻し、やっとアイテムガジェットからタオルを取り

出し、顔に付いた肉片と血糊を拭き取っていった。

逃げ出したほんのわずかなゴブリンを除き、90以上の魔物が、
たった二人の人間によって壊滅した。

ライダンには、王国兵の詰め所があった。

しっかりした城郭が街を囲む大型の都市で、門構えも鉄製のしっかりした跳ね橋になっていて、当然、堀も備えられている。

人口も、レリウの数倍はありそうな雰囲気だった。

そのライダンの王国兵の詰め所で、シュウとサラたち一行は、オークとゴブリン等との戦闘の詳細を訊かれていた。

一行八人が口をそろえ、シュウとサラ二人で、5匹のオークと100匹前後のゴブリンを倒したと報告したので、この街の駐留軍の隊長は、彼らを異常者だと思った。

常識で考えてあり得ない戦果だし、そもそも、そのような大群の目撃情報も入っていなかった。

もしかしたらなんらかの幻術で、商隊から金でもせしめるたぐいの詐欺だろうか？

いずれにせよ隊長は、ほかの六人は早々に開放したものの、シュウとサラは未だに、詰め所に禁足していた。

小川で身を清めたものの、まだ入浴にありつけていないシュウは、昼飯を抜いていることもあって、夕飯時のこの時間までのらりくuriとここに留められていることに腹が立ってきていた。

シュウが腹を立てているので、つられてサラも不機嫌になりつつある。

状況を確認しにいった斥候たち五人のうちの一人が、青ざめた顔で帰ってきた。

「オークの死骸は五匹。ゴブリンはあまりに多くて確認が出来ません。」

あたりはすさまじい状態で、早急に片付ける必要があると思います」

斥候の言葉を聞いてもまだ信じられない隊長に向かって、シュウ

は立ち上がりいった。

「ではこれで。用があるなら宿までお越し下さい」

宿で入浴し、やっと人心地ついたシュウは、食堂で夕飯にありつくど、先ほどの隙はどこへやら、実ににこやかな表情になっていった。

その様子をサラは、微笑みながら見ていた。ガイラスは、やれやれ、と肩をすくめた。

サラの視線に気づいたシュウは、恥ずかしそうに笑い返しながら、おかわりした肉にかぶりついている。

「ずいぶんかかってたが、なに訊かれてたんだよ」

「いやなんにも。ただ足止めされてた感じかな」

ガイラスは心底不思議そうに、
「褒められこそしても、疑われるようなことはなにもないのにな」といった。

「まあ僕たちどっかに所属してるとか、そういう後ろ盾もないですからね」

そんなもんかね、とガイラスは相槌を打ったが、まあとにかく夕食はそんな感じでお開きになり、一同それぞれの部屋に下がった。

ところで、サラとシュウのベッドはついにダブルになった。

もうどうせツイン取ってもサラがこっちに入ってくるなら、最初から広い方がいいでしょ、というど、あっさりサラも同意したからだ。

だが、はじめは両サイドでもじもじ寝ているくせに、朝が来るとシュウの背中にぴったりくっついて寝ているので、結局シュウの左手側はぎりぎりベッドの端っこという狭い有様だった。

王都まで残り五日の旅程は、これまでと打って変わって楽なものだった。

道の手入れが行き届いているから馬車の揺れも少ないし、人通りも多く、魔物が出そうな藪や林などもない。

同じ方向に向かう商隊も多いので、警護の人数も自然と多くなる。もうここから先ではまず襲われることはないだろう。

結局のところ、昨日魔物たちに襲われたのも、あれが奴らにとって、最後のチャンスだったということなのだろう。

街道沿いには、昼食が摂れるような規模の集落もあったりする。ライダンと次の街のちょうど中間あたりに、商隊目当てだろう、かなり立派な食堂があった。

「この辺で昼にしましょうか」

グレイズが声をかけると、一同、ほっと気をゆるめた。今日は美味しい昼飯にありつけそうだ。

うまい飯は人の心を豊かにする。

午後の旅路に出立したグレイズの商隊一行は、しばらくすると、軽装の騎乗兵に足止めされてしまった。

「レリウのグレイズ一行か？」

「はい、そうでございます」

「護衛のシュウとサラと申すものは？」

「僕たちですが……」

「おまえらに警備隊長が話があると仰せだ。急ぎライダンまで戻るように」

それを聞いたシュウの顔がみるみる赤く染まっていく。

「僕たちには用はありません。話があるなら次の街まで来るように、隊長とやらにお伝え下さい」

「貴様、逆らうか？」

「逆らう？」

ギリリ、とした闘気がシュウの全身からあふれた。

まるでその見えない闘気に当てられたかのように、騎乗兵の馬が怯えて数歩下がった。

「何を言っているのか僕にはさっぱりわかりませんね。」

こちらは商隊の警護で王都に向かっていているわけです。呼び戻されれば商売にはなりませんね。

それに、なんの用件で呼ばれているのかもわからず、いちいち引き返すことも出来ません。お聞きしますが、何用ですか？」

「し……知るか！ とにかく隊長が呼びだ。おとなしく従った方が身のためだぞ」

「そんな馬鹿げた命など聞けませんね。とにかく、あなたは戻ってお伝え下さい。用があるならそちらから来いと」

「き……貴様っ」

騎乗兵は、思わず腰の剣に手を伸ばした。

「いいか、抜くなよ」

シュウは、腰の刀の鯉口を切って構えた。

「抜けばこちらも護身のために抜く。おまえのような下っ端が、国の威信を笠に着て何人かかってこようと、負ける気はしない。おまえより、昨日斬ったオークのほうが、よほど齒ごたえがあったと思うぞ」

シュウは、位押しで威圧する。緊迫した雰囲気の中、騎乗兵の気が萎えたのを察し、シュウは構えを解いて、鯉口にハバキを収める。キン、という澄んだ金属音が、周囲の固まったような空気を一気にゆるませる。

「いいだろう、せいぜいレイラズで首を洗って待っておれ」

言い捨てると、騎乗兵は馬を返して走り去った。

「おいおい、いいのか？」

ガイラスは、今になって吹き出した冷や汗をぬぐいながらシュウに話しかけた。

「構いません。それより、なんか雲行きがおかしくなってきました。グレイズさん」

不安そうに馬車から顔を出したグレイズにシュウは話しかけた。

「はい」

「この先、僕たちが一緒にいることでもしかしたら、要らない面倒ごとに巻き込んでしまいかねないですね。」

もうあまり危険がなさそうですし、僕たちはここまでということにしませんか？」

「いいえ、とんでもない。わずか数日で二度も命を救われた身です。どうかお気になさらず」

意外にもグレイズは、シュウのその申し出をそういつて断った。

「いえ、やはりレイラスから別行動にしましょう。」

あなた方は、もめ事を恐れ私たちを解雇したといえ、申し開きも立つでしょう」

シュウは一瞬考え、そう皆に伝えた。

「僕たちは、レイラスであの連中を待ちます。もし良かったら、良い宿を教えてください」

「まあ、じゃあレイラスまでは一緒に行こう」

ガイラスがそういったことで、再び一同は動き出した。

周囲の商隊も、どうしていいかわからず立ちすくんでいたが、釣られるように動き出した。

レイラスでは、あえて一行とは別の宿を取った。

なんらかのトラブルにまで発展した場合、同じ宿では飛び火する可能性があるためだ。

宿の前で別れるとき、シュウとサラに、グレイズはそれぞれ金貨

一枚を謝礼として差し出した。

要らないというシュウに、

「商人は貸しは作っても、借りは作りたくないものなのですよ」と、笑いながら強引に、二人の手に金貨を握らせた。

「とはいえ、今回のことでは、大きな借りを作ってしまった」

「いいえ、僕が面倒だっただけです。グレイズさんたちをわがままに巻き込んでしまい、申し訳ありません」

「じゃあ俺たちは行くぜ。シュウ、サラ。」

もし、なんかあったら、俺んどこに来てくれ。まあ闘いじゃ全力に慣れそうもないが、なんでも相談に乗るぜ」

ガイラスも笑いながらいった。

今まで大人数だった夕食も、二人きりになるととたんに淋しくなる。

「サラさん、ごめんなさいね」

シュウは、ぼそっと、サラに詫びた。

「ううん、久しぶりに二人っきりになれたし、いいのよ」

サラは、気に病むシュウに笑っていった。

「わたしもなんか腹立ってたし、ね」

馬の足音が外から聞こえる。やっときたようだ。

「さあ、どんな騒ぎになるんでしょうね」

二人は食事をやめると、傍らにあらかじめ用意してあった得物を腰に佩いて、宿の正面から外に出た。

「シュウ殿とサラ殿とお見受けいたします。私は、ノイスバイン騎士団のアルノルと申します」

甲冑を着た偉丈夫が、店の正面に並んで立つ二人に、形の良い礼をして声をかけた。

「シュウです。こちらはサラ」

シュウも答えた。

「早速ですが、お二方には、こちらの手違いから、大変ご不快な思いをさせたようで、ライダンの者らに成り代わり、私からお詫びを申し上げます」

アルノルは、二人を前に頭を下げていった。

意外な成り行きにちよつとまどいつつも、シュウは気を許すでもなく、固い口調で応えた。

「謝罪を受け入れましょう。アルノルさん」

「事情は、グレイズ殿からお聞きいたしました。お仕事の上でも大変なご迷惑をおかけしてしまいました。そちらについてもお詫びいたします」

「わかりました。ところで、何かご用のようですが、私たちは食事の途中です。もしよろしければ、食事を続けてもよろしいでしょうか？」

再び宿に戻り店主に説明すると、主は了承してくれて、食事の続きをさせてもらえた。

同じ席を求めたアルノルを迎え、一同は、会話をはじめた。

壁際に、アルノルの配下らしき若者と少女の騎士が、気をつけの構えで立っているのが気に触るが、気配からして今のところ害意はなさそうなので放っておく。

先ほど食いつぶぐれた肉料理が出てきて、シュウはとたんに相好を崩す。

どこかしら緊張をしていたサラとアルノルも、それを見てふっと気がゆるんだ。

こんな表情をするときのシュウは、ひどく幼く見える。

もともと年齢より幼く見えるシュウだが、こうしてみると、まるで12―3歳の少年のようにも見えるほどだ。

「お二方にご迷惑でなければ、召し上がりながらお聞きいただきましたのですが」

アルノルは、沈黙していた方が気まずかろうと、切り出してみた。

「お願いします」

シュウは、まだ幸せそうな顔で肉をほおぼりながら応えた。

「まず、我々がこちらに來ましたのは、お二方をお招きしたいと、国王から命ぜられたためになります」

アルノルが二人にいうには、早馬で状況を報告された軍務卿が、とりあえず状況を宰相に伝え、それを王が聞き、いたく興味を示したのだということだった。

早速、そのものたちに会いたい、手配せよという話になったのだが、ライダンの者たちの不遜な態度によってこじれたことを知ったアルノルの部下が王都まで走り、そこで彼らがここまで來たのだという。

「なるほど、わかりました」

「お二方は馬には乗れますかな？　もし扱えるようであれば、明日、ご同行いただきたいのですが」

「サラさん、乗れます？」

「私は乗れます。シュウ君は？」

「いやちよつとわからないけど、もしかしたら大丈夫かも」

わからないというのも変な話だ、とアルノルは思ったが、まあとにかく、明日この二人のために馬を用意しよう、と考えた。

「お食事中失礼いたしました。それでは、明朝お迎えに伺います」
アルノルは、二人にあらためて礼をして、店を立ち去った。

「いやはや驚いた、お二人さん、何者ですか？」

騎士たちが立ち去ると、主が、これはサービスだ、とグラスに酒を入れてやってきた。

「いやただの商隊の護衛ですよ」

「いやいや、ただの護衛に騎士団長が挨拶にお見えにはならんでしょう」

「えっ、あの方そんなに偉かったんですか？」

サラが口を挟むと、主は、得たりとばかりに勢い込んだ。

「そうですよ、あの方は騎士団を統括する団長様です。騎士隊の隊長たちのさらに上。この国の護りの要のおかたです」

そうか、それは少しご無礼しちゃったかな、とシュウは思った。

しかし、昼間の不快感がまだ少しシュウの先入観として、まだ、この国のイメージを悪くしていた。

翌朝、3人の騎士たちが早朝から迎えに出てきた。

さすがに、乗れるかわからない馬に乗って、通常四日かかる王都への道のりに出るということで、シュウは、朝食はごく軽めに見てみた。

サラは普通に食べていた。たぶん自信があるのだろう。

昨晚、シュウが、馬に乗れるかわからない、といったのは、こういうことだ。

ゲーム内では、馬に乗ったことが何度もある。

だが、リアルでは、乗るところか触ったことさえない。目の前で見たことも、たぶん一度あるかというほどだ。

だから正直、わからない、ということだったのだ。

だが、意外なことに、鞍にまたがる姿からして、傍目にはシュウの身のこなしは見事なものだった。

「お、これは。大丈夫そうですね、サラさん」

「ええ……見事なものですよシュウ君」

サラはおかしそうに笑ったが、そういうサラも見事な乗馬だった。「ではお二方、参りましょう」

アルノルを先頭に、サラ、シュウ、そしてお付きの2名という順に、街道を南下し、一路、王都バインスタインを目指して走る事になった。

当初は、二人に気を使っていた騎士団長も、どうやら二人の馬の扱いのめどをつけたようで、けっこう本気で馬を飛ばし始めた。

馬車で残り3―4日ある距離をこの速度で行けば、馬が完全につぶれやしないか、と、シュウは余計な心配をしつつ必死で馬を御している。

見た感じ、サラが気持ちよさそうに走ってるのがシュウには憎らしい。

ひとつめの街には入らず、外周を大回りした。

街を通り抜けるよりおそらく、そのほうが速いのだろう。

ふたつめの街に入るとやっと、アルノルは馬の速度を落とし、通行人に配慮しながら街の中央まですすんだ。そこには駅があった。どうやらここで馬を乗り換えるらしい。

なるほど、あれだけ飛ばせた理由がわかった。

汗で真っ白になった馬を乗り捨てると、騎士団の面々は、おそらく自分の馬であろう、そこらとは比べものにならないほど立派な馬に乗り換えた。

シュウとサラにも、駅馬が新たに貸し出された。

王都に到着すると、一行は歩みをゆるめた。

今までとは比べものにならないほど巨大な城郭と都市。

正門からはいると、まっすぐ一直線に王城に向かって伸びている目抜き通りの広さと立派さに、シュウは息を呑んだ。

この辺は日本の城との違いだな。

シュウは感じた。

日本の城は、城下町を形成すること自体はこのような西洋風の城塞自体と変わらないが、攻め手が本丸にまっすぐ掛かれるような作

りにはまずしない。

見晴らしの良い道など作らないし、本丸に至るまで幾重も曲輪を用意して、適宜殲滅を謀れるような普請になっている。

物見高く周囲を見物しているうち、一行は王城の門に到着した。

王城の中に騎乗のまま招かれる。右手に馬屋があり、そこで一行は馬を下りた。

厩務を担当しているのだろう若者たちが、さっと駆け寄り、それぞれの馬を曳いていく。

「お二方、大変ご無理をさせてしまい、恐縮です。これから控えの間にご案内いたしますので、どうかしばらくおくつろぎ下さい」

騎士団長のアルノルはそう二人に告げると、若い二人を引き連れ、来た道を引き返していった。

代わって、いかにも侍従らしき壮年の男性がこちらに歩み寄ってきた。

「遠路のご来訪に感謝いたします。侍従長のクルトと申します。まずは旅の埃などを落とされますようお願いいたします」

いんぎん あいさつ
慇懃な挨拶をされた。

正直、風呂はありがたい。汗と砂埃ですごいことになっているからだ。

入浴後二人は、まあ謁見ということで、最も正装に近い服を選んだ。

とはいえ、シュウは黒衣の侍そのものだったが、サラは炎属性の赤いプレートメールの、兜以外のフルセットだった。

どうせ謁見前には取り上げられるだろうと、二人とも武器を持たずにいた。

しばらくすると、いったん席を外していた侍従長が再び戻ってき

て、謁見の準備が整ったと告げた。

これが謁見の間というものだろう。

荘厳な扉が両側から衛士によって開かれると、中は吹き抜けの天井。

幅広の赤絨毯が国王の王座の前まで一直線に敷かれ、その両側に、まず衛兵が、そして、王の近くには貴族らしき面々が起立していた。王は、二人が入った瞬間に王座から立ち上がり、歓迎の意を示した。

二人は、侍従長に押され、王の前まで歩みを進めた。

侍従長はそこで跪きうつむいたが、別にシュウもサラも、この王国の民でもなければ貴族でもない。

日本式の立礼、つまり、お辞儀をもって王に敬意を表した。

かたわらから、その無礼をとがめるように、あからさまな舌打ちをされた。

「サラ様、シュウ様をお招きいたしました」

侍従長が王に報告する。

「よく来てくれた。聞けば我が臣下がなにやら無礼を働いた様子。お詫びいたす」

「シュウと申します。こちらはサラ。お招きいただき光栄です」

シュウもしれっと返す。

「ライダンでの働き、礼を言う。臣民の憂いを除いてくれた功を労い、両名に褒賞を与える」

「ありがたき幸せに存じます」

横合いから、いっそ王より尊大そうな声で

「下がってよろしい」

と声がかけられたので、二人ともほっとし、

「失礼いたします」

と、とっとと退室させてもらった。

あれがたぶん、舌打ちの主だろう。

一緒に下がった侍従長に、しばらくここで待つようにいわれ、二人は控え室に腰掛けていた。

侍従長が退室してからしばらく経つが、なかなか戻る気配がない。早朝から馬を飛ばして午後までかかったために昼食を抜いていることもあって、シュウはほんの少し不機嫌なのだ。

早く開放してもらいたい。

「サラ殿、シュウ殿、お待たせして済まない」

ノックも無しに反対側から飛び込んできた男には見覚えがあった。王様だった。

「あらためて、よく来てくれた。予はノイスバイン王エカルド。よしなに頼む」

さすがにシュウもこれには肝をつぶした。

「形式張った招きをしてすまん。一応、ものには順序があるゆえな」

エカルド王はにやりとわらって、立ち上がった二人に椅子を勧めた。王の椅子を、後ろから付いてきたのであろう、例の侍従長が流れるようにさっと引く。

実によい呼吸で様になっている。

二人の椅子は、王の後ろから入ってきた3人の騎士のうち、アルノルの左右にいたあの若い騎士たちが引いてくれた。

二人も着席させてもらった。

「ライダンからの経緯はアルノルから聞いた。予からもあらためて詫びよう」

「いえ、すでにアルノル団長より丁寧なお詫びをいただきましたし、

先ほども、真っ先にお言葉をいただきました。どうか」

打てば響くタイミングで、シュウが応える。

「そういつていただけるとありがたい。だが、あの謁見でも、馬鹿者がそなたらに無礼な振る舞いをしておった。これも詫びよう」

「とんでもありません。私たちの礼が、こちらの礼にそぐわなかったのでしょうか。その気はありませんが、ご無礼がありましたらお詫びいたします」

「かまわん、そなたら、名前から察するに遠い異国の方であろう。処が違えば、作法も違うのが当然だ」

これでお互いのわだかまりは、ひとまずなくなった。

「そなたらはなぜ我が国に来たのだ？　話を聞くに、仕官や商いではあるまい」

一息入れて、王が話を継いだ。

「はい。私たちは、いろんな国を旅して歩こうとここまで参りました。たまたま、レリウで魔物に襲われている商人と出会いました、王都までの護衛を頼まりました」

「なるほど。そこで例のオークどもと出会った訳なのだな」

「そうです。あとはご存じの成り行きです」

「今後はどうするつもりなのだ？」

「数日王都で買い物などさせてもらい、その後、旅の行き先を決めようと思っています」

「そうか、ではこうしよう。そなたらに、予から旅の手形を進呈しよう。それと、そのような事情では物など送ったところで邪魔になろう。金で褒賞を贈るとしよう」

旅の手形、ということは、国境を越えるときにはなんらかの関所があるということなのだろう。これは二人にとって、最もありがたい贈り物だった。

「それは…それは本当にありがたく存じます」

シュウは、心から感謝した。

「最後にひとつ、予から頼みがある」

「なんでしょうか？」

「ここにおるアルノルと、一度手合わせを願えんだろうか？」
なるほど。二人の実力を見たいということなのだろう。

断っても良いのだが、あまりに王が嬉しそうにいうので、つい乗っ
てしまった。

「どちらとの手合わせをお望みでしょうか？」

王がアルノルを振り返ったのに釣られて、控え室にいるすべての者
の視線がアルノルに集まった。

「……サラ殿との手合わせを所望いたします」

アルノルはいった。

しまったな、躊躇しないで自分が承けると言えば良かった。

シユウは後悔したが、意外にも、サラは嬉しそうに即応した。

「謹んで、お受けいたします」

準備はわずか10分ほどで整えられた。

王は城の閲兵用のベランダから様子を見ることにしたようだ。

サラは、美しい葦毛の馬を借り、アルノルは、栗毛の馬を曳いて
きた。

サラは、例の炎属性のプレートアーマーのままだったが、今回は、
きちんと兜をかぶり、髪の毛を束ねて保護している。

二人は、どうやらジョストを行うつもりのようなだった。

ジョストというのは、典型的な騎士の競技である。

左右に別れた騎士たちが、一直線にすれ違いながら、一騎打ちで
勝敗を決する競技で、華麗で、豪快で、危険な闘いである。

非常に壊れやすい模造の木製武器によって争われる。

勝負は三本。

一回戦は馬上槍。次にバトルアックスで争われ、最後に、剣で勝敗を決める。

「かまえ」

充分に間合いを取った双方の中間に、騎士団員らしい男が立ち、勝負を預かっている。

「はじめ」

かけ声と共に、両サイドの騎士たちが一気に馬をトップスピードまでしごき上げる。

王の閲兵バルコニーから見て、右が深紅のアーマー、サラで、左が純銀のアーマー、アルノルだ。

どちらも、なんのためらいもなく馬を進めていく。

見ているこちらのほうが肝が冷える――。

シュウは不安で、顔をこわばらせている。

トップスピードに達した双方は、あっという間にその瞬間を迎える。

――ガキン！

激しい衝突音は、鎧の音だろう。

二本の馬上槍は、お互いなんの策も弄さぬまま交差し、双方が直撃となる一打を交差させた。完全なカウンターになっていたようにシュウには見えた。

1秒の間にも満たない刹那、バランスを崩し、アルノルが落馬する。

「なんと……」

王が驚きの声を上げるのを聴きながら、シュウは、ほっと胸をなで下ろした。

アルノルの許に駆け寄った団員が、ケガのないことを確認し、再度アルノルを馬に騎乗させる。

再び左右に別れた二人は、今度は得物をバトルアックスに持ち替え、合図を待つ。

バトルアックスも木製の模造品ではあるが、馬上槍よりは頑丈に作られているため、うかつに当たれば大けがや、最悪、命に関わるほどの危険がある。

「はじめ！」

審判が叫ぶ。

アルノルは、バトルアックスを頭上で器用に回転させ威圧する。単純で、効果的なパフォーマンスだ。

対するサラは、右手一本でバトルアックスを自然に持ち、淡々と馬を加速していく。

二人が交差するほんの一瞬前にアルノルはバトルアックスを長めに持ち替え、先手とばかりにアックスを横薙ぎにふるった。

大味なパフォーマンスの後だけに、その攻撃の鋭さは、見る者の息を止めるほどだった。

だが、サラはその軌跡を自分のバトルアックスで完全に防ぎ、そのまま押し返し、ついにアルノルの頭部に斧の刃先を当てていた。

圧倒的な力量差だ。技でもなんでもない。強引な、力の蹂躪。

落馬こそしなかったものの、完全にのけぞってバランスを崩したアルノルは不覚にも得物を落とし、2回戦も敗退。

最後の勝負は、剣による馬上試合。

これも木製の両手剣で争われる。

「はじめ！」

審判が叫ぶと、最後もお互い、馬を全速で走らせ、一気に剣をぶつけ合った。

だが今度は、サラは走り抜けず、馬の速度を緩めると、後ろから一気に襲おうと企てた。

だが、アルノルも見事な手綱捌きで馬を返し、サラが届く一足前に体制を整えていた。

そのまま失速した二人は、見ほれるほどの剣捌きで、お互いの剣と競り合っていた。

だが、やはり一合一合の重みはサラに分があった。

徐々にアルノルの乗っている馬が押されていく。

サラは、動きが大きくなったアルノルの剣を紙一重でいなす。

アルノルがほんの一瞬バランスを崩した隙を、サラは見逃さなかった。

激しい打着でアルノルの右手を打ち据えると、アルノルが剣を落とし、ここで勝敗は決した。

07 (後書き)

2011/11/26 シェイカーさんのご指摘で、記載ミスを修正いたしました。アドバイス、ご指摘、ありがとうございます。

「兩名、見事である」

試合後、再び王城に戻り、控え室に出頭したサラとアルノルは、王からねぎらいの言葉を受けた。

その後、中に金貨が詰まった革袋を、サラとシュウは受け取った。どちらにも、金貨が100枚ずつ入っているらしい。

その量がどのくらいの価値なのかは、まだこの世界での経済が全くわからない二人にはわからなかったが、おそらく、かなり過分な褒賞だろう、とは思った。

借りは作りたくない、といって護衛して命を救った商人のグレイズが二人に渡したのが、金貨一枚ずつだったのだ。

ちなみに、後に二人が知るところによると、金貨5枚もあると、この世界では一家が一年、不自由な生活が送れる程の価値のようだ。

「それでは予はこれにて。シュウ殿、サラ殿、本日はよく参ってくれた」

後のことはアルノルがよきに計らえ。

素晴らしい残し、王は去った。

シュウがアルノルに、城下でおすすめの宿の手配を依頼した。

アルノルは、例の若い騎士たちに何事かを命じていたので、今日の宿は安泰だろう。

「夕食まではまだ間があります。お二人は何かご希望はありますか？」

「どうやらアルノルは自ら案内役を買ってくれるつもりのようなだ。

「でしたら、世界地図とか、この近隣の国の情勢がわかるような書物を購入したいです」

「私は、服などの購入が」

シュウとサラは、それぞれの希望をいった。

「心得ました。それでは、シュウ殿は私をご案内いたしましょう。

サラ殿には、城の侍従をおつけいたします。女性同士のほうがよろしいでしょう」

街に出ると、さすが王都。これまでに通ったどの街にもない壮観な建築物が随所に広がっていた。

人口も、大きめだったライダンでさえ比べものにならない規模のようだ。

道行く人間たちの数でさえ、王都では、人いきれというにふさわしいほどの混雑を見せている。

スリが多いそうだ。すられてもこの混雑では、確かに捕まえるのは容易ではないだろう。

サラを案内しているのは、いわゆるメイドさんのような女性だった。

王室御用達の高級仕立て店に連れて行かれているようだった。

シュウは、目抜き通りらしき一角にある、書店に案内されていた。書店で書物を見たとき、シュウは、ずっと気になっていた懸念が解消され、ほっとしていた。

どうやらこの世界に連れ込まれたときに何かしてくれたようで、文字の読み書きが出来そうだ、ということがはっきりわかったのだ。シュウは、店内にある百科事典、地図、薬草事典、歴史事典、魔法事典などを手当たり次第に購入した。

そしてそれらをアイテムガジェットに手当たり次第放り込んだ。アルノルと書店主はあっけにとられてその光景を見ていた。

「シュウ殿、それは一体、なんなのですか？」

アルノルは、やっと言葉を紡ぎ出した。

「あー、えっと」

シュウは、どのように説明しようか頭を悩ませた結果、魔法ということにしようと思った。

「まあ、一種の魔法の道具です。持ち物を、ある道具を使って魔法の空間に閉じこめます。開いたときに取り出せるようになってます」店主とアルノルの目の前で、実際に世界地図を取り出してみせる。そして、また仕舞ってみせる。

二人は、理屈はわからないものの、仕組みは理解したようで、いたく感動していた。

書店主は、やたらとほしがり入手法を聞こうとかなり頑張っていたが、実際は、シュウたちにとってはゲームに付いていたただのアイテム機能にしか過ぎないので、全くわからなかった。

「いや、まあ秘匿を条件に譲られたものですので、私たちにもよく解らないんですよ」

そういうことにしておいた。

金貨5枚ほどの書籍をシュウは買いあさった。

次はどこに行きたいか、とアルノルが尋ねるので、シュウは、そういうえば、と思い立って、

「鍛冶道具の店に行きたい」

とアルノルに頼んだ。

「ここが工具屋です」

アルノルが案内したのは、本当にいかにも工具の店、というべき、乱雑な道具屋だった。

工具の店というのは、シュウにとってはどんな店でも本当に心が躍る。

なぜなのかわからないが、シュウは子供の頃から、文具屋や工具

屋、ホームセンターのたぐいが大好きで、何時間商品を見ていても飽きなかった。

だが、鍛冶屋道具を扱う店に来たのにはちよつとした訳があった。ゲーム中に身につけたスキルが、今のところ全部使えている。

ならば、冒険ギルド引退後にやっていた『鍛冶屋』が出来るのではないだろうか？

と思い立ったのである。

この世界の武器は、やはり使うと劣化する。刃こぼれもすれば、折れたり曲がったり。

そうしたものを鍛え直したり、研ぎ直せば、まあちよつと便利かな、と思ったのだ。

結局、砥石や工具類一式。紐やら針金やら革などの原材料。針や糸などを大量に買い、またアイテムガジェットに放り込んでおいた。「それはどれくらい収納できるのですか？」

アルノルはその光景を見て、またうらやましそうに尋ねてきた。

「さあ、試してないんでわからないです」

シュウは答えた。

アルノルの見たところ、ここや本屋で買ったものは、もう優に二部屋以上の大荷物になっているはずだった。

それらを魔具に収めてるとはいえ、もし重量があるなら、生半かな重さではないだろう。

だが、本当にわからないシュウは、聞かれても答えようがないのである。

「後は、日用品や旅の道具が欲しいんですが、それはサラさんたちと合流してからでいいですね。アルノルさん、馬車って買えますかね？」

「もちろん。私でよければ、よい馬を見繕いましょう。馬車は、中古であればすぐに手にはいるでしょう。どのような馬車をお望みで

すか？」

「商人ではないので、荷馬車は必要ありません。どれだけ値が張ってもよいので、寝泊まりに耐える馬車と、それを引ける馬が欲しいです」

「となると、旅芸人が使っているような馬車がよいのでしょね。わかりました」

馬と馬車はこちらで探しておきます。とアルノルがいうので、シユウは好意に甘えることにした。

荷物は実際はアイテムガジェットに収納してしまえばいいので、馬車は寝泊まりが出来て、雨露をしのげたらよいのだ。

あまり野宿はしたくないが、万が一、ということはあり得るのだから。

サラは、かなり服を買い込んだらしい。

既製服を数着、季節に応じてなん揃えも買い、更に、さまざまなドレス類を、オーダーメイドで注文したらしい。

ついでにシユウの分も、ということで合流後、シユウも採寸をされた。

服自体はもうサラとメイドさんが必要なデザインを伝えてあるらしく、採寸のみで開放されたのはありがたかった。

ホームセンターや文房具好きのシユウは、ファッションショップピングは苦手なのである。

その後、サラがどうしても見たいという「魔法」の店に行った。

魔法は、固有スキルで自然に覚えるものと、呪文を購入して覚えられるものがあつた。

だから、もしかしたら魔術書を買って学べば、呪文が増やせるかも知れない、とサラは考えていた。

先の戦闘で、シュウが＜ウインド・カッター＞によって傷つけられていたのを、サラは重く受け止めていた。

シュウは魔法が使えない。であれば、魔法が使える自分が、シュウの分も魔法を自在に扱う必要がある。

聖騎士として、直接攻撃と僧侶系の回復魔法、防御魔法が得意だったサラだが、可能であれば攻撃魔法も覚えようかと考えていたのである。

魔術書は、ゲームのそれとは違い、使い捨ての消費アイテムではないようだった。

だとしたら、二人分でも各一冊ずつで事足りるだろう。

ということで、サラは、店主に、店内にあるすべての魔法を一冊ずつ欲しいと告げた。

サラとシュウ以外の一同は驚いた。そんなことをすれば、むろん金額はすさまじいことになるが、量も半端なものではあるまい。

だが、アイテムガジェットがあるからまあ大丈夫だろう、とサラもシュウも思っていた。

魔術書はおおむね高額だ。その理由は、もちろん希少性や利幅の面もあるのだが、根本は、すべてが手書きによる模写だということだろう。

文字の模写は、まだ根気があればなし得るが、図の模写は、才能と、時間と、労力を要求される。

結局、魔術書は350冊、金貨1800枚にも及ぶ買い物になったが、サラはアイテムガジェットから1800枚の金貨を取り出し、350冊の魔術書を淡々とアイテムガジェットに放り込むと、ついに全部収納しきってしまった。

ここでも魔法屋の店主にずいぶん質問攻めにあつたが、シュウが前と同じ説明をして煙に巻いておいた。

服の仕立ては全部で10日ほどかかるらしい。

その間にシュウとサラは手分けして、野宿の際に必要な調理器具や調味料、保存食料や、中古で買った馬車の修繕、馬車の内装や寝具の購入といった準備を肅々とこなしていった。

調理器具や家財道具はすべてアイテムガジェットに放り込んだので、見た目ほど馬への負担は厳しくなさそうだったが、そうはいつでも、馬車自体がけっこうな重量になる。

そこで、アルノルは、頑丈そうな重種馬を二頭選り出していた。騎士が乗っている馬は、シュウたちが知っているサラブレッドに近い馬のようだった。

軽種馬と呼ばれる馬は、500kgぐらいの体重が平均的だが、重種馬は、体重1トンを超えるような大型馬になる。力は強いが足はさほど速くない。

すべての準備は3日ほどで整ってしまったので、結局服の仕立て上がり待ちとなってしまうた。

その間二人は、馬の馴らしを行ったり、本や魔術書を読んだりして過ごした。

馬は、アルノルの紹介で雇った馬丁が驚くほど二人によく懐いた。特に、シュウへの懐き方は、馬丁がその才に嫉妬を感じるほどだった。

ガイラスとグレイズの商隊が王都に到着した。

二人は、王都についてからサラとシュウの噂でもちきりだったので、取るものもとりあえず駆けつけてくれたらしい。

「まあ、悪いことになってなくて安心したぜ」

4日ぶりにあうガイラスは、苦笑しながらサラとシュウに握手を求めた。

「いろいろな噂が駆けめぐってますね」

グレイズも笑いながらいった。

魔獣退治や王からの褒賞もそうだが、やはり一番の話題は、サラの魔術書の「大人買い」だった。

まとめて1800枚もの金貨で350冊もの魔術書を一括して買ったサラは、その容姿もあって、

「どこかの王族のお忍びではないか？」

と噂されていた。

となれば、シュウはそのお付きの従者である。

その話をガイラスとグレイズがおもしろおかしくするので、サラはずいぶんご機嫌になり、シュウはちよつと落ち込んでいた。

シュウの落ち込み方がおかしくて、囲む3人はますます喜んだ。

「せめて姫の騎士とかならまだなあ」

シュウは嘆くが、やはりシュウの格好がどう見ても騎士ではないため、異国の従者にしか見えないのだろう。

本人たちは気づいていないが、実は、口が達者なシュウがいつも、交渉ごとや雑談に応じていることも、シュウが従者だと見られている原因ではある。

お姫様は、微笑みだけで無口なものなのである。

「でも、シュウ君が従者だったらわたくし、道ならぬ恋の逃避行もよろしくてよ？」

「こいつはごちそうさまだ」

そういつて3人はまた盛り上がっていた。

ガイラスとグレイズは、その後3日ほどしてレリウに向けて旅立っていった。

帰りも荷の多くなる一行のため、レリウまでの護衛を捜して回るガイラスや、レリウや途中の街で仕入れた荷物を売りさばき、帰りの便で必要になる日用品の仕入れに走り回るグレイズに、シュウはずっとついて回った。

生々しい商人同士の戦いは、シュウには大変学ぶところが多かった。

別れの日、ガイラスはいつものように磊落^{らいらく}にシュウとサラに別れを告げたが、グレイズは眼を真っ赤に腫らし、別れを惜しんでくれた。

「いつかまた、こっちに訪れることがありましたら、是非私たちを訪ねてください」

グレイズは二人の手を取ると、名残惜しそうに馬車に戻っていった。

「……いい人たちだったね、シュウ君」

見送る馬車が入混みに紛れた後、サラは、そういった。

服の納品も済み、最後の食料品の買い出しも終わると、サラとシュウは、最後の別れに王城に向いた。

騎士団の控え室にアルノルを訪ねると、彼もまた、旅立つ二人に名残惜しそうに別れの言葉をかけてくれた。

しばらくすると、まあ王城内ではあるが、王もお忍びで別れに来てくれた。

「これが約束の手形だ。まあ友好国ではそなたらを守るであろう」
手のひら大の、頑丈な鉄に、純金のメッキが施された、非常に贅沢な手形だった。

そこには

ノイスバイン王である

エガルド・サリガル・アデラル・ノイスバインは

以下の両名の友に対し

身分を個人的に保証する

サーラ・ヨハンセン

シュウ・タノナカ

その要があれば随時

ノイスバインに照会を許す

貴国における両名への配慮を求める

と記され、その下には、王のサインの打刻と、王家の紋章のレリーフが彫り込まれている。

貴族でもなんでも二人にとって、この贈り物がどれほど彼らを護るのか、計り知れないのは容易に想像が付く。

「ありがとうございます。このご恩は忘れません」

二人は、はじめてあったときと同じように、王に立礼した。

二人が去った後、アルノルはふと、王に漏らした。

「惜しいですね。この国に留まってくれれば」

「詮なき事よ。お前を破ったあの少女だけであつたなら、あるいは予の臣下に加わったやも知れぬが……」

王は、騎士団の控え室から立ち去りながら、アルノルにいった。

「あの少年は、英雄の風がある。到底、予では扱えまいよ」だからこそ。

エガルド王は、『友』などという、国王が使うには大それた呼称で二人を遇したのだ。

二人は、シュウが買い込んだ地図で、やっと自分たちの現在位置を把握した。

いわゆるゲーム開始直後の起点になる『始まりの街』レオナレルは、この大陸——レジナレスのほぼ中心にある。

シュウはそこから南西に、サラはそこから北西方向にクエストイベントをこなしつつ進んだため、南東にあるノイスバイン王国について、ほぼ名前さえわからない状態だった。

とりあえず二人は、旅の目的地をレオナレルに定め、馬車を進めることにした。

王都から西に4日、小都市サスデオまでは、毎日宿のある順調な旅で、二人は、観光気分で旅路を楽しんでいた、のだが。

——ああ、ナビが欲しい。

サスデオから旧街道を北上し、次の村で一泊、と考えていた二人は、どうやら道を間違えたのではないか？という状況に置かれていた。

なんせ、未舗装の道には雑草が生え始め、どうやらもう数年は、ここを人が通っていないのではないかと思われる風景になってきたのだ。

ここから引き返してもどうせサスデオに着くまでには夜までに間に合いそうにない。

ならばもう少しだけ進んでみて、ダメだったら、野宿しよう。

二人はそう話しあい、人気のない荒れ道を北上していった。

目の前にその村が見えてきたのは、もうすっかり日も暮れて、空がわずかに青紫の光が残るほどの時間だった。

「廃村かな？」

「……廃村ね」

村には全く明かりが見えない。

いっそ、まだ草原などのほうがマシだろう、というくらいに、無人の荒れた廃村というのは、精神的に来るものがある。

「しょうがないから、今日はここで一泊しませんか？」

シュウはそういうが、サラはかなり保護欲をそそられる瞳で、恨めしそうにシュウを見つめている。

上目遣いできらきら光る責めるような瞳で見られたところで、そろそろ馬を休ませてあげないと、とシュウは思っている。

いずれにしても、この状態で動き回る方がよほど危険だとも思う。

「では、ここを今日のキャンプ地としまーす」

シュウは、言い切って馬を止めた。

村の中心は石畳になっていて、今は枯れているが、昔はここに共同の水道でもあったのだろう、という遺構が残っている。

建物の荒れ方からしたら、ほぼ数年は無人になっているのではないかと思われる。

シュウはカンテラをアイテムガジェットから取り出し、ちょっと見て回ろうかと思い、サラを誘ったが、

「いや、ぜったい、いや」

と、強い口調で拒否された。

馬車の中は明るいし、春真っ盛りの今の季節なら本当に過ごしやすいので、とりあえず、王都で買った結界の魔法石で馬車を包み、シュウ一人で付近を見て回ることにした。

シュウは、馬屋があったらいいな、と考えているのだ。

馬という動物は、大食いだ。草食ということもあるのだが、やはり大柄な肉体を維持するために、大量の飼料と水を必要とする。

今までは、宿の下働きにチップを与えることで、ずいぶん楽をさせてもらってきたが、こうなると、自分で何とかしなくてはならないのだ。

付近をいろいろ見て回ると、元は宿屋だったらしい建物の裏手に、干し草が残った馬小屋があるのを発見した。

シュウは、その干し草を一抱えほど抱きかかえると、アイテムガジェットに放り込んで馬車に戻る事にした。

それにしても、なぜここは廃村になったのだろう。

見た感じ、どの建物も古いし荒れてはいるが、火事や災害といった原因で破壊されているとは思えない。

人為的に壊された跡もないので、おそらく住民は、一斉にこの村を離れたのだろう。

考え事をしながら馬車に戻ったので、うっかり結界石の解除を忘れてしまった。

激しい警戒音にシュウは驚いてあわてて結界石をとめると、おそるおそる馬車のほうに振り返った。

半ベそをかいているサラが、泣きながら怒っていた。

「バカっ！」

「……ごめんなさい」

「でもサラさん、何がそんなに怖いんですか？ お化けとかそっちですか？」

さらはびくつと肩をふるわせた。凶星か。

「サラさん聖騎士でしょ？ 祝福とか解呪の魔法使えるんじゃないですか？」

「それはそうだけど……トラウマなのよ」

V R M M Oは比較的、グロ・恐怖表現には厳しい規制があるのだが、R P Gではやはり若干、そうした表現が含まれる。

スケルトンやゾンビ、ゴーストにリッチなど、死霊や死体そのもののモンスターも数多く存在する。

おそらく、そのあたりが苦手なんだろうなあと思われる。

「でも、お化け系出たら僕は全く役に立ちませんよ？」

シュウは侍なので、剣士系スキルばかりである。

まあ、退魔系の剣もあるにはあるのだが。

アイテムガジェットから干し草を出し、馬の前に山積みする。

飼い葉桶に水を入れたいのだが、ここは水路が枯れていて、どうしたらいいかわからない。

そういえばいくつか井戸もあったようだが、こんな状態の村の井戸など、怖くて使いたくない。

「サラさん、たとえば、魔法で水とか作れませんかねえ？」

「出来なくもないかも。ちょっと待って」

ゲームで身につけてる呪文は、攻撃などに使うものばかりなのだ。サラはアイテムガジェットの中の、ほぼ魔法ライブラリとでもいうべき量の魔術書から、初級魔術の本を引っ張り出し、ただの水を出すウォーターという呪文を読み始めた。

シュウは、枯れた水路に飼い葉桶を二つ用意し、サラの呪文を待っている。

「よし、じゃあやってみようか」

サラがもにもによ呪文を唱え、＜ウォーター＞！と唱える。どばー。

シュウのふくらはぎあたりまであふれた水で、彼は下半身水浸しの目にあっていた。

「もう少し、加減を覚えましょうか？」

「ごめんなさい……」

とりあえず2個の飼い葉桶に水をなみなみ入れると、馬たちの前に置いていく。

シュウは、とりあえず靴とズボンを履き替えると、それぞれ簡単にすすいで、馬車の後部の壁に干しておいた。

この頃シュウは、王都で買いそろえた普段着をよく着ている。

侍の装備である羽織袴はやはりこの辺では目立つし、けっこう洗うのに気を使うので、何着か普段着を買い込んでおいたのだ。

やはり、シャツにズボンのほうが楽だというのもあって、もうすっかり見た目は、サラの従者である。

「シュウ君、魔法覚える気はないの？」

馬車の中で食事をしてると、サラが不意にそんなことを言い出した。

「ない訳じゃないですけど、もともと、パラ全く振ってないですからねえ」

実際は、キャラレベルも高いスキルレベルでも自然と魔力値は上がるので、全く素養がないわけでもないが、シュウはボーナスを素早さや強さに極振りするのが好きだったので、あまり魔法については考えたことがなかった。

戦闘はギルドのメンバーと共同して行うのみだったので、全く必要がなかったということもあった。

「でも、せっかくだから少し覚えた方がいいですよね」

強力な回復・防御・解呪などの僧侶系スキルをサラが持っているとはいえ、現状たった二人の旅だ。

防御魔法や回復は最低限覚えておきたいな、とシュウは思った。

「じゃあ魔術書、時々貸してくださいね。勉強してみます」

とりあえずは、ヒール系とレジストやプロテクト系かな、あ、ウオーターやただのファイアとかも便利そうだ。シュウはそんなことを考えた。

食事も終わり休み支度をしていると、村の南側から、いやな気配を感じることにシュウが気がついた。

馬が時折鼻を鳴らしていることから気がついたのだ。村の外の草原で、ざわざわと何かがうごめく気配があるのだ。

「サラさん、夜襲されるかも知れません」

サラは気がついていなかったのか、何かいいそうになったので、しつ、と、口に指を当ててシュウが続けた。

「感じではゴブリンっぽいですが、暗いんで何とも言えません」

先ほどまで月が出ていたのだが、どうやら雲に覆われてしまったのか、今は、馬車の窓から漏れる光が届く範囲がうっすら明るいだけだ。

「サラさんは馬を守ってもらえますか？　もし攻めてきたら僕が一人で対処します」

シュウは、外していた装飾品を身につけ、使い慣れた刀を用意して、馬車から静かに降りると、気配のした南側に回り込んだ。

サラも、スカートの普段着からズボンと白銀のプレートアーマーの上部だけに着替え、ドラゴンスレイヤーを腰に佩いて、そっと馬車前部の扉から御者台に移る。

南側の村はずれから、ついに動き出した物音がはっきりと聞こえてきた。

シュウは炎の魔力石を取り出し、南の道沿いに投げつけ、爆ぜさせてみた。

急激に明るくなった周囲に、敵の姿が浮かび上がった。

「オーガだ！」

シュウは、サラに届く声量で伝えた。

この村が廃村になった理由はわかった。

オーガが巣を作ったのだろう。

ゲームでは比較的序盤に巡り会うオーガだが、小型のゴブリンに比べると、2メートルを超えるような巨体に強い筋力を持ち、武器も重量級のアックスや棍棒、時には人から奪った槍やモーニングスターなどを使ってくる、一撃をこちらが食らえばやっかいな存在だ。この暗闇の中で、夜目が利くのか、明かりをもたずに集結していた。

一瞬の光で見えたのは5体。

だが、仲間と呼ばれていれば、どのくらい来るかわからない。

シュウは、刀を抜いて、考える。
よし、とりあえずアレは全滅させておこう。

オーガたちは、一瞬激しく燃え上がった炎で、暗闇になれていた目をつぶされていた。

再び目が効くようになった瞬間、目の前に自分たちの獲物だと思っていた人間が抜刀して立っていたのに気がついた。
先頭のオーガはその瞬間に、首を切られていた。

殺気に反応して一気に散開したのは、オーガにしては出来すぎだとシュウは思った。

こいつらは、たぶん人を襲い慣れている。

向かって右手にいったオーガをシュウは狙った。

相手の気配はわかるが獲物が判断しづらい。

とにかく、一撃でも食らえばこっちの命が危ない相手だ。

間合いぎりぎりですシュウは2匹目のオーガの足を狙った。

「グオー！」

痛みのために奇声を上げるオーガがとっさにしゃがんだところで、こいつも首を刎ね上げた。

さて困った。暗すぎてシュウにはあまりにも不利だ。

さらに二つ、炎の魔法石を取り出し、いまオーガたちが居ると思われる場所に投げてみる。

ひとつは思惑通りオーガに当たって燃え上がる。

だがもう一つは、何もない土の上に落ちて燃え上がった。

———後ろ！

棍棒を振りかぶって今まさにシュウを殴ろうとしてるオーガを、下袈裟に切り上げる。太った腹の皮を左下から切り裂かれたオーガは、はらわたを吹き出しながら崩れ落ちた。

悪いが止めは刺してやれない。

火を消そうともがく一体を除き、おそらくどこかにもう一体。居所がつかめない。シュウは、はじめてに近い恐怖の冷や汗を全身に感じていた。

どうする？ 家を燃やすか？ とにかく明かりが欲しい。せめて、あとわずかでも目が効けば。

ジャリ、足音が聞こえた。

たぶん一息ではシュウに届かない間合い。助かった。

シュウはその瞬間、一気に加速し、ひどいやけどを負っているオーガを左肩から斬り伏せ、アイテムガジェットから一振りの槍を取り出した。

斬馬刀は鞘を抜く間が間に合わない。

この瞬間生死を分けたのは、月にかかっていた雲が切れたことだった。

残り一体のオーガに思ったより間合いを詰められている事をとっさに悟ったシュウは、右手の刀をそいつに投げつけた。

オーガの右手に刀が突き刺さるが、死にものぐるいのそいつは、なりふり構わず棍棒を持ち替えシュウを狩りに来る。

棍棒の長さ、ほんの30センチほどが勝負を分けた。

オーガの棍棒はシュウの鼻先をかすめて外れた。

シュウの槍は、オーガの心臓を貫いていた。

ほっとしたのもつかの間、道沿いに、たいまつを持つ何者かが近づいてくるのが見えた。

20は軽くいそうだ。残念ながら、援軍ではあるまい。

シュウは、斬馬刀を取り出し、鞘から抜くと、その鞘を格納する。やむを得ない。月が晴れている今を逃せば、もうあの数のオーガには勝ち目がないかも知れない。

馬車に近づかせれば、敵に広い場所を与え、こちらは守るべき弱みが増える。

ならば、このまま突撃するしかない。

斬馬刀を右下段に持ち、シュウは一気に走り出す。

オーガたちもそれを察し、縦長に歩いていた列を崩し、取り囲もうと散開していく。

最初の一閃で目の前の5匹のオーガを斬った手応えがある。

だが、まだ残りは10匹以上いるだろう。

右足を引き、もう一度右下段に戻る。

左後ろに散ったオーガが、シュウに向かって棍棒を投げつけた。よけきれず、シュウの左肩から背中にかけて、手ひどい衝撃を食らった。殴られるよりいくらかマシだが、呼吸が止まるほどのダメージを受け、シュウは一瞬前のめりにふらついた。

その隙を突こうと、一斉にオーガが襲いかかってきた。

「オオオー！」

周囲を揺るがすほどに激しい気合いがシュウの喉をふるわした。

その瞬間、萎えかけていた全身の筋肉が力を取り戻す。

不自然な姿勢から力任せに繰り出す斬馬刀の一閃。

さらに、背後に回ってシュウに棍棒を投げつけたオーガに対し、斬馬刀で突きに入る。

腹に切っ先が食い込んだ瞬間に、刀をこじる。

肉をえぐる感触が手に伝わった瞬間に、刀の重さを活かして一気に斬り下げる。

「ギューー！」

苦悶の叫び声がオーガから上がった。

残りは5匹。

修羅のような形相のシュウは、自らの痛みを超える興奮で体を動かす。

肉体の限界に近い運動を全身に強いる。

数歩で間合いに入ったオーガを、斬馬刀の一振りで斬り捨てる。

右から左に振ったため生まれた隙を突こうと槍を振り下ろすオーガに対応するため斬馬刀をそのまま捨て、脇差を抜いて、そのオーガの槍を紙一重でかわし、左に流しながらオーガの腹を割く。

そこで振り返ると、その脇差を、最後のオーガに投げつけた。

脇差は、最後のオーガの腹にそのまま刺さった。

アイテムガジェットからまた一本、槍を取り出し、そのオーガの首を突き貫いた。

そのまま槍を放すと、最後のオーガは、そのまま硬直し、後ろに倒れた。

くそ、身動きが出来ない――

少し力が入っただけで、激しい痛みが背中を走る。

まだうめき声を漏らすオーガがいる。

止めを刺したいのだが、もはや体が動かない。

月が完全に姿を現した。

南に延びる荒れ果てた街道に、巨大な気をまとった何かが現れるのをシュウは悟った。

ゆっくりとした足取りで近づいてくる巨大な獣。

月光にきらめく銀の体毛。

「銀：魔狼」

4つ足の状態でも、シュウの身長ほどもあろうか。酷薄な殺気をまとって、ゆっくり、シュウのほうに近づいてくる。

銀魔狼。他者の命で生きながらえる、食物連鎖の頂点に間違いなく君臨するだろう魔獣。

レジナレス・ワールドでは、特殊ボス扱いだったろうか？ 存在は知られていたが、攻略はされていなかったろう「伝説」級の化け物^{モンス}が、いま、シュウの目の前にいる。

こちらに向かつて歩きながらも、好奇心に満ちた恐ろしく賢そうな双眸^{そうぼう}を、シュウに向けて光らせる。

黄金色のその瞳は、わずかな光を受けて、闇の中でグリーンゴールドに輝いている。

ただ歩いていてもあふれ出るような殺気は、その歩みの美しさ、一切無駄のない華麗な狩猟者のハントが完璧であることの裏付けだ。姿を隠し、相手をだまして命をかすめ取る必要など何もない、王者の矜持だろう。

ほんの一時体重を沈め、銀魔狼は跳躍した。

——ああ、食われるのかな？

シュウは茫洋とその光景を見ていた。

ガフッ！

銀魔狼に首を噛まれたそれは、断末魔の叫びさえ上げることが許されなかった。

頭を食いちぎられたそれは、見苦しくはいずり回っていた肉体を、そのまま一瞬痙攣させて止まった。

ペツ。

銀魔狼は、不機嫌そうに噛みちぎった頭をはき出す。

そして、そこにいる黒髪の少年を見下ろした。

そして、ゆっくり、口を開いた。

『坊や。詰めが甘いのう』

銀魔狼は、シュウの襟首をくわえて、ゆっくり立ち上がった。
無理矢理つるされたことで、シュウの顔が再び激痛にゆがむ。
そのままゆっくり、シュウをくわえたままの銀魔狼が、街の中へ
入っていく。

その光景を、茫然としながら、サラが見つめている。
銀魔狼はそっとシュウを地面に降ろすと、サラに向かって言い放
った。

『小娘、何をしておる。さっさと癒さぬか』

「……！」

サラは、硬化の魔法から解き放たれたようにシュウの元に走り寄
り、＜ヒール＞をかけ続けた。

ちらっと銀魔狼に視線を移す。

一瞬その巨体が揺らいだかと思った瞬間、目の前に、唐突に全裸
の美女が現れた。

長く美しい銀色の髪が、月の光を受けて美しく輝く。

抜けるように白い肌は、完璧に整った魔性のプロポーションを持
っている。

背丈はサラよりほんの少し低い。だが、恐ろしいほどの威圧感が
全身からわき上がっている。

そして、その瞳は美しい黄金の輝き。間違いない、あの銀魔狼だ。
「小娘、我に服を貸すがいい。——何をしておる？」

サラがアイテムガジェットから取り出した服を、銀魔狼は当たり
前のように受け取ると、慣れた手つきで身につけていった。

おそらく、人に化けるのははじめてではないのだろう。サラは思
った。

「坊や、気がついたか」

「……あなたは」

サラがシュウの身を起こすのを手伝う。

「お前らが銀魔狼と呼ぶ狼よ」

銀魔狼は愉快そうに喉を鳴らす。

絶世の美女でありながら、そのさまは明らかに、肉食獣そのままだ。

「助けていただきましたありがとうございます。僕はシュウ。こっち
ちはサラ」

「お前らなんぞ坊やと小娘で充分だわ」

「はあ…」

「お前のせいでオーガの頭なぞ口に入れてしまった。口直しをよこせ」

銀魔狼は唐突に言い出す。

宿屋に泊まるつもりだった二人は、今日は干し肉くらいしか持ち合わせがなかったが、意外に喜んで食べているので、つい持ち合わせをすべて献上してしまった。

「ところで、お名前を教えてくださいませんか？」

シュウは狼に聞いてみた。

「名など無いわ。だが、坊やが我につけたいというのなら、貰ってやってもよいぞ」

「そういわれましても……うーん、じゃあジルベルとか？」

「ジルベルか、どういう意味だ？」

「えー…銀色って意味です」

「よかろう。その名を貰ってやる」

銀魔狼——ジルベルは、そういうと、シュウの右腕を取り、おもむろに噛みついた。

そして、そこから流れ出る血をすすり飲み、口を離した。

そして、自分の右腕をシュウの前に差し出した。

「さあ、飲め」

「は？」

ジルベルは、右手を一度引っ込めると、自分で二の腕を噛んだ。
プクリと血の玉が浮かび出て、一筋、ツーっと流れ落ちた。

「さあ、飲め」

よく解らないが、仕方なくシュウはその血をひとすくい、舌で舐め取った。

「先ほどの鬨気、未熟者の小僧なれど見事であった、坊や。私のつがいと認めよう」

「は？ つがい？」

「ちよつと！ なに勝手なことをいつてるんですか！」

茫然とこのやりとりを見ていたサラが、二人の間に割ってはいった。

「私はそんなの認めませんよ！」

「なんだ小娘、今見ていたであろう？ 坊やは我に名を与え、我が血をすすり、我に血を与えた。つがいの成立であろう」

「説明もしないで無理矢理やらせたんじゃないですか！」

「では聞くが、小娘に何か迷惑でもかけるのか？」

「……！！」

サラは、本質を突いた逆ねじを自然に返されて、言葉を飲んでしまった。

「ではよいではないか、なあ、坊や。いや、我がつがいとなったからには、坊やはまずかろう。シュウと呼んでやるゆえ、我に名を呼ばれるにふさわしいオスとなれ」

「は、はあ。頑張ります」

「なにシュウ君も受け入れちゃってるのよ！ そこは否定するところでしょ？」

がば、サラはシュウの頭を抱きかかえ、ジルベルに高らかに宣言した。

「し、シュウ君はあたしのものなんだから！」

しばしの沈黙が三人の間に流れた。

二人の女性の間に流れる激しい殺気にすっかり当てられて、シュウは固まってしまっている。

「小娘」

「…何よ？」

「本来我らは、つがいをおスとメスの一対一とするのが習わしだ」

「私たちもそうよ！」

「そうではあるまい。人の子らは、優れたオスであればメスの群れを囲いたがろう」

確かに、この世界ではそうだろう。

現代社会から来たサラにとっては、到底受け入れられない提案だ
が。

「ゆえに、小娘がシュウとつがいになりたいというのであれば、認めてやらないこともない」

「ふざけないで！」

「ふざけてなどおらん。小娘、威勢がよいのはけっこうだが、我が何者か忘れたのか？」

ジルベルはゆっくりと服を脱ぐ。

サラの普段着のワンピースを羽織っただけのジルベルは、全裸になると、すぐに力を解放させた。

目の前に、巨大な銀狼が姿を現す。

「小娘、お前などその気になればいつでも食い殺せるのだ。だが、シュウとお前には確かに絆があるようだ。であるなら我は、我らの有り様を曲げてもお前を受け入れようといっておる。気に入らぬのであれば、力の限り奪い合う以外になかろう」

激しい殺意がジルベルの体からあふれ出てきた。

サラも、ひどく暗い殺意をみなぎらせた目でジルベルを見つめている。

「あの一」

気の抜けた声を上げて、にらみ合う両者の中間にシュウが割ってはいった。

「ちょっとお話が急すぎますので、まずは私の話をしたいでしようか？」

シュウはそういうと、ゆっくり両者を見つめた。

「お二人の気持ちはありがたいと思います。サラさんにもジルベルさんにも僕はとても助けられていますし、恩があります。なので、まずは二人が殺し合ってもらっては、本当に困ります」

シュウは、ジルベルに向かって、

「まずは、出来ればもう一度人間の姿を取っていただけますか？」
といい、サラに向かって

「とりあえず、座ってください」といった。

ジルベルも再び人の姿を取ると、脱ぎ捨てたワンピースを着て、傍らに座った。

「まず、僕とジルベルさんが、知らなかったとは言え、儀式をしたというのは事実です」

「うむ」

「サラさんと僕が、二人で助け合い、今日まで頑張ってきたのも事実です」

「うん」

「サラさんが僕を、ええと、そういう意味で『好き』だというのは、今日まで知りませんでした。いえ、嬉しいですよ？」

サラの眉が片方つり上がるのを見て、シュウはあわてて付け加える。

「ジルベルさんが僕を助けてくれた意味が、そういう意味だとはわかりませんでした。光栄です」

「うむ」

「でしたら、とりあえず、サラさん、もしつがいになるなら、お二人とも、ということではいけませんか？」

どうやらいけないらしい。サラの目は再び、怪しく光る。

「ならば、どちらともつがいにならない、というのはいかがですか？」

今度は、ジルベルが冷たく微笑みだした。

「困りましたね。そしたら二股男の僕は、死ぬしかないですね」
今度は、シュウがにやりと笑った。

「じゃあ、とりあえずしばらく三人で旅してみてはどうでしょうか？」

シュウは、いいこと思いついた、という風に表情を崩して言い出した。

「あんまりいきなりな話なんで、全員ちょっと泡食ってしまいました
が、よく考えたら、まだみんなよく知り合っていないわけですし、
もしかしたら、サラさんとジルベルさんも、仲良くなったりするかも
わかりません。」

まあとりあえず、ひとまずつがいとかどうかというのは隅っこの
ほうに置いておいて、まず一緒に旅を試みませんか？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「…よろう」

三者三様の沈黙を破ったのはジルベルだった。

二者の視線に耐えかねて、サラもやむなく首肯した。

「よかった。じゃあひとまずこの話は終わりでもいいですね？ 僕も
今日はちよつと限界です」

サラはやつと、シュウが先ほどまで大けがをしていたことを思い
だして赤面した。

翌朝までは何事もなく過ぎていった。

シュウの状態は昨夜よりひどくなっていた。

筋肉痛や肉離れ、打ち身などは、当日より翌日の症状がひどくなることは珍しくない。

シュウの背中には棍棒を当てられた跡がはっきり赤紫に腫れ上がり、彼は寝返りさえ打てないような状況になっていた。

ポーションを飲んでみたがあまり芳しくない。

サラはしばらく、魔術書を読みふけていたが、得心したように魔術書を閉じ、シュウに向かって、新しい魔法を使い始めた。＜ハイ・ヒーリング＞である。

みるみるうちに、変色した打ち身の部分は癒されて、健康な肌色を取り戻してゆく。

「ありがとう、サラさん。楽になりました」

「今日はまだ寝てて？ 御者は私がやるから」

サラはシュウをそっと寝かしつけると、扉を開けて御者台に座った。

その後ろを、ジルベルがついて行ったのを見て、シュウは再び眠りについた。

「サラ。昨夜の私の態度は傲慢であった。詫びよう」

ジルベルはサラにいった。

サラは少し驚いた顔をしたが、

「もういい」

とつぶやいた。

「今のお前の治療を見て、我は感心したのだ。我ではシュウの痛みを除いてやれなんだ。お前がいて、良かった」

「私はあなたをまだ認められない。でも、あなたがいなかったら、シュウは今頃どうなっていたかわからない。だから、私もあなたにお詫びします、ジルベル」

サラも、小さく頭を下げた。

「でも、まだ納得いきません。私だけのものだった男を、半分奪われるような気持ちには、どうしても蓋が出来ません」

「昨夜も言ったが、我らの種族も、本来オスとメスはひとつがいののだ。お前の言い分はよく解っておる」

ジルベルもうなずいた。

「だが、我もまた、シユウに魅せられてしまったのだ。昨夜のアレの働きは、実に見事だった。あのオーガどもは、我が眷属の巢穴を襲い、皆殺しにして、肉を食らい、奴らの住処に毛皮を干しておった」

ジルベルは、忌々しそうにつぶやいた。

「我はあの日、奴らを皆殺しにすべくあの村まで出向いた。そこで、奴らを圧倒するシユウを見た。人間ゆえ、真っ暗闇で奴らを見失いながらも、見事な腕であった」

ジルベルは続ける。

「アレは多勢に無勢ゆえに手傷を負った。我はそこで助けに入ろうかと思った。だがアレは、すさまじい闘気を発し、自らの体の限界まで力を振り絞り、再びオーガどもを制圧していった。我は思わず、見惚れてしまっていた」

ジルベルは、サラをじっと見た。

サラははじめて見る、殺気のない、真剣なジルベルの表情に息を飲んだ。

「アレが止めを刺ささなんだオーガが一匹、卑怯にも音を隠して、アレを殺そうと近づいておった。だから、我が助けた。助けねばアレは死んでおった。」

助けたからには、アレは我のものだ、そう思っておったが——サラが居らなんだら、アレは昨夜命を落としておったやもわからん。

だから、我はお前を認めた。サラよ」

ジルベルは、しばし返事を待った。サラからの返事はなかった。「それだけだ」

旅芸人の馬車は、多量の荷物を運ぶために、箱の柱が頑強で、屋根も太い梁が細かく渡してある。人間なら5－6人が乗っても、抜けることがないほど丈夫に作られている。

ジルベルは、御者台からはしごを伝って、馬車の屋根の上に登ると、そこで寝ころんで空を眺めた。

良き伴侶を見つけたと思ったが…ままならぬものよ。

ジルベルはそのままそっと目をつぶり、つかの間の休息を取ることにした。

シュウが目をさましたのは、サスデオに馬車が着く手前だった。日中ほぼ寝ていたことになる。

体がずいぶん軽い。サラにかけてもらったくハイ・ヒーリングがずいぶん癒してくれたのだろう。

布団から起き上がり、体をひねってみる。

どうやら、肋骨にはダメージがなかったようだ。

シュウは、馬車の前扉から御者台に出ると、

「サラさん、ありがとうございます。代わります」といった。

「うん……」

サラは、ずいぶん疲れているようだ。おそらく、休み無しに走ってきたのだろう。

ジルベルは、屋根の上にいる。僕に気を使ったのか、それとも馬車が窮屈なのかな？

シュウは、そんなことを考えながら、サスデオに向かって馬車を進めていった。

サスデオの街に着いた。

一行はまず、例によって王国兵の詰め所に行き、北の廃村での一件を隊長らに話した。

シュウがジルベルから聞いておいた話を総合すると、まず、廃坑の跡に盗賊たちがたむろしだし、そこを狙ってオーガが攻め入って、そのまま居着いた、ということになるようだった。

そのオーガが村を脅かすようになったので、どうせすでに鉱山も失い寂れた村に残っていた人たちは、新たに西側に移住して、一か村を作り直した、ということのようだった。

それをそのまま隊長に伝えた上で、昨日、知らずに廃村で野宿し

たこと、オーガに襲われこれを殲滅したことを伝えておいた。

さすがにライダンでの一件とその後の王からの触令^{ふれ}は心得ているようで、殺したという25匹のオーガの数に驚いてはいたが、隊長たちは丁重に一行をもてなしたものだった。

一行はとりあえず、今夜はサスデオで一泊。その後、ジルベルの服や保存食糧、塩漬け肉など、旅の人数が増えたために必要な買い出しを済ませ、再び北上の旅に出発した。

なぜ廃村のほうに出てしまったのかの謎は解けた。

「こちらだの」

どう見ても側道にしか見えない分岐で、ジルベルは左折を示した。長年馬車が通った旧道は、道幅も広くしっかりした作りになっているのに対し、まだ2－3年しか経っていない新道は、通行量が少なく、まだ本格的な道に見えないのだった。

サラに聞かれると怒られそうなので言わないが、シュウにとっては、ジルベルと出会えたというだけで、死ぬ思いをしたあの日には価値があったと思っている。

サラとジルベルは、恋敵であると同時に、旅の仲間でもあるという難しい関係なのだが、シュウが寝込んでいる間に何かあったのか、表面上は波風立てずに過ごしている。

一体シュウの何がジルベルのお気に召したのか、シュウ自身にはさっぱりわからない。

だがまあ、あれほどの力を持った存在が仲間として同道してくれるのであれば、心強いことこの上ない。

あとは、サラとジルベルが折り合いをつけてくれたらな、とシュウは思う。

全く男女のことに経験のないシュウにとって、この状況は青天の霹靂だった。

今まで見たこともないほどの怪しい魅力をたたえたジルベルと、

同じマンションのご近所さんとしてよく見知っているながらも、特に親しくしていたわけではない美少女のサラ。

サラに関しては、『お忍びの王女では』などと噂されるほどの容色なのは間違いない。

つまり、一個の男として、どちらの女性だけでも、もし共にすることが出来ればそれは幸福な一生といえるほどの容姿であり、才能をもった人たちだと思う。

だが、シュウはそのどちらとも関係を深めるわけにはいかない状況になっている。

シュウも、健康な青少年である。それは、性的な興味も人一倍あるし、これほどの女性たちに求愛されれば、普通であればどちらか片方でも手に入れたいと願って不思議ではない。

シュウが曖昧に濁しながらも双方を抱えていきたい理由はただ単に、一歩間違えれば命を落としかねないこの世界で、とにかく生き延びたいがためであった。

サラに対しては、一緒にこの世界に連れてこられてしまった同志、という側面のほうが、今は大きい。

5日ほど北上したところで、ノイスバイン王国と隣国、ヒルゼルブルツ王国の国境の関にたどり着いた。

国境には、それぞれの国が管理する関所が砦のようにそびえていて、今はどうかかわからないが、波乱のあっただろう両国関係をうかがわせる。

それぞれの関所にノイスバイン王から賜った手形を見せると、なかなか霊験あらたかであった。

書類作成や荷台の検分などでなかなか通してもらえず、袖の下なごを通してやっと通過している商人たちの一群を尻目に、三人の馬車は、最恵待遇で通り抜けてしまった。

目指す『始まりの街』レオナレルまでは、関守によると、あと20日ほどの道程らしい。

ヒルゼルブルツに入って2日目の朝、関所から最初の宿屋街を出たあたりで、シュウたち一行は、不自然に距離を開けながら同じ距離を空けて付いてくる商隊の存在に気がついていた。

ヒルゼルブルグの王都はここから南下。シュウたちは北のレオナレルに向かい山沿いの小街道に行く。

後ろから付いてくる商隊は、馬車4台。明らかに不自然だった。

昼に休憩を取ったとき、後ろから来る商隊のうち、3台はシュウたちの馬車を追い抜き、残り1台は、シュウたちがぎりぎり見えるあたりで止まった。

今日は、あと四時間ほど進むとあるらしい農村で宿を取る予定だから、少しゆったり休憩を取っていた。

やがて、一息ついて出発した一行は、荒地に広がる三叉路を、標識通り、今日の目的地、アンセリ村に向けて右に進路を取った。

「さて、まあ思った通りの展開になりましたよね……」

シュウはため息混じりに、サラとジルベルに言った。

「ずっと匂っておったからのう」

銀魔狼であるジルベルは、耳と鼻が桁外れに鋭い。

朝方からつかず離れずに彼らを追っていた人間どもの匂いを、ずっとかき分けていたのだ。

もちろん、奴らが話していた声もずっと前から聞こえていた。

「よお、兄ちゃん。わかってると思うが、ここで死んでもらうぜ」
オーガを一回り小振りにしたような身なりの悪い男が、薄汚れた無精ひげの顔に、野卑た笑いを浮かべている。

前方に放射状に停められた馬車から、手下らしき男どもがわらわ

らと、20人くらい降りてきた。

後ろの道でも、例の一台だけ遅れていた馬車が道をふさぐように止まり、そちらからも6人ほどが、獲物を手に降りてくるのが見えた。

実は、もう道行きの途中で、3人はこの件について話あっていった。シウとサラは、出来れば人間を殺すのだけは避けたいと言っていたが、ジルベルに一喝されていた。

「お前ら、人間と魔獣、どう違うというのか？」
命があるといえどどちらだって命があるし、生きるために生きている、という意味でもどちらも相違ない。

害意があるのも変わらないし、自分や大事なものを守るために、相手を殺さねばならない事情は、全く同じだ。

ジルベルが言うのはおおむねそういうことだった。

それは、サラにもシウにもよく解っている。

それが、この世界だ。

——いや。

サラやシウがいたあの現代社会でも、実際はそうだったのではないか？

たとえば、彼らが知らないどこかで誰かが、自分たちの代わりに人間同士で殺し合ったり、護りあったりしていたのではないか。そう思った。

どちらにしても3人は、襲われたら容赦なく、殺し尽くそう、そう確認して、ここまで来ていた。

サラもシウも、覚悟は、出来ている。

これから、人間どもを、殺す。

ジルベルは、人間どもを殺すのに狼の姿など必要ない、といった。

しかも、武器も防具も必要ないという。

「この腕のみで充分よ」

ジルベルは、ニィっと、その美貌を残酷な笑みで崩した。

サラは、例の炎属性のロングボウを用意していた。

人間相手ではオーバークイルかも知れないな、とシュウは思ったが、いっそ、その方が良いのかも知れないと考え直した。

シュウはいつもの通り、腰の二刀に、斬馬刀だ。

山賊どもは、もはや完全にこの3人を舐めていた。

真ん中の王族にも見える女の得物は弓だった。

これは、盾を持った数人で挟み込んで無力化したらしい。

あっちの銀髪の美人は丸腰だ。逃がさないように押さえ込めば事足りる。

残る男は、防具も着けず、剣も見慣れぬ細い剣がふた振りだ。

長槍で三方向から刺せば片が付くだろう。

そう値踏みを終えていた。

この山賊どもは、奴隷攫いでもある。

二人の女は、かつてないほど高く売れるだろう。

馬車の中身もそこそこ期待が出来そうだ。

今荷馬車に転がして持っている、山賊人生で最高の「おたから」

とあわせ、この儲けで、もう俺は一生遊んで暮らせるわな。

山賊の頭は、そう、ほくそ笑んでいた。

「とりあえず、僕らに手出しするのやめてみませんか？」

シュウは、無駄だとわかっている一言を口にした。

「命乞いかい？」

どんな集団にも、こういう軽薄な口を叩く奴がいる。そして、こういう奴に限って、仲間の背中後ろにいる。

「わかりました……」

シュウはため息をつくとき、アイテムガジェットから、すでに抜いて用意してあった斬馬刀を取り出し、山賊たちの三台の馬車から飛び出した連中の前に立った。

斬馬刀は、右肩に峰を置き担いで歩く。

ジルベルは、後ろで通せんぼをしている6人のほうに、気楽にすることと近づいていく。

サラは、自分たちの馬を守るため、馬の前で、弓を構える。

「すみません。手加減は出来ないですよ。皆殺しにさせていただきます」

「ほざけ、小僧！」

この集団で一番強そうかな？と思える大男が、両刃剣を片手に、こちらに走り出してきた。

その後ろから、3人の男たちが、長槍を持って従ってくる。

サラが、弓で両刃剣の男の頭を射抜く。

炎の爆発が収まった瞬間、男の頭部は爆散し、首から大量の血が噴水のように噴き出していた。

「まずい、あの女！」

山賊は、自分たちの見込みが甘かった事に気がついた。あわてて総掛かりで包囲を狭めていく。

長槍の3人の男たちは槍を水平に持ち、一気にシュウを突き殺そうと三方向から迫っていった。

山賊にしてはよく統率が取れている。もとはどこかの軍で従卒でもしていたのかもわからない。

だが、流れるように肩に担いだ斬馬刀を右下段に遷したシュウは、股を大きく割って、一気に斬馬刀を左に薙いだ。

男たちの槍の上を一閃した斬馬刀は、男たちの首、顔半分、そして肩から上を両断に切り裂いていた。

その想像を絶する酷たらしい仲間の死は、残虐な山賊たちをして恐怖に震え上がらせる。

その後ろから、顔色ひとつ変えずに、サラは弓を連射している。

サラの矢は、鏃が誰かに当たると、当たった部位が吹き飛んで、人間の体に大きな穴を作っていく。

サラは自分から見て右手側から、一人一人、順々に、確実にしめていく。

だが、そのサラの矢を止めるべく彼女に向かって殺到してくる山賊どもは、その場から一步も動かないシュウの斬馬刀の、銀色の旋風の餌食になっていく。

特に、射手を封じようと全身盾で迫ってきた3人の山賊はまとめて一太刀、シュウの斬馬刀に盾ごとまっぴたつにされていた。

後方であっけにとられていた山賊どもは、石つぶてや弓矢を、一気にシュウに浴びせかけた。

「<プロテクションウォール>」

サラが一詠唱でシュウの前に、魔法の物理障壁を展開する。

シュウにとんできたすべての矢・石は、その障壁に当たり、シュウの足下にパラパラと降り注いだ。

その瞬間、シュウが一気に山賊どもの許に走り込み、斬馬刀で、残らず命を刈り取った。

最後にシュウは、山賊の親玉の心臓を斬馬刀の切っ先でひと突きし、90度えぐって引き抜いた。

「ば…け…も」

親玉はシュウを睨みながらうめき、三度ほど胸に開いた穴から血

を吹き出し、死んだ。

「僕からしたら、あんたらのほうが人間じゃない」
シュウはどこか、言い訳じみた独り言を漏らした。

こうして、この一方的な虐殺は、幕を閉じた。

ジルベルが無防備に6人の山賊に近づいたため、山賊どもは武器も手にせず、素手で確保しようと歩いていった。

ジルベルは、その6人が周囲に集まるのを待って、ほんの一瞬で全員の首の骨を、両手で二人ずつ、握りつぶし、折り曲げていった。わずか数秒で、山賊が作った「通せんぼ」は壊滅した。

山賊たちの馬車には、10人ほどの男女、わずかばかりの財宝や衣類が残されていた。

男女は下着も含めはぎ取られ、手足を縛られていたので、まずは全員の縛めをほどき、服を選ばせた。

その中に一人、ひときわ美しく、この環境の中で肌に汚れひとつ浮かべていない長身の女性がシュウの目を惹いた。

エルフ。その中でももはや人というよりほぼ精霊というのに近い、ハイエルフの女だった。

彼女らの種族は恐ろしく性欲がうすいと聞く。だからだろうか、全裸であることを全く意にも介さず、最後まで衣類を取りにも来ないで、一心にシュウを見つめている。

その様子を見たサラは、自身の顔を醜悪にゆがめながら、その女に衣服を手渡した。

だが、衣類は手に取ったものの、全く動く気配さえ見せず、女は

ただ、シュウをじっと見つめている。
どうやら、また一波乱起きそうな気配である。

奴隷として売られる直前で開放した者の中に、土地勘がある女性
がいたのは助かった。

とりあえず、当初の目的地だったアンセリ村に向けて、一同は出
発することにした。

山賊どもの死体は放置することとして、4台の馬車はひとまず持
っていくこととした。

自分たちの馬車はサラに任せ、一台をシュウが、残りを、解放者
で馬が扱える者に任せた。

サラの横に座った地元の人に案内させ、日暮れにはなんとかアン
セリに到着することが出来た。

村の若い衆に事情を話し、とりあえず今日の宿と食事、風呂を手
配してもらった。

村に駐留している村役人は、彼ら10人の宿泊費などについて非
常に苦々しい顔をしていたので、

「彼らの費用は全部僕たちが見ますよ」

と、村人に伝えた。

村人たちは喜んだが、村役人も大層喜んでいた。

食事と入浴が終わると、元奴隷商品の一同は、宿の一階に集めら
れた。

そこで、呼び出した村役人も含め、今後の対応を話あっておいた。
まず、馬車に残された金品の所有者の確認など、村役人にたのん
だ。

そして、わずかばかりのお見舞いとして、シュウとサラが手持ち
で持っている銀貨をかき集め、一人あたり20枚ずつ手渡した。

彼らは、元の生活に帰るにせよなんにせよ、いずれにしても路銀
が必要になるだろうからだ。

そして、村役人には手形で自分たちの身分を明かし、北に旅するので、何かあれば連絡をしてくれ、と言い残した。

そして、殺した山賊たちが身につけていた装備や、懐の中身などには一切手をつけていない、と、シュウはあえて言葉にした。

その瞬間の村役人の表情を見て、彼の奥底の人間性をかいま見た気がした。

だがまあ、これで山賊どもの遺体の始末はこちらにツケが回ってくることはあるまい、と、シュウはこっそりほくそ笑んだ。

山賊退治の帰りに道案内をしてくれた少女と連れだって、小柄で頑丈そうな男がやってきた。

「私たちを召し抱えていただけませんか？」

二人は、貴人に対する平民のような片膝着き礼でシュウたちの前で頭を下げ、そう話し出した。

「いや……僕たち見てのとおり危ない旅してるし、今のところ自分たちのことは自分たちでやってるからね」

さすがに、冒険者じゃない者たちは、いざというとき足手まといになりかねない。

だが、目に涙をためつつ必死に訴える二人の話を聞いていて、シュウは、これはやむを得ないかなあと思っていた。

二人は同じ村の幼なじみで、こうした田舎ではよくあることだが、同じ親族同士らしい。

人口が50人程度の村ではかなり血縁が濃くなるから、まあそうした関係なのだろうとシュウは思った。

それで、その村なのだが、例の山賊どもに襲われてほとんどの者が殺され、村は略奪し尽くされたということらしかった。

売り物になりそうだとこの二人は拉致されたので、結果として生き残ることが出来たというわけだ。

今更村に帰っても生活のめどが立つわけでもなく、かといって、

頼る当てなどどこにもないし、仕事といっても、下働きが出来るかどうかといった事情らしい。

聞けば、ほかの者たちは皆旅人や商人だったらしく、ひとまず帰るあてはあるようだった。

「仕方ないですね、明日までにちよつと考えておきます。今夜はゆっくりお休み下さい」

とりあえずそういつて、二人を部屋に帰した。

そして、最後の問題に取りかかった。

ハリエルフの女性、クリステルは、救出されたあとずっと、シュウが見えるところに居続けている。

そして、話し合いが終わって一同が解散したあと、シュウの部屋を訪れて、今後のことについて話したいと言いつ出した。

この部屋にはサラとジルベルが同室している。

まあ別に聞かれても困りはしないだろうと、クリステルを招き入れた。

うわ、この人も近くで見ると足が長いなあ。

シュウは、胴長短足の日本民族である自分をちよつと残念に思つた。

大体において、人化しているジルベルですら、自分より身長が高く、足が長いのである。

あらためて、クリステルを見やると、この女性もまた、恐ろしく美しい事にあらためてシュウは氣がついた。

昼間は全裸だったこともあるので、極力見ないようにしていたので、儚い印象しかなかったのだが、こうしてみると、意外にも肉感があるなだらかな腰からヒップにかけてのラインも美しいし、サラ

ほどではないが、歩きたびにたてに揺れ自己主張する胸元も、薄着であることもあって、男の目を釘付けにするだけの威力を誇る。

サラの金髪とはまた違う、あわいシャンパンゴールドの髪は、光に透けると白く光り輝く。

耳は、人の耳よりほんの一回り大きい程度で、先端はとがっているが、さほど人との違いは感じない。

瞳の色は、うすい灰色に近いシルバー。おそらく、色素の量が少ない一族なんだろうなとシュウは考えていた。

「すいません、こんな狭い部屋なんで、ベッドにおかけいただく事になります」

一応四人部屋なのだが、狭い部屋に無理にダブルベッドを二つ置いたような構造の部屋なので、とにかく狭い。

シュウの横にサラが座り、ジルベルの横にクリステルが座って対面したが、この四人の間を人が通り抜けるのは難しいくらいに狭かった。

「それで、お話とは一体、どのような内容でしょうか？」

シュウが切り出すと、クリステルは、はじめてふっと恥じらうような表情を浮かべながら、シュウだけを見つめていった。

「わたくしを、シュウさまの側妻そばめとしていただきたく、お願いにかがいました」

ああ、やっぱりこういう話になったか。シュウは向かいに座るジルベルを見た。

ジルベルはおおかた予想が付いていたのだろう。人の悪い笑みをサラに向けてニヤニヤ笑っていた。

そっとサラを盗み見る。

表情の抜け落ちたような冷たい顔をしているが、瞳だけは強くクリステルに向けている。

だが、クリステルは、そんなサラに一顧だにせず、嫣然えんぜんと柔らかな微笑みに羞恥を含ませながら、シュウをじっと見ていた。

人生で、集中してモテる時期がある。というような話を聞いたことがある。

これまでの18年の人生で、おおよそモテたことのないシュウにとって、ここに来てからのこの状況は、もはや自分のことではないような劇場感というか、リアリティのない状況に思っていた。

「お断りいたします」

シュウは即断した。

「それは私が他種族だからでしょうか？　それとも、なにか私に不都合でもございますでしょうか？」

断られてもまったく意に介していない風で、さらりとクリステルは言って返す。

「いいえ。私の問題です。」

まず僕は現在、この二人の女性から求婚されていて、それを保留させてもらってる状態です。その上女性を増やす事は考えられませんが

「それはいかがでしょうか？　わたくしは、妻にしていたきたいとは申し上げておりません。あくまで、側妻の一人としておそばに置いていただきたいとお願いいたしております」

「同じ事です。サラさんは、なんというか、一夫一婦の暮らしを望んでいますから」

「ジルベルさまは違うのですか？」

「我はまあ、人の子らの性さがというか、強いオスがメスを囲うのを知っておるからの」

「まあ。それではわたくしも、ジルベルさまに賛同いたします」

「なんであなたたちはそうなの？」

サラは声を荒げた。

「むしろ我も聞きたい。サラよ、なぜお前はシュウを一人のモノにしたがるのかの？」

「それが男女の当たり前の姿だからよ！　あなたの種族でもそうだって言ってたじゃない」

「お前らの種族では当たり前ではあるまい。むしろ、シュウほどのオスであれば、優れた子種を次代に残すためにも、多くのメスを孕ませる必要があると考えよう」

「……」

「我らの種族は多産だからのう。ところで、お前一人で背負いきれるのか？　こんな世界ゆえ、子など失うは容易い。たやすお前は淡々とたくさんの子を宿し、ただ育てていくだけの女になれるだろうかの」

「子供など、考えたこともありません！」

「そうか、それはすまなんだの」

「サラさま、ジルベルさま。承知いたしました。それでは、私は側妻についての申し出は控えさせていただきます」

「ほう、よいのか？」

ジルベルは、愉快そうにクリステルを見つめる。

「ええ。わたくしはエルフですので」

「おお、なるほどの。では我もそれで構わぬかの」

「どういう事よ？」

サラは訝しげに二人に聞いた。

「わたくしたちは、あなた様が女の努めを終えたあとも、今のままの年格好でおりますのよ？　あなた様が天寿を全うなさっても、おそらく今の見た目のままにいることでしょう。当然、ここも」

そういつてクリステルは、自分のお腹を撫でる。

「ですから、あなた様がどうしても、シュウさまを独り占めなさりたいというのであれば、わたくしはただお側に置いていただけるだけで構いません」

「それならシュウ君も同じ事でしょう？　私とシュウ君は二つしか違わないのよ？」

「それは違うのう。シュウは我の血を受け入れ、我の守護を持つ。もし我の命をシュウに流し込めば、シュウは今のまま、幾百年にわたって生きられよう」

「シュウさまが望めば、私どもの氏族にも、そうした秘技がありま

すので、エルフと共にあるお方として、数百年、ご一緒に生きる事も可能です」

サラが真っ青な顔をしてうつむいてしまったのをみて、シュウは、とりあえず話を収めるべく、話を切り出した。

「とにかく、今日はこの辺にしよう。ところで、クリステルさんは、戦闘は出来るのですか？」

「ええ、こう見えてもわたくしは、世界にあこがれ、ふるさを出た女ですから」

クリステルが言うには、彼女は、弓や剣も扱えるが、精霊魔法の使い手だと言うことだった。

魔法使いが増えるのはありがたい。

その能力から、どうしても防御に回らざるを得ないサラのバックアップとしても、もちろん、攻撃側の意味にとっても。

「わかりました。僕にもちよつといういろいろ考えさせられるべきものはありますけど、とにかく、ご一緒いただけるのは光栄です。よろしく願います」

とにかく、今夜はクリステルは、せっかく取った部屋に引き取ってもらった。

その日の晩は、シュウはほぼサラの抱き枕状態となり、男の子として非常につらく悩ましい一夜となった。だが、やはりどこか肝が据わってるのか、夜半にはすっかり寝付いてしまっていたのだが。

翌朝、例の男女の処遇を考えていたシュウは、思い立って、村役人を呼び出した。

「あの山賊が使っていた馬車なんですが、一台お譲りいただいただけませんか？」

「ほう、それは」

「僕たちの馬車もう手狭ですし、今回何人か同行者が増えますの

で」

「なるほど」

「今回の件では、こちらの皆様にも費えが多く大変でしょう？ 僕たちとしても、馬車を譲っていただくに当たって、金貨一枚をご用意いたします」

「！……わかりました。そう仰っていただけるのでしたら、私の権限で、お譲りいたしましょう」

やはり昨日感じていたように、この男は金に汚いようだ。

もつとも、下手に騒がれてノイスバイン王国の時のように、王宮まで出頭しろなどといわれては溜まらない。

「それと、これはお役人さまに、僕たちからの心ばかりのお礼になります」

シュウはこの役人に心付けを渡してみようと思って、サラに金貨一枚を彼の手のひらに置いた。

「こ、これは過分な」

「いいいえ、これからなかなかお骨折りな作業もおありでしょう。お役立て下さい。」

僕たちは、大変申し訳ありませんが先を急ぐ旅路です。お手伝いできないお詫びとしてお受け取り下さい」

「では、かたじけなくいただいております。馬車のほうは、あの一番大きいのをご利用立てしますので、どうかお使い下さい」

「ありがとうございます」

これで、ようやくこの村から退散できそうだ。

「あらためて紹介します。僕はシュウ、彼女はサラ。ジルベルに、クリステルです」

「わ、私はベンノーです。彼女はアルマ。必ず力を尽くしますので、お願いいたします」

結局、二人には雇われてもらうことにした。

行く先も身よりも仕事もないというのは気の毒だったし、なによ

り、純朴そうな二人なら、一緒に旅していても大丈夫そうかな、と思えたからだ。

なによりありがたいのは、二人とも、馬の世話が出来ることと、御者を勤められることがわかったことだ。

これで、サラやシュウにも自由な時間が生まれることになる。

炊事や洗濯もアルマが出来ると言うことだったので、働いてくれる彼女たちには申し訳ないが、ほんとうに樂をさせてもらえそうだと、シュウは嬉しかった。

山賊の親分が使っていた奴隷運搬用の馬車は、頑丈なのが取り柄なくらいで、あまり乗り心地も良くないし、道具も揃っていない。ひとまず、クリステルと従者二人に使ってもらうことにして、最低限、この村で買える物資を買い込み、一行は昼前にはこの村を旅立った。

万が一ヒルゼルブルツ王国の中枢までにシュウたちの話題が伝わったときに、出来るなら、国境を越えておきたいと思ったのだ。

だが、思ったよりあの村役人の小悪人ぶりが役に立った。

ほとんど自分の手柄と言うことにして、山賊の財産やら国からの褒賞を自分のものにしたらしい。

シュウたちにとっては、ありがたいことだった。

こうして一行は、5日かけてヒルゼルブルツ王国を出て、『始まりの街』レオナレルのある神聖ネカスタイネル国に入っていた。

アンセリ村を旅だった日の午後、昼食のため休憩を取っていた草原でのこと。

「そもそも、どうしてクリステルさんは捕まったんですか？」

まだ一度もその真価を見てはいないが、話を総合すれば、クリステルは相当な精霊魔法の使い手でもあり、護身用に弓と剣が扱えるような戦士でもある。

それが、山賊風情に捕まる、というのはなかなかシュウには理解しにくかったのである。

「泊まった宿がグルだったのです」

クリステルによると、捕まった日に泊まった宿で出された薬に、しびれ薬の毒が仕込まれていて、そこで身ぐるみ剥がされたあげく、今もつけている『隷属の首輪』をはめられたということだ。

この首輪にはなんらかの機構しくみが仕掛けられていて、逆らったりすると一瞬で命を奪うようになっていて、ということ。

そして、彼女が魔法を使ったり、誰かが外そうとしても、その効果が発動することを山賊どもに教えられ、今までなにも効果的な手が打てなかったことを説明してくれた。

「サラさん、たとえばですけど、直接クリステルさんに魔法かけて、それから首輪外せないかな？」

「どんなトラップにもよるけど、まずクリステルさんにプロテクトかけて、そのあとで魔法避けにリフレクトと、毒なんかのためにレジストなんかをかけてから外せば、何とかなるかも知れないわね」

「本当ですか？」

クリステルは、二人の会話を聞き、嬉しそうに立ち上がった。

「いえ、可能性の話です。私は、ほかの方法があるんだったらそっちで外した方がいいと思う」

サラはリスクを思っただび腰だった。

「いえ、いつ誤作動して死ぬかもわかりません。だったら、一刻も早く外していただきたいです」

「……」

「お願いします。もし、わたくしに何かあったとしたら、ここにいらっしゃる皆様が証人です。サラさま」

「わかった……」

サラも渋々、引き受けることにしたようだ。

安全のため、一同から離れた草原で解呪をはじめて見ることにになった。

とりあえず、まずはサラ自身に、＜プロテクト＞＜リフレクト＞＜レジスト＞をかける。そして、イスに座っているクリステルに、まずは＜プロテクト＞をかけてみた。

すんなりプロテクトがかかったことを確認し、続いて、＜リフレクト＞＜レジスト＞を重ね掛けする。

慎重にサラはクリステルの背後のつなぎ目をいじる。留め金らしきものを見つけ、サラが指で押し込み、カチッと外れた瞬間――

ズーン！

激しい爆風が周囲にこだまし、少し離れて様子を見ていた一行の肝を冷やさせた。

「おい、大丈夫……」

爆煙が晴れると、そこには二人の姿はなかった。

あわててシュウが駆け寄ると、焼けこげた爆心地の少し先の草むらから、二人の女性の笑い声が聞こえてきた。

のぞき込むと、爆風で飛ばされたのだろう、後ろからサラに抱きしめられ、サラの上に寝ころぶクリステルと、草むらに延びているサラ、二人の笑顔があった。

「肝が冷えましたよ」

シュウもやっと、こわばった顔をほぐした。

「サラさま。わたくしはあなた様に命を救われました。このご恩は、いつかきつと、お返しいたします」

「ふふ、そうね、いつか、きつとね」

出会ってから始めて、屈託なく会話を交わす二人だった。

その日の夜、宿屋で食事をしているとき、クリステルはふと

「シュウさま」

と、思い出したように、声をかけてきた。

「シュウさまは魔法をお使いにならないんですか？」

「うん、使ったことないよ。覚えたいとは思ってるけど」

「申し訳ありません。そのことなのですが、レオナレルに向かうのでしたら、少し思い当たることがございます。出来れば、レオナレルまで、一切練習などなさらずにいていただけませんか？」

「うーん、いい機会だと思ってただけですけど、どうして？」

「話すと長いのですが、要するに魔法を使ったことのない状態が好ましいのです」

「わかりました。じゃあほかのことでもしてます」

アンセリを立った初日には、そんな出来事があった。

神聖ネカスタイネル国は宗教国家だ。

レジナレス大陸のほぼ中央に存在する国家で、全大陸の陸送のハ^{車輻}ブに当たるため、スポーク^{車輻}に当たる街道は他国家に比べても整備さ

れていて、途中にも宿屋を擁する街が繁栄している。

大国家行きの各街道はそれこそ石畳で舗装されていて、それが各関所まで美しく延びている。

街道の石畳は、国家の豊かさの象徴だが、同時に、治安の良さの現れでもある。

ネカスタイネルは、他の国に比べ、軍事力にも特色がある。

ゲームではジョブクラスのひとつだった『聖騎士』が存在する。

王家や貴族家に所属する軍事力である騎士とは違い、教会に属する軍事力だ。

ネカスタイネルでの治安維持は、この聖騎士たちが中心となり、そこに都市警護や周辺護衛などの武力が集約されて運営されている。早い話、とても住みやすい都市なのである。

『始まりの街』レオナレルは、ゲーム中ではスタート地点に当たると言うこともあって、大陸一の大都市だった。

それはどうも、この世界でも同じようだ。

大陸の商業・流通・文化・芸術の中心であり、また、宗教上の聖地でもある。

華やいだ雰囲気と、絶え間ない人間たちの雑踏。

この街を目指して寂れた裏街道をひた走ったシュウたちにとっては、心沸き立つ思いのする光景が、レオナレルには広がっていた。

シュウは、この都市に来たらずやろうと道中考えていた事がある。

シュウとサラの持つ財力は、おそらくこの街で邸宅を所有することなど充分可能なものだ。

大陸のほぼ中央ということもあるので、これから自分たちがこの世界を調査するに当たっての『拠点』にしたいと考えていた。

シュウたちは、この地でもっとも華やかなホテルに宿を取り、まずは空き物件の調査を始めることにした。

だがその前に……。

まずは、ゲームとこの世界の違いが知りたくて、ゲームにあったさまざまな施設を見て回ろうと思った。

シュウがサラにそう提案すると、サラも二つ返事でついてきた。

クリステルに金貨を100枚ほど渡し、ジルベルやベンノー、アルマと彼女自身の身の回り品や新しい服の購入などを頼んだ。

30日近い旅は、やはり旅装に汚れやほつれが出ているので、せっかくだから、贅沢に新品を整えて欲しいと思ったのだ。

ベンノーやアルマは恐縮して遠慮してきたが、クリステルには、彼らにも数着の普段着と正装、そして、いわゆるお屋敷勤めのための服などを数着ずつ見積もるようにお願いしておいた。

同様に、クリステルとジルベルにも、数着の正装、普段着などを見繕って購入するよう話しておいた。

ゲームスタート直後に登場するチュートリアル館は、巨大な大衆酒場になっていた。

そこを入り口からちらっと覗いた二人は、昼食で賑わいを見せ始めたその店には入らず、次の拠点を目指した。

ジョブチェンジの神殿。

プレイヤーレベルとジョブレベルが一定数以上になると得られる新ジョブをステータスに書き加えるための神殿だ。

だがそこも、寂れた無人の古い神殿があるだけで、特に人で賑わうような雰囲気を感じさせなかった。

クエストが交付される『冒険者の館』は、いわゆる冒険者ギルド的な存在になっているようだった。

壁には、さまざまな依頼が書かれた羊皮紙がきれいに貼り出されていて、それを一個一個真剣な表情でながめて通る冒険者風の男女が多数いた。

「……わかつてはいたけど、やっぱり、違うのね」

サラは少し、肩を落としていた。

「そうですね」

シュウは努めて明るい声を振り絞って、言葉を継いだ。

「まあでも、めげずに頑張りましょうよサラさん。ここだこの世界って、悪いことばかりじゃなかったじゃないですか」

「うん」

シュウはサラの肩を抱いて、建物から出ていった。

不動産屋がないかと探してみたが、こうした都市の場合、不動産屋は平民クラスの物件、それもおもに賃貸を扱うもので、邸宅が欲しいとなると、どうも勝手が違うようだ。

この都市には、5人の支配層——評議員がいて、それぞれ、軍事・経済・司法・行政・治安を担当している。

その評議員の、おもに治安を担当する者の配下に、どうやら、邸宅などを管理する組織があるらしい。

とりあえず、シュウとサラはホテルに戻って、支配人に相談してみようと決めた。ホテルの支配人というのは、意外に世間に顔が利くものだからだ。

支配人は、白髪交じりの小柄な紳士だった。

シュウはまず、身分を明らかにするために、ノイスバイン王の発行してくれた手形を支配人に見せ、それから、自分がこの街で邸宅を構えたいことを相談してみた。

「なるほど、そうなりますと、評議員アロイス様のご裁可が必要になるかと存じます」

アロイスというのが、件くだんの治安担当評議員の名前のようだ。

「まずはアロイス様のお屋敷に出向き、掛かり付の文官などに話を通されてはいかがでしょうか？」

支配人は、自らの机で羊皮紙に自らの名で紹介状をしたため、シ

ユウに手渡してくれた。

「これをお持ちいただければ、取り次いでいただけるかと存じます」
「ありがとうございます。これは些少ですが、ホテルの皆様への感謝の印にお受け取り下さい」

シュウは、チップとして金貨5枚を支配人に手渡した。

過剰なチップではあるが、支配人はためらうことなく、そして、へつらうこともなく堂々とそれを受け取り、さまになった礼をした。とりあえず明日は、サラと二人でアロイスの屋敷に行ってみよう。そう決めて、シュウは皆が待つ自室に戻った。

今回借りた部屋は、それぞれの寝室になる個室が5個、部屋の中心は30畳はあろうかという大広間になっていて、食事もこのテーブルで出来る。

室内に専用浴室もあるというとてもなく贅沢なスイートだった。宿泊費は一泊金貨一枚。食費と部屋の利用料を含んでいる。

シュウは人数分の食事の給仕をしてくれたボーイにチップを渡そうとしたが、

「支配人より、『すでに多大な心付けをいただいている』とうかがっております」

と、受け取ろうとしなかった。教育の行き届いたホテルだな、とシュウは感心した。

一同はすでに入浴を済ませ、今日買った真新しい服に身を包んでいた。

やはり、こうして落ち着いて身なりを整え、贅沢な食事を前にすると、誰しも心が華やぐ気持ちになる。だが、そうでない者たちもいた。

ベンノーとアルマは、従者でありながら、一同と同じく正客としての待遇を受けていることに、とまどいを隠しきれなかった。

不思議なことに、シュウもサラも、主従というものに全く頓着し

ていない風だった。

ベンノーもアルマも、従者をした経験のない一介の農民だったのでよく解らないのだが、自分たちの主の異常さだけはよく解っていた。

だいいち、従者である自分たちの日常の服まで買い与えるような主はまずいない。

せいぜい、屋敷住まいの従者の制服を用意する程度だろう。

こうした浪費が、巡り巡って自分らの借財になるのでは、と恐れたベンノーは、つい、シュウにそのことをおそろおそろ問いただしてみた。

「いえ、ここまで良くやってくさいましたので、僕たちからのプレゼントだと思ってください」

質問の真意を機敏に察したシュウは、そういつて二人を安心させた。

「本来は従者は食事は別に摂るものだと思います」

アルマも、主たちの食卓に座らされることが居心地悪く、そういうと、

「そうなんですか？　でも旅の途中からずっと一緒だったじゃないですか」

と、これもまた全く意に介さないように言う。

「気にしないでどんどん食べてください。足りなければいくらでも注文しましょう。今日はあれですよ、無事に着いたお祝いみたいなもんです」

欲しかったらお酒も飲んでくださいね、シュウはベンノーに言うが、かれらは恐縮してしまっていて、あまり食べたものの味もわからないほどだ。

食事が終わると、応接間らしきソファアの部屋に移り、ベンノー

ら従者も交え、くつろぎつつ、今後の相談を皆とすることにした。

まずシュウから、自分たち二人がこの世界の人間ではなかったこと。ここにはどういう手段かわからないが連れ込まれてしまったこと。そして、そうした謎を探す手がかりになればと思って、この街に来たこと。手がかりになりそうな場所は全滅だったこと、などを話した。

その話は、ジルベルにとってはどうでもいいことらしく、ベンノーとアルマには、理解を超えた内容だった。興味深そうに聞いているのはクリステル一人だった。

「で、まあ今後なんですけど…」

シュウはまず、この町に邸宅を構え、今後の活動の拠点にしたいこと。そのために評議員に会いに行き、手頃な物件を購入する予定であることを告げた。

あとは、シュウ個人の道楽として、鍛冶工房を手に入れたと思っていた。

騒音の問題もあるのでおそらく、邸宅では不可能だろうとおもう。さらに、馬はともかく、馬車をもっと機能的なものに新造したいと思っていた。

そして、邸宅を維持管理するための人材を確保したい。

シュウは一通りそんなことを一同に伝えた。

「ところで、今後のことですが、なにか希望や提案がある方は居ますか？」

シュウは、サラも含め、一同に問いかけた。

「僕としては、一応以前土地勘があった南西の方面を旅したいとは思いますが、どうせこの分では見知ったものもないんじゃないかと思えます」

「私もシュウ君と同じだとおもう」

「我は特にやりたいこともないの」

従者の二人は、口を挟むまいと考えているようで、一切発言する

ことはなかった。

「それでは…」

クリステルがこの場の発言を引き取っていった。

「まずわたくしは、この町でお会いしたい人がおりますので、シュウさまにご同道いただきたく思います」

翌日。

とりあえず、どこかに案内したいというクリステル、そして評議員公館に邸宅斡旋の依頼に行くシュウとサラの3人で、今日は出かけることにした。

まず評議員公館の門番に、来意を告げ、ホテルの支配人が書いてくれた紹介状を手渡した。

紹介状を見た門番は、当初のうさんくさそうで面倒そうな態度を豹変させると3人を公邸入り口から建物の中に通し、なんらかの許可を得るためだろう市民でゴった返す窓口前を素通りし、やや広めの面会室といったような一室に案内してくれた。

「こちらでお待ちを」

門番はそういうと退室していった。

ほんのしばらくすると、3人が通された扉とは違う、もう一つの扉が開き、大変身なりのいい貴族然とした男が、扉を開けた従者と共に室内に現れた。

「紹介状は拝見した。わたしはホラーツ。アロイス評議員の秘書だ」

「はじめましてホラーツさま。こちらはサラ、クリステル。僕はシュウ。よろしく願います」

「さ、かけたまえ」

まずシュウは、身分の証明のためにノイスバイン王の手形を見せて、支配人が紹介状を書いてくれた経緯を手短に話すと、本題である、邸宅購入の件を話した。

予算を聞かれたが、相場などが一切わからないシュウは、予算よりもまずは物件を見せて欲しいと頼む。ホラーツは従者に、空き物件についての資料を持ってくるように命じた。

その空き時間を使い、シュウは、鍛冶場を購入したいこともあわせて相談してみた。

「一般には、鍛冶場は工芸のギルドが取り仕切っている。表通りにある店舗のある鍛冶屋になれば、ここでも扱いがある」

ホラーツはいった。

従者が羊皮紙の束を抱えてきたので、ついでに鍛冶場のある店舗も見せて欲しいというと、ホラーツは再度、従者に資料を取りに走らせてくれた。

物件は5軒ほどの空きがあるようだった。

そのうちの2軒にシュウは心惹かれた。

1軒は、街の中心にある教会施設のすぐそばで、5軒のうちもっとも規模が大きく、建物が大きい。立地条件も最高らしい。だが、庭がない。

もう1軒は、教会から南に2ブロックほど下った一角にある。

建物は従者用の個室40、1階は食堂施設と玄関ホール。二階に応接間と来客宿泊施設があり、三階に執務室と個室、主用の居間と寝室がある。建物自体は1軒目の半分ほどの規模だ。

そして、この物件には、庭があり、厩舎があるようだ。

物件金額は、2軒目のほうが半額近く安い。

一瞬悩んだが、シュウは2軒目に即決した。

店舗付の鍛冶場も、幸いなことに南ブロックにあった。

邸宅から5分ほどの距離だろうか？

こちらもあわせて購入することにして、早速価格の確認となった。

「二つ合わせて金貨200でどうだろうか？」

ホラーツは言った。値引きしてくれたらしい。

「お願いします」

シュウは右手を出した。ホラーツはしっかりと握り返した。

「毎年、購入費の5%が地税として徴収される。レオナレルの市民には人頭税は免除される。ただし、奴隷がいる場合は、人頭税は主人にかけられる」

ホラーツは、そういうと、二枚の羊皮紙を取り出し、サインをさせた。

物件所有者のサインはサラにさせる。

いつもシュウが従者に見えるので、いろいろ説明が面倒くさいのだ、話せば長くなるので、サラを立てる方が話が早い。

「鍛冶場のほうは相当荒れている。手直しが必要かも知れないが勝手にやってくれ。必要ならつぶして建て替えても良いが、近隣とは揉めないでくれ」

「職人の手配などはどうしたらよいでしょう？」

「工芸ギルドで依頼してみると良い。ついでに邸宅も見て貰うとよい」

「ありがとうございます。あと、邸宅のほうの使用人ですが、どこで依頼するのがよいでしょう？」

「そうだな、普通であれば商業ギルドだろうが……シュウ殿が持ってきた紹介状の主にまずは相談してみると良からう。ホラーツにそういわれたと言ってみると良い」

「ありがとうございます」

シュウは金貨200枚と、今年の分の地税10枚を差し出した。先ほどサインをしたのが権利書だったのだろう。ホラーツは4枚の権利書を二組ずつ割り印すると、片側ずつをサラに手渡した。

そして、納税を証明する書類にサインをし、それもサラに手渡した。

「これでこの物件は君らのものだ。ようこそ、レオナレルへ」

ホラーツはそういうと席を立ち、去っていった。

「では、サラさんはこの書類を持って、ホテルの支配人さんに使用人のことを相談してください」

「うん。シュウ君は？」

「僕はまず工芸ギルドにいった、リフォームの相談をしてみます。ついでに馬車も。」

そのあと、クリステルさんの用につきあいます」

「わかった。私が居ないからってシュウ君に手を出しちゃダメよクリステル」

「承知しました」

二人の美女の冗談か本気かわからないやりとりで挟まれ、シュウは苦笑する。

とりあえず、目的地に別れた。

工芸ギルドは、繁華街である南ブロックの根本、つまり教会のすぐ近くにある。

ホテルは東ブロック、評議員の公邸は教会のある中央ブロックになる。

空き家になっていた邸宅は南ブロックにあるので、おそらく豪商か誰かがオーナーだったのだろう。

工芸ギルドに入る。

やはりギルドとかは、その所属するものたちの匂いが付くなあ、とシュウは思った。

冒険者ギルドというのは、こうだ。

誰かが扉から入ってくる。

誰も彼もがその顔を見て、相手の値踏みをはじめるが、極力、見てみないふりをする。

そして、たいていの場合、冒険者ギルドで値踏みをする連中のつける値札は、その人物の実力より安く付く。

先ほどいった評議員公館はまあ、典型的な公務員のそれだ。休まず、遅れず、働かず。

やっかいそうな来客は特別待遇でとっとと交わし、あとはまあ、

ほどほどに。

工芸ギルドは。

なんとまあ無愛想で、無関心で、静かなところだろう。

みな一様に不機嫌そうなのは、そうすることで、余計な会話をかけられたくないからだろう。

壁の依頼をながめる者も、みな狭い範囲——自分の分野のみを見たら帰るか、依頼書を手にとって受付に行くかだ。

その受付も、こうした空気の中だからだろうか。かわいい女の子など置かない。

みな、老齢で、職人たちに輪をかけたような頑固で偏屈そうなじじいばかりだった。

「すいません。僕はシュウ。アロイス評議員のところのホラーツ秘書から、こちらに依頼すると良いと聞いてきました」

「……そうかい。その扉から中に入って突き当たりでまちな」
予想を裏切らない無愛想さだ。シュウはちょっと嬉しくなった。

シュウたちが、フロアと中を区切る扉をくぐり、突き当たりで待っている、非常に背の低い老人がやってきていった。

「評議員の処からの客つてのはあんたかい？」

「はい、シュウです。依頼に来ました」

「……はいんな」

目の前の応接室の扉を開けると、老人は先に入り、ソファに座った。

「ではあらためまして。僕はシュウ、こっちはクリステル。

今日は、購入した邸宅と店舗の手直しを依頼しに来ました」

「ほう」

シュウは、控えておいた物件の住所を老人に示した。

「ほう、あれを買ったか、たいしたもんだな」

「そうですか？」

「ああ、見る目がある。ほかに何軒か候補があったろう」
「ええ」

「そこからあれを選んだならたいしたもんだ」

「どうしてですか？」

「あれは、わしが建てた」

「……こういうタイプは、自尊心が強いくせにダメな人間が多い。
シュウは少し緊張した。

それをめざとく老人も感じたのだろう。ひとつ小さく舌打ちすると
「いやなガキだな」

と、聞こえるほど小声で言った。

「それはどうも」

シュウも、あえて、買い取った。

「あの邸宅なら手直しはまあ必要あるまい。問題は南3ブロックの
店だな。

あそこはもうだいぶいけない。建て直したほうが早かろう」

「ではそのように。邸宅も一通り確認をお願いします。その後、見
積もりをお願いします」

見積もりといわれて、さらに老人はいやな顔をした。

見積もりを出せというたぐいは、金にうるさい。

「店のほう、建て直すにしても、工房は鍛冶場でいいのか？」

「はい。鍛冶場に必要な内装や工房もすべてコミでお願いします。

二階には住居を用意してください。使用人を住ませるかも知れま
せんで。

あとは今のままの店を踏襲してくればけっこうです」

それだけ言うとシュウは立ち上がった。

やむを得ず老人も立ち上がる。

「手付け金があるなら今払います。見積もりは3日以内に。
何かあればホテル・レオナレルまでお願いします」

そういうと扉を開け、クリステルを先に退室させながら、シュウは振り返っていった。

「そういえば、僕はあの店で武器や防具を作ったり売ったりするつもりですが、このギルドへの登録は必要ですか？」

「そうだな」

「ではその手続に必要なものも、見積もりの時に用意してください。あと、初対面の者には最低限、名前ぐらい名乗るべきだと思いますよ？」

やる気がないのなら、どうか後進に道を譲って隠居してください。

なんならついでに、このあと評議員のところに行って報告しますよ？

では」

「ま……まて」

はじめて、老人の顔に緊張が走った。

どう見ても小僧っ子の使いにしか見えなかったこのガキが、どうやら自分の交渉相手だやと気がついたのだ。

「無礼は詫びる。わしはこのギルドの長を預かっているイエフだ」

そのあと、あらためてイエフは職人頭などを呼び寄せ、シュウはもう一度条件などを伝え、彼らはそれをメモに取り、明日、ホテルに鍵を取りに来るといって別れた。

「あきましたわね」

クリステルは、工芸ギルドから出ると、ため息混じりの苦笑を浮かべつつ言った。

「全くです。工芸ギルドってどこもあんなんでしょうかね？」

シュウはそうだったのだが

「いえ、シュウさまにあきれたのですよ」

クリステルに笑われてしまった。

クリステルが案内したい場所というのは、街の北ブロックのかなり遠いところらしい。

ホテルのドアマンに馬車を頼み、行き帰りの足になってもらうことにした。

厩にあずけた自分の馬車を出すのは、馬具の装着や馬車の準備が手間だからだ。

高級な送迎馬車に揺られ、目的地までたどり着く。

南に広がる商工業の街や東に広がる宿屋などの歓楽街。

西に広がる貴族たちの街に比べ、北に広がるのは平民や貧民が多い住宅街だった。

その果て、都市城郭の北門にほど近い林のそばに、一軒の小さな煉瓦造りの家があった。

その家の前に馬車を止め、御者にここで待つように告げると、クリステルはシュウを案内し、その家の中に入っていった。

「おばさま、ご無沙汰いたしております」

おばさまといわれた女性は、シュウにはどう見ても30—40台にしか見えない。

だが、ハイエルフの一族なら、見た目でシュウが年齢を当てるような日は、たぶん一生来ないだろう。

見ると、クリステルにどこかしら面差しが似ている女性だった。

「お客人をお連れしています。こちらはシュウさま。わたくしの命の恩人です」

「あ、シュウと申します。はじめまして」

「ようこそシュウ殿。わたしはこれの外祖母で、カトヤという。

クリステル、お前が選んだのはこのかたかい？」

「はい、おばさま」

「どれ、ほう……これはたまげた」

カトヤと名乗ったおばばさまは、シュウを鑑定するようにじつとながめ、

「なるほど」

満足そうにうなずいた。

そして、おもむろに部屋から出るとしばらく物音を立てていたが、やがて、ひとつのカバンを持ってこちらに来ると、そのカバンをシュウに持たせて、言った。

「では行くぞ」

「えーと、どちらに？」

「決まっておろう、里帰りだ」

「今からですか？」

「当然だ」

「おばばさま、シュウさまにもご都合がありますので」

クリステルは、このおばばさまの性格をよく解っているのだろう。苦笑しながら間を取りなした。

「そうか、なら今夜は泊まっていけ」

「いえ、まだ何日か街の方で仕事が残っておりますので」

「なんと。誰かに任せていけないのか？」

「おばばさま」

「おお、そうか。ところで、シュウ殿は今どこにおられるのだ？」

「ホテル・レオナレルです」

「なんと、そうか。あそこはわしも一度泊まりたいと思っておったが、ついに機会がなかったわ」

「えー、と。じゃあご一緒しますか？」

クリステルが目線で『やめろ』と訴えたがもう遅かった。

「よういうた！ ではご相伴にあずかろうとするかな」

カトヤはシュウにカバンを持たせたまま、真っ先にそこに止まっていた馬車に乗ると、

「何をしておる、早く乗らんかい」

あつけにとられる二人を急かせた。

14 (後書き)

いちろーさんのご指摘で、誤字修正いたしました。ありがとうございます。

カトヤというクリステルの「おばばさま」の案内と接待を彼女に任せ、シュウは、ホテルの支配人と話すために、カウンターで彼を呼び出した。しばらくすると、ボーイが彼を支配人室まで案内してくれた。

「お帰りなさいませ。お話はサラ様から伺っております」

支配人はそういうと、シュウにソファを勧めて自らも座った。

購入した邸宅と店舗の住所を支配人に伝え、なるほど、良い買い物をなさいました。と微笑んだ。

「それで、ホラーツさんに使用人の斡旋についてお尋ねしたら、支配人さんにお話しするように彼が言っていた、と伝えるように言われたんです」

「なるほど、彼らしい」

「お知り合いですか？」

「友人ですよ」

具体的にどのような人材が欲しいのか、と支配人は尋ねた。

「すべてです。執事長、家政婦、^{メイド}料理人、馬丁や庭師など……」

「馬丁や庭師もですか？」

「ええ。とは言っても庭仕事や馬の世話などが常時あるかわかりませんから、出来たら自分の仕事を自分で見つけてくれるような人がありがたいですかね？」

「そうですね。それから？」

「僕たちは揃って旅に出ることもありますから、というかもう早速その予定なんですけど、まあそんな状態なので、執事長には、人付き合いが上手で、金勘定に明るく、不正をしない方が欲しいんです」
とにかく、信頼関係を築く時間があまりない。ならば、高給であっても信頼できる人が欲しい。

「それはそうでしょうね。ほかには？」

「そうですね、それ以外の方は、まあ執事長にお任せしたいです。たとえば、育てていただけるのであれば、未経験の人を雇っていただいても構いませんし、人数も、必要と思われるだけ、執事長の裁量で人事をこなしていただきたいですね。

もちろん、部下の教育もお願いしたいです」

「それは条件が厳しいですな」

「ですね……」

「お店のほうはどうかさるおつもりですか？」

「そうですね。店はひとまず、今僕たちの従者をしている二人に任せてみようかなーとか考えてるんですよ」

「ほう」

ベンノーとアルマを屋敷で使うにせよ、かなり長い期間の教育が必要だろう。

どうせ教育が必要だったなら、まずは武器防具の商いを覚えさせ、彼らに店番を頼めばいいのではないか。シュウはそんなことを考えていた。

「どうせおそらくあの物件は建て替えになりますんで、開業はまだ当分先の話になります。

その間、あの二人を預かってくれるようなお店があると良いんですが」

「それは、修行のために無給で、という意味ですか？」

「はい。うちの従者ですし、給料はこちらで払います。

それに、聞いたところ、あの二人は読み書きと計算が出来ますから」

だから、山賊たちに殺されず、奴隷としての値打ちを認められたようだと、二人は言っていた。

「なるほど」

「店が完成したら、あの二人をあそこに住まわせようと思っています。」

まあそれまでは邸宅のほうで寝起きをしてもらえばいいかと思えます」

「奴隷はお使いになりませんか？」

「必要なら。それは執事長の裁量に任せます」

「わかりました。」

私が知る限り、そうした条件で働ける人間は、今のところこの街で一人しか思い浮かびません」

「そうですか。お手数ですが、ご紹介いただけますか？」

「いえ、その必要はございません」

支配人は、にやりと笑って、こういった。

「わたくし自身ですので」

シュウは驚いた。

この支配人は、これほどのホテルで運営トップを任されている。

それは確かに、シュウが求める最良の人材である。

「え……そうです、ね？」

「私ではご要望に届きませんか？」

「いえ、反対です。支配人さんほどの方が、僕たちのような得体の知らない者のために、現職を捨てて来ていただけたとは思っていませんでしたので」

「ノイスバイン王に『友』と呼ばれ、このホテルで最高級のスイートに居続けをなさって、邸宅と店を一括で購入なさる。そうした方にお仕えするというのは、これはなかなか魅力的だと思われませんか？」

「そういつていただけるのはなんというか、面映ゆいですが……。
わかりました。それでは支配人さん……」

「これは失礼。名乗っておりますでしたな。私はラルス・フルストと申します」

「それではラルスさん。あらためまして。

シュウ・タノナカです。あなたを僕の執事長としてお迎えしたい

のですが、お引き受けいただけますでしょうか？」

「喜んでお受けいたします」

二人はそのまま握手を交わした。

「ところでシュウ様。私の報酬はどのようになりますでしょうか？」

「今の年収はどのくらいでしょうか？」

「年に、金貨15枚です」

「わかりました。その2倍お支払いいたします」

「承りました」

ラルスは早速、この部屋に副支配人を呼ぶと、

「自分は近く引退をするので、5日をめどにこの部屋に引っ越せるよう準備をするように」

といって、副支配人の目を白黒させた。

「そうですね、明日からは支配人の服を着て、支配人代理を名乗ると良いでしょう。」

……あとをお任せしますよ。

何人か引き抜いていきますから、後任の選定もお願いします」

どうやら本気らしいと副支配人は悟り、降ってわいた昇進の興奮に頬を紅潮させながら、美しいお辞儀をして退室した。

「ところでラルスさん」

「どうか、ラルスとお呼び下さい。ご主人様」

「いや、それはどうしたものかと」

シュウは苦笑した。

「とにかくラルスさん。」

状況は今お話ししたとおりです。出来ればすぐに旅に出たい事情があるんですが、少なくともあと数日は、さまざまな準備をしなければなりません。

ですので、その間に、人事も含めてラルスさんにも準備のお手伝

いをいただきたいのです。よろしいでしょうか？」

「かしこまりました。ご主人様」

「ご主人様はお辞め下さい。なんか背中がむずむずします」

シュウは苦笑を深めた。

「……わかりました、シュウ様」

「ありがとうございます。」

それで、まずは前払いとして金貨30枚をお支払いいたします。

それとは別に、支度金として金貨10枚。」

シュウは早速、計40枚の金貨を積み上げる。

「ラルスさんご自身の契約書をお作り下さい。お持ちいただいたらサインいたします。」

それと、早速、屋敷の人員の手配をお願いいたします。

明日は、ホラーツさんが邸宅の引き渡しを、工芸ギルドから、工事についての立ち会いなどに人が来ることになっています。そちらの同行をお願いします」

「承知しました。少々お待ち下さい」

ラルスは、自分の机に座ると、机から羊皮紙を取り出し、流れるような筆致で書類を作り、シュウに手渡した。

シュウはその文面を読み、即座にサインをした。

シュウがサインをしている間にラルスは、手帳に、今伝えられた内容をメモしていった。

「ラルスさん。」

ちよつと聞きたいんですが、ラルスさんは工芸ギルドの人脈とかに詳しいでしょうか？」

「仕事柄、多少のお付き合いがございます」

「あそこのギルド長はダメです。」

誰か、あそことつきあう上でこれは、という方をご紹介いただけないでしょうか？」

「かしこまりました。」

序列3位に、ザールという男がおります。明日お引き合わせする

よう手配いたします。

しかし、どうなさいましたか？」

シュウは、昼間の一件をラルスに話した。

ラルスは、柔らかな微笑みを浮かべてうなずいた。

「なるほど、それはいいかもしれません」

シュウはそのあと、残りの案件をラルスと詰めていった。

買い取った店舗の工房についての要望や、店舗の設計について。

工芸ギルドに依頼したい、新しい馬車について。

屋敷の運営について。

ラルスは、内心で、目の前にいるこのあどけなさの残る少年に舌を巻いていた。

数十年の実務のプロとしては、まだまだ少年の思考や計算には穴がある。

それはもちろんそうだろうが、それでもいくつも、ドキリとさせられる視点や発想が随所に現れている。

この少年が年を経て老練したら、どれほどの怪物になるだろう？
そう思うと、ラルスの心は久しぶりに高鳴っていた。

「ラルスさん。たとえば、僕たちが旅のさなかでなにかトラブルにあって、数年帰ってこなかったとします。

その場合を考えた上で、今までの話でかかる費用も含め、総額でいくら、あなたにお預けしておけば安心か、その費用を出してもらえますか？」

「承知しました。それでは、明日の見積もりなどを聞いたあとで、計算しておきます」

その後、シュウはラルスを伴って部屋に戻った。

そして、一同に

「僕たちの邸宅の執事長をお任せすることになりました。ラルスさ

んです」
と、あらためて紹介した。

翌日、物件の引き渡しが終わると、工芸ギルドとのミーティングが始まった。

ラルスがどう手を回したのか、工芸ギルドからは、例のザールという男がやってきた。

打てば響くような頭の回る人物で、シュウは大変ありがたいと思った。

人間というのは不思議なもので、呼吸のタイミングひとつさえ微妙に違うと、それだけでそりが合わなかったりするものだ。

「今後とも、よろしくお願いします」

言外にさまざまな意味をこめて、シュウはザールと握手を交わした。

工芸ギルドとのミーティングを終えたシュウは、ベンノーとアルマを呼び出し、買い物を経た。

昨夜、ラルスの引き抜き後に行われたカトヤとの相談で、彼女が持ちかけた旅にかかりそうな物資を、二人に買いそろえてもらおうと思ったのだ。

二人との契約は、ラルスを通さず、シュウと直接結ぶことになっていた。

その契約書をラルスが作成し、サインを終えたあと、二人には金貨5枚ずつ支払った。

見習いの相場は、金貨1枚などということもある世の中だ。

ただでさえ身の丈を超えた高級仕立て服やら大量の作業着を与えられて恐縮していた二人は、さらに恐縮をしている。

だが、昨夜シュウの話した二人の仕事については、ラルスがよほ

ど脅していたのか、二人は相当の決意を持っていたようだ。

「ベンノーさん、アルマさん。」

このお金はお二人への先行投資です。

あのお店を完全にお二人に任せられれば、充分に元が取れると思いますから、どうか頑張ってください」

シュウはそういうと、とりあえず、今日の買い出しについてお願いしておいた。

大体どのくらいの費用がかかるかというのはラルスが見積もってくれたので、少しだけ余分に金貨を渡し、外で食事をしてくるように伝えて送り出した。

そして、ラルスに預ける資本金の話になった。

ラルスがいうには、総額は金貨3000枚。

これは銀行に預け、手元の小口は100枚ほど。こちらはラルスが必要に応じて銀行から出納するという。

シュウは了承し、二人で銀行に出向き、早速預金を行った。

その他に、「シュウ商会」として登記した店舗の預金も、金貨1000枚で行い、口座の管理を、しばらくはラルスに任せることとした。

一人前の店主になったとき、ベンノーに預ける口座である。

ほかに、万一のためにシュウ自身の口座も作った。

これには金貨を5000枚預け、同様に、ラルスに預けることとした。

「驚きましたな、シュウ様は一体、どれほどの金貨をお持ちなのですか？」

「手持ちであと7000枚はありますよ」

これにはさすがのラルスも驚いた。

シュウにしてみれば、この金貨は、ゲーム中に持っていた通貨残

シト

高がそのまま金貨としてアイテムガジェットに入っていただけのことで、あまり感慨はなかった。

だが確かに、この世界の常識を覆すだけの所持金ではあっただろう。

平民の四人家族が、年に金貨5枚もあれば、不自由なく暮らせるほどの価値がある。

それを、これほど若い男が持っているのは、異常事に違いない。

ラルスは、昨夜のサラの話から、彼女もまたシュウとは別口に資産を持っていることを聞いていたので、おそらく同じくらい持っているのだらうと想像した。

道理で、この二人の金遣いの荒さは理解が出来るところであった。

サラとシュウにとって、邸宅が手に入った大きな利点のひとつに、アイテムガジェットから、不要なアイテムを収納できるスペースが出来たことがあった。

普段使用する武器や防具、そして、予備にストックするものを除き、ほぼ現在はデッドストックになっている。

これらを邸宅の物置に収納すれば、いずれ武器屋を開業したときに、売りさばく商品になってくれるだろう。

さらに、二人が買い込んだ大量の書籍や魔術書のたぐいも、読み終わったり覚えたりしたら、屋敷の書庫に陳列できるのだ。

ラルスが、商業ギルドで店舗の登録や人材の募集、そして、ベンノーとアルマの修行を任せる武器屋への依頼を行っている間、二人は、屋敷の物置や書庫で、こうした不要品の整理を行っていた。

魔術書や百科事典、書籍のたぐいをひとつひとつアイテムガジェットから取り出しては並べる作業は、とても楽しく、そしてへたり込むほどに重労働だった。

「こうしてみると本当に壮観ね」

サラは、へとへとになりながらも、奇妙な達成感に興奮していた。
なぜか人間は、一揃えになっていく『モノ』というのに奇妙な愛
着を感じるものなのだ。

物置でも、取り出した武器防具を手当たり次第に格納していった。
きちんとした整理は、そのうち使用人たちがやるだろう。

帰宅したラルスは、書庫と倉庫を見て危うく悲鳴を上げそうにな
った。

こんな高額な宝物を、これほど無防備に大量に放置して、あのお
二人は私に、どう守れというのだろうか？

なんらかの防犯策が緊急に必要なだ。ラルスは頭を抱えてしまった。
なのにサラは、追い打ちをかけるように平然と言い放った。

「なんか、どうせなら、もうひとセット魔術書買いそろえて、きれ
いに並べてみたいわね？ シュウ君」

もうやめてくれ……

ラルスは心の中でうめいた。

ホテル・レオナレルからラルスが引き抜いてきた『子飼い』たちは、非常に有能だった。

同時に、ラルスに個人的に忠誠心を抱いているものが多いので、初日から非常に優秀に組織として機能していた。

ラルスは、ホテルでは副支配人の一名だった腹心の一名に人事雇用に関する要点をしっかりと伝達すると、彼に指揮を任せた。

また、客室係のリーダーだった30年配の女性をメイド長に任命し、家事一切の指揮と教育を命じた。

副料理長だった男には、邸宅のまかないを任せた。

空き時間には、これから入る新人メイドたちに、料理や配膳など細かい実務を教えることになるだろう。

あとは、工芸ギルドから、馬丁と庭師を招聘することになるが、これも、ホテル時代の出入りの職人たちに、すでに色よい返事をもらっている。

あとは、冒険者ギルドから、常雇いでこの邸宅の警備員を10名ほど雇い入れ、三交代で警護する手はずを整えた。

ラルスは、昼に訪ねてきた親友の、「アロイス評議員秘書」ホーイツとの昼食を済ませると、暗い表情でシュウに相談を持ちかけた。「シュウ様、お詫びとご報告がございます」

ラルスには、自分と子飼いの部下たちがホテル・レオナレルをいつ抜けても、あのホテルは上手く回るように組織を育てて来たという矜持があった。

ところが、上辺だけでしかものの見えないオーナーが、思ったよりひどくラルスと、新たにその主になったシュウを恨んでいるようだ、と、ホーイツが耳打ちしに来てくれたのだった。

今朝、アロイス評議員に直々に、オーナー自らが苦情を申し立てたらしい。

「当家の支配人ラルスが引き抜かれ、さらに部下も数名引き抜きを受けた。」

当ホテルはこの人事を認めるものではないので、すべての人物の復帰を命ぜられたい」

アロイスは、ホラーツからこの一件に彼が絡んでいることを報告されていたので、何とかしろと釘を刺されたらしい。

この場合の「何とかしろ」というのは、評議員に間違っても泥がつかからないように手を打て、という意味になる。

このオーナーは、レジナレス南西のネカーゲムント王国の三代前のオルトラ大公の子孫で、当時の英傑だった公が一代で築き上げた資産を食いつぶしながら生きているような人物だった。

当然、世間では物笑いのタネになっている事を自覚しているし、そのことに忸怩たる思いもあるだろう。

ホテル・レオナレルは、もちろん歴史のある格調高い物件ではあるが、その評価は、オーナーの手腕ではなく、ラルスの名声で成り立っていた側面があったらしい。

そのラルスが抜けるということは、オーナーと何かあったのか、という憶測を呼び、それが、悪い方に尾ひれが付いて、ひまな貴族たちの娯楽に発展していった。

となればこれは、損得ではなく、貴族の面子の問題になる。

オルトラ公イエルセンというその貴族は、面子をかけてシュウとラルスをつぶしに来た。そのためにまずアロイスを抱き込もうとして、ホラーツからこちらに情報が筒抜けになった。

「イエルセンは、退職した全職員の復職と、シュウの逮捕、および賠償を求めている」

サラは、心配そうにシュウとラルスの顔色をうかがっている。

ラルスの焦燥は、ここまでではじめて見るような表情だ。

シュウは、そんなラルスを見て、顔を赤黒くして怒っている。

また揉め事になるな。そして彼は、自分がどんな悪名を被ろうとも、仲間と自分を守るのだろう。

ならば、せめて自分だけはシュウ君を妄信的もいい、支えていこう。善悪など、どうでもいい。

「サラさん、すいませんけど、手持ちの金貨どのくらいあります？」
シュウは、サラに聞いた。

「残り1万5000ちよつとかな」

「1万枚もらっちゃっていいですか？」

「いいよ」

サラとシュウは、ラルスの目の前で、無造作にアイテムガジェットを開き、トレードモードで金貨の受け渡しを終える。

「サラさん、午後は買い物でしたっけ？」

「うん、魔術書の在庫リストをカタジーナが作ってくれたから、足りないものを買いたそうと思って」

ああ、まだ買うんだな、ラルスは苦笑してしまった。

「あ……ごめんなさい」

サラはそんなラルスを見て、小さく苦笑して舌を出した。昨晚、ラルスに愚痴られていたのだ。

「いえ、サラ様、私のほうこそ、出立前にこのような失態を犯し、申し訳ございません」

「とりあえず、サラさん」

「はい」

「サラさんは買い物のほうお願いします」

「うん。ラルスさん、カタジーナ借りてっていいですか？」

「お使い下さいませ」

「じゃ、いってきます」

サラが退室すると、シュウは、

「ラルスさん、まずホテルの経営状態を教えてください」

と、より現実的な打開案の検討に入った。

債務は、ホテルの動産を含め担保にしたものが銀行に金貨2500枚程度。

商業ギルドに、3人の債権者が居て、総額で3000枚ほど。

そして、今回問題になった、ある貴族から個人的にオルトラ公イエルセンが借りている借金が、2000枚程度、ということになる。次に、ホテルそのものの資産価値を値踏みする。

物件価値が金貨で500枚程度。装飾絵画などの動産が金貨1000枚程度。

奴隷が10人で金貨150枚程度。あわせて、物件価値は1650枚程度。

収入は、年間平均で、一日の売り上げが銀貨1800枚。銀貨は100枚で金貨一枚の兌換だかんになるので、大体金貨18枚が一日の売り上げになる。

粗利は6割だが、経費が4割で、結局、トントンの収支になっている。

経費の4割は、ほぼ半分以上が借入金利子と元本返済で、営業経費は全体の2割程度だという。

まずは、個人的にイエルセンに金を貸している貴族に、面会を申し入れてみることにした。

その日の夕刻、その貴族は面会に応じてくれた。

レイシラング伯セルマイエという、ネカーゲムント王国の貴族で、外務卿と共にこの国に駐留する外交官である。

個人的な関係から、イエルセンからの申し出を断れずに貸していたようだ。

レイシラング伯は、ホテル・レオナレルの収益から返済を受ける約定になっている債権が、ラルスやほかの有能な従業員の引き抜き

によって滞ることを恐れ、直接イエルセンに苦情を言ったものらしい。

ホテルの常連でもある伯爵は、ラルスのこともよく知っているし、ホテルの内情も意外とよくつかんでいたようだ。

シュウは、大まかなところはラルスに商談させ、伯爵から、この場で一括払いで、債権譲渡を引き出した。

債権の残高は金貨1900枚程度だったので、100枚ほど色をつけ、2000枚の即金で買い取るというと、とりっぱぐれを恐れるこの貴族は喜んで応じた。

そしてその足で商業ギルドに赴く。

ギルドの長に用件を伝えると、長は見習いの小僧をすぐに走らせ、債権者である2名の大商人を呼び寄せた。

債権者3名のうち、残る一人はギルド長だった。

シュウが、ホテル・レオナレルの一件でトラブルを起こし申し訳ないと詫び、アロイス評議員に迷惑をかけないために自分がホテルの債権をすべて買い取りたいというと、情報がすでに入っていたのか、この3人の大商人も、喜んで債権を譲渡してくれた。

ここでもシュウは、即金ですべての債権を買い取った。

商人たちは利にさとい。これほどの商談を即断するシュウとは今後縁があると踏んでいた。

ここでは、3人あわせて金貨3200枚ほどで、債券売買が成立した。

さらに、これらの債権を管理する器として、シュウ商会をギルドのメンバーに加えることとした。

シュウはその出資金などの手続を済ませると、ホテルに戻った。

翌朝には、すべての必要書類を持って、ラルスがホラーツのもとに走り、債権移動の書類作業を終えていた。

債権の移動が終わり、証書のたぐいも揃ったので、シュウは早速、オルトラ公イエルセンをアロイス評議員の公館に呼び出した。

この突然の呼び出しに、イエルセンは怒りに震えながらやってきた。

アロイス評議員に火の粉を振りかけないでこの一件を終わらせるため、ホラーツがすべての責を負う覚悟でこの場に臨んでいる。

「ホラーツ殿、いきなりの出頭令とは、どのような用件か？」

「お運びいただき恐縮です。殿下」

「はじめまして、このたび、ラルスの主となりました、シュウ商会の、シュウと申します」

フン、イエルセンは鼻を鳴らし白眼で答えた。

「そして、殿下には、新しい債権者の一人として、お目にかかることになりました」

イエルセンの目の前には、自分が借り散らかし、支払いをすべてホテルに付け替えていた借金の証書が、一揃えになって置かれていた。

「昨日のうちに僕が、殿下の債務を債権者からすべて購入してきました。」

そこで今日は、これらの債権の見直しと、ホテルの現在の資産価値の見直し、そして、返済計画についてのご相談をさせていただきますと思います、お呼び立ていたしました」

シュウは微笑んだ。

「ここには総計、金貨5100枚分の債権があります。

ほかに、聞けば銀行に2500枚の債務がありとか。

僕は、殿下の支払い能力に疑問を感じます、よってこの債務の回収を宣言しようか考えています」

「なにっ！」

イエルセンは青ざめた。

もともと、ホテルは債務超過の状況である。

この債権の回収を宣言されると、とたんにホテルの経営は破綻し、ホテルは銀行に差し押さえられた上で最も安い査定額で買いたたかれ、超過分の債務だけが自分に残るといふ状況になる。

「それに、実は、評議員の皆様のお許しが出ましたら、私が銀行のもつホテルの債権も個人的に買い取る予定であります」

シュウはさらに酷薄な笑顔を浮かべて、イエルセンを追い詰める。「そうなりますと、お支払いいただけない債権を、殿下のお国の収入から差し押さえ、ご返済いただくことになろうかと存じます。

無論、それでも足りない場合は、殿下のお国の宗主国である、ネカーゲムント王国から、残債の徴収をさせていただくことになろうかと存じます」

「ばかめ、お前一匹でネカーゲムントと争いでも起こすつもりか？小僧」

「殿下、今のご発言は、神聖ネカスタイネルの評議員秘書の立場でお聞きすべきものでしょうか？」

ホラーツは怜悯そうな無表情な顔を、イエルセンに向けた。

「う、い、いや」

「それでは、商業ギルド所属の商店主に向けられた言葉でしょうか？」

商業ギルドに借りた金をたとえ王国であろうと踏み倒せば、その王国の商業は息絶える。

貴族が貴族として体面を保っていられるのは、その義務と責任を果たしている間だけなのだ。

そして、商工ギルドは今朝、評議員5名による採決を依頼していた。

国営銀行の債権の譲渡依頼である。

国政を担当する者たちにとっては、一ホテルの債権譲渡など、さしたる問題ではない。

聞けば、債権をほしがっている商会は、すでに金貨5100枚分の債権を集めている。

債権者筆頭である。

であれば、回収が面倒な貴族の経営するホテルの債権などは、欲しがるものに売ってしまえばよいのだ。

それに……。今朝、ある筋からの情報が、5人の評議員にもたらされた。

「シュウ殿、採決が下りました。国営銀行はシュウ商会に物件担保付の債権『金貨2500枚』分、売却することになりました」

「き、きさまベーゼルス、私を売ったか！」

商工ギルドの長の顔を見て、イエルセンは激昂して怒鳴り上げた。
「ええ、私は商人でございますれば」
しれっと、ギルドの長は答えた。

ものの数分で、国営銀行の証文はシュウ商会の持ち物となった。
「さて殿下。」

これで僕の商会は、殿下のホテルに金貨7600枚の貸し付けを持つことになりました。

調べますと、この債権のうち3000枚分が、金利のみで元本の返済がない状態が、およそ5年以上続いております。

そこで、今回全債権をひとつの契約にまとめ、さらに、殿下が神聖ネカスタイネルにお持ちの全資産を差し押さえさせていただくことと致します」

「な……」

「差し押さえた物件のうち、ホテルにしましては担保物件として査定を致しまして、当商会で引き取らせていただきます。

査定額は、評議員の皆様にお任せします。

さらに殿下のお持ちの国内資産は、評議員の皆様の指示に従い、この場にて差し押さえ、後日競売にかけさせていただきます」

「……」

「そして、誠に恐縮ではありますが、殿下の公国、もしくは宗主国より残価の支払いが完了するまで、殿下を契約不履行として評議員に訴え、身柄を拘束させていただきます」

「そ、そのようなことができるものか」

冷淡に言い切るシュウを睨み、イエルセンは笑った。

「簡単なことです殿下。金貨7600枚、この場で返済くださればこのお話は終わりです」

「フン」

「ではやむを得ません」

隣の部屋でこの経緯をすべて聞いていた評議員たちは、ほぼ事前の報告通りだった成り行きに加え、悪質な又借りをしていたイエルセンを質に取り、ネカーゲムント王国に事態の收拾を依頼した。

今朝の会議に先立ち、同僚のレイシラング伯から報告を受けていたネカーゲムント王国の外務卿は評議員公館に出頭済みで、というより、同じく隣室でこの経緯を聞いていたので、話は即決着し、代物弁済でシュウに支払われるホテルと奴隷の財産権以外は、ネカーゲムント王国が代理弁済することとなった。

これで、イエルセンの脅迫に端を発したこの一件は解決し、シュウ商会は後日、晴れてホテル業を手に入れることになった。

シュウはここまでを済ませると、ハイエルフのふるさとへの旅に急いで出かけたので、それからの話はすべてラルスに後日聞いた。

まず、イエルセンが神聖ネカスタイネルに拘束されることはなかった。

ネカーゲムント王国は、神聖ネカスタイネルからの借入として金貨6000枚を有利子で借入。差し押さえられたイエルセンの私財を買い戻したり、シュウ商会への債務返済に充てた。

評議会は、ホテルの物件評価を動産含め、2000枚と評価した。

残金の5600枚は、この決定の翌日、ネカーゲムント王国からシュウ商会へと振り込まれた。

イエルセンは、ネカーゲムント王国に連行され、そのまま幽閉された。

オルトラ公国は3代を経て再び、ネカーゲムント王国に併合された。

シュウは上手く彼ら貴族と評議員の間を渡り歩いてはいたが、腹芸のしたたかさは、彼らのほうが何枚も上手だったということになる。

ただし、今回は結果として、『イエルセンとその家臣以外』誰も不利益を被らなかつただけのことだった。彼ら権力者がいつ、シュウに向けてその牙をむけるのか、その危険は常に覚悟する必要がある。

旅立つ前に、ラルスはシュウと二人で話した。

目を真っ赤に腫らし詫びるラルスに、シュウは淡々といった。

「ラルスさん、金は、ただの金です」

だが、シュウほど純粹でないラルスはいやというほど知っていた。「その金で、古今多数の人間が死んできました。人間同士で殺し合っていました」

「ラルスさん、金が殺してるんじゃないですよ。人が、人を殺すんです」

——あとは全部任せます。

シュウはラルスにそう頼むと、ラルスは頭を下げて言った。

「お氣をつけて、行ってらっしゃいませ」

留守は私が、命に換えても。その言葉は、音にはしなかった。

01（前書き）

二人のハイエルフに導かれ、シュウたちは世界樹の森に向かう。そこで出会うのは―――世界の希求と、シュウたちの存在が交差する。

レオナレルでの雑事をラルスに一任し、シュウは、カトヤとクリステルの故郷、ネクアーエルツの大森林に向かうことにした。
数日前、

「わしとクリステルを故郷に連れて行って欲しい」
と二人に頼まれ、とりあえず一行は了承していた。

レオナレルからは、北に馬車で15日くらいかかるらしい。
旅のための荷造りを終えると、今回も2台の馬車に分乗しての出立となった。

馬車は、例の山賊からの鹵獲品ろかくの馬車を売り、ひとまず、工芸ギルドにあった中古在庫の箱馬車を購入した。

冒険者ギルドに御者や護衛を頼もうかとも考えたが、カトヤがいうには、エルフの里は隠里かくれさとなので、余計な人員は連れて行けないとのことだったので、シュウ、サラ、ジルベル、カトヤ、クリステルの5名で行くことにした。

カトヤは、ジルベルの同行にも難色を示していたのだが、

「それなら僕たちは森に入らないので、カトヤさんとクリステルさんだけでいってきてください」

といったので、やむなく認めることになった。

詳しくは話していないが、カトヤとクリステルにとっては、シュウを里に——正確には世界樹の前に——連れて行くところこそが本来の目的なので、自分たちだけで帰されては旅自体が無意味になってしまうのである。

旅行4日目。神聖ネカスタイネルの北部国境の村、マローレンに

到着した一行は、舗装された街道に行く楽な旅路がここまでということもあって、日の高いうちに着いたものの、すでに宿屋でくつろいでいた。

明日は早朝から国境を越え、途中からは野宿も必要になる旅程になる。

シュウが風呂から部屋に戻ると、二人で入浴してくつろいでいるサラとジルベルがいた。

今は、祖母と孫娘が入浴にいったらしい。

ふとシュウは、今まで気になっていたことをジルベルに尋ねてみた。

「ねえ、ジルベルさんはなんで、完全に人に化けられるの？」

「どういう意味かの？」

「ほら、よくあるじゃない、こう、頭の上に耳があったり、しっぽがあったり」

「ああ、そういうことか。耳もしっぽもつけようと思えばつけられるがの」

そういうと、ジルベルの頭には、ぴよこ、と動く狼の耳が、そして尻からは立派な銀色のしっぽが現れた。

「へえー」

だが、すぐにそれらを消し去ると、またジルベルは普通の人間の姿に戻った。

「そもそも、人の中で姿を紛らすために変化へんげをしておるというに、なぜわざわざ耳だのしっぽだのを出さねばならぬかわからぬわ」

「ああ、それはそうかな？」

シュウは、そのあまりに当たり前すぎる理屈に苦笑した。

「でもさ、そういう姿取ったということはさ、そういう姿の人もあるって事なのかな？」

「居るな。大陸の南の方に、獣人族とやらが居る」

「やっぱそうなのか」

ゲームのキャラクターとして、獣人は確か出ていたよな、という記憶があったので、こちらの世界にいないのは不思議だと思っていたのだ。

「冒険者などの中にも、居るようだよ。あやつらは体が丈夫だからの」

「そうなのか」

「ところでシュウよ。変化ということであれば、我はこうした姿もとれるぞ？」

ジルベルは、服を脱ぐと、通常の狼よりさらに小さい、まるでぬいぐるみのようなサイズの狼になると、ベッドに腰掛けているシュウの膝の上に乗る、丸くなった。

そして、しっぽをぱたぱたと振りながら、シュウの膝をなで回す。つついシュウは、背中を撫でてしまったが、よくよく考えると、これは、あの巨大な銀魔狼の姿なのである。

「ジルベルそっちの姿の方がよっぽどいいわよ。もうずっとその姿でいなさいよ」

サラは、皮肉ではなく本心から、ジルベルに向かってそういつている。

どちらかというと、かわいくて仕方がないと思っているのは、シュウよりサラのほうなのかも知れない。

「まあそうも行かぬわ、それに、この姿だと、しゃべっておったら他人におかしく思われよう」

ジルベルはそういうと、そのままの姿勢でシュウの膝の上で、人化をした。

当然先ほど脱いだワンピースは足下にあるので、ジルベルは全裸。シュウの膝の上に横座りをして、両手でシュウの首を色っぽく抱いている。

「ばっかっ！ とつと服を着なさい！」

サラがジルベルにそのワンピースを投げつけた。

実は、頭の上の耳にせよ、小型化にせよ、ツボに入ったのはやはりサラのほうだった。

その後時折、サラはジルベルに「幼女姿で耳出して触らせろ」だの「ぬいぐるみになって抱かせろ」などと要求したりしていくのだが、それはまあ、ここでは置いておく。

北に向かって11日目でやっと、北進する街道からも、ずいぶん豊かな森が見えるようになってきた。

この先が、エルフの暮らすネクアーエルツの大森林になるのだろう。

街道が徐々に北東に曲がり出した。

そして、森に向かう轍わだちが見え始めた。この日は前もって、先導する馬車の御者をクリステルがつとめていたので、迷わず森に入れた。

森に入ると、なんらかの結界や呪術がかかっているのだろうと思っていたが、そうでもなかった。

クリステルによると、まだこの森を数日かけて通るし、このあたりにはエルフの集落はないとのことだった。

途中、木々の隙間が少しひらけた川沿いの広場があった。

クリステルは、今日はここで泊まりましょう、といって、馬車を止めた。

馬たちを馬車から開放し、川辺で水を使わせてやる。

二台の馬車には、それぞれカトヤとクリステル、シュウとサラが分乗し、布団で休息を取っている。

この一行には、基本的には火の番も不寝番も必要ない。

夜は、ジルベルが、大型犬程度のサイズで銀魔狼の姿になって、馬車の中で眠っている。

小物の獣程度ではまず、その姿を見ただけで怯えて去るし、魔獣が群れをなして近づくと、ジルベルが咆吼を上げるので、結局、襲われることはなかった。

むしろ、この先の集落に暮らすエルフたちのほうが、銀魔狼の咆吼を聞きつけ、警戒のため集まっていた。

その日の夜半、警戒のため斥候に出ていたエルフが、二台の馬車の間で眠る一頭の銀魔狼を発見した。

合図のため、かぶらや鎗矢に炎の魔法を乗せ、上空に放つ。

その音を聞いて、カトヤが馬車から降りてきた。

「わしらがおることを感じておらんかったのか？」

不機嫌そうにカトヤがいう。

弓を射たエルフの若者は、突然ハイエルフが車内から現れたことに混乱して尋ねた。

「い、いえしかし。ここに銀魔狼が……」

「訳あって一緒に旅しておる。ともかく、間違っても、集まった者らに手出しはさせるな」

「わ、わかりました」

鎗矢の音に驚き、興奮した馬たちをなだめると、カトヤはジルベルに、人化をしてくれと頼んだ。

ジルベルは人化をし、馬車にかけてあったワンピースを着て、馬車の屋根に乗り、寝ころんだ。

集まってきたエルフたちのリーダーは、カトヤと面識があったら

しい。

とにかく、翌朝の出立までもう一休みしたいとカトヤはいうと、馬車に戻っていつてしまった。

エルフたちはやむなく、数人の男たちを残し、村に引き返していった。

翌日の昼には、彼らの村に到着した。

御者の2名のハイエルフはすでに村人の知った顔だった。

「はじめまして。僕はシュウ。こちらはサラ、そして、ジルベルです。」

ジルベルは銀魔狼ですが、僕の命の恩人でもあり、望まれて一緒に旅をしています」

二人に招かれ馬車を出たシュウは、村長に事情を説明した。

立入を認められていない人間が森に入るだけでもかなりの嫌悪感を持つエルフだが、二人のハイエルフと同行している以上、通過させざるを得ない。

ひとまずは、安全のため、各所に先触れを出させてもらうことで、エルフの村長は話をまとめた。

カトヤとクリステルは、いくつかの会話を簡単に交わすと、そのまま馬車に戻り、御者をした。

カトヤの操る馬車を前に、クリステルの馬車が後ろに。

「では頼みましたぞ」

カトヤはそっくり残し、出発した。

ネクアーエルツの大森林に入ること3日目。

一行は、ついにハイエルフの氏族が暮らす集落へとたどり着いた。林立する木々がやがて拓け、目の前に壮大な一本の老木がそびえ立つ。

「世界樹……」

ジルベルが物珍しそうにその樹を見上げてつぶやいた。

「へえ、あれが」

サラは物珍しそうに見上げた。

レジナレス・ワールドのプレイ中も、幾度か噂は聞いていたけど、たどり着いたプレイヤーはまだいなかったはずだ。

ゲームシナリオの基幹イベントのひとつだし、そもそも、キャラクターにエルフ族を選択していても、ハイエルフの村には入れないと聞いたことがあった。

「なんだかやたらまぶしい樹だね」

シュウは、所狭しと立ち並ぶ周囲の木々の中、一本だけ高くそびえるその樹が、ずいぶんまばゆい光を発していることに感動した。

そして、その樹のまわりを、日中であるにもかかわらず、蛍の光のようなあわい緑光が楽しげに飛び回ってるのを、不思議な思いで見ている。

「あのまわりに飛んでるのって、蛍？」

シュウは、ハイエルフの二人、カトヤとクリステルを交互に見て尋ねた。

「え？ そんなのわたしには見えないよ？」

サラは不思議そうにいった。

「みんなには見えてるの？」

「うむ。我には見える」

ジルベルは首肯した。ハイエルフの二人も、それぞれうなずいた。「さて、まずは旅装を解こう」

カトヤはいい、一軒の大きな木造の家屋へと一行を誘った。

カトヤとクリステルが帰った。

それも、人間と、事もあるうに魔獣を連れて。

それは、保守的で閉鎖的なハイエルフにとって、非常に迷惑な事象だった。

この世界の精神世界でも圧倒的な頂点に君臨するハイエルフだが、その性は人間から見れば、高慢で、怠惰で、非友好的だった。

60年も生きれば幸せな人間族に比べ、ただでさえエルフは寿命が長い。

それでもエルフはまだ、性格的には享樂的な面もあるし、知的好奇心は一倍強い。

だが、ハイエルフとなると違ってくる。

まず滅多に世界樹の結界から出ようとせず、出たとしても人間に関わろうとはしない。

人間界に長く住んでいるカトヤでさえ、その傾向があった。

クリステルも、もし捕縛され開放されたのがシュウでなければ、感謝以上の感情を抱いたかどうかかわからない。

カトヤとクリステルがシュウに関心を持ったのは、どうやら、サラには見えない世界樹の『光』が見えることと関係があるようだった。

カトヤが案内した木造の家屋は、古びてはいるが意外と作りがよく、そしてよく手入れがされていた。

裏手の馬柵付の庭に4頭の馬を放すと、一行は屋内に案内され、旅の埃を払い落とした。

そこに、一人の老いたハイエルフがやってきた。

「カトヤ、久しいな」

「グイード様。長らく無沙汰を致しました」

「クリステルも、よく戻った」

「ご無礼を致しました」

ハイエルフの二人は、床に片膝を着いてその老エルフに敬礼をした。

「面を上げよ。早速だが、客人を紹介してもらおうか」

威厳の中にもどことない愛情を感じさせていたその老人は、一転して、値踏みをするような瞳で残りの一同を見やっていた。

ここにいるエルフ以外は知らぬ事だが、この村にハイエルフ以外のものが入るということは、この500年、ないことだった。

それは、ハイエルフが排他的であるという理由だけではない。

ここには、彼らハイエルフという種族がこの世界に産まれた使命——彼らはそう信じている——世界樹を守護するため、徹底した秘密主義を取っていることがその最大の理由なのだ。

「では。まずこちらがサラ殿。人間族の女性です。」

次に、銀魔狼のジルベル殿。そして、人間族のシュウ殿。シュウ殿は、ジルベル殿の名付け親です」

「ほう、まだ年若そうな少年であるのに、銀魔狼に名を与える程か」老エルフは、若干異なる視線をシュウに向けた。

それは、好意というよりはほんの好奇心なのであろうが。

「儂はこの地の長、グイードという。カトヤの客人として迎えよう」

グイードが先導し、一同は、世界樹の根本に案内された。

途中、ハイエルフとは一人も出会わなかった。みな、彼らと接触するのを避けている様子だった。

世界樹の根本には、一人の、とても美しいハイエルフの青年が立っていた。

彼は、怨敵を見るかのような視線を、ただ一人シュウに向けていた。

「これが、お前が選んできた人間か？クリステル」

少々甲高いが、容姿に違わぬ美しい声だ。

「お久しぶりです、ザフィア。この方はシュウさま。わたしのあるじ様です」

「くっくっく」

こらえきれず、カトヤがわらった。

「お久しぶりです、おぼ様。なにやらわたしが笑われているようですが、何がそんなにかしいのでしょうか？」

ザフィアと呼ばれた青年は、容姿より幾分幼いように思われる口調で、笑うカトヤに非難めいた口調で問いかける。

「いやいや、まるで好いたおなごを奪われた間抜け男のようではないか、ザフィア」

「おやめ下さいおぼ様。

……まあいいでしょう。シュウとやら、せいぜい、クリステルの顔に泥を塗らぬ程度の成果を見せて欲しいものだな」

再びザフィアは激しくシュウをにらみつける。

なんかきらわれてるなあ。シュウは思った。だが……

「成果？」

シュウが釣られてつい口にした。

「成果って、なんですか？」

「すまない、シュウ殿」

カトヤが詫びた。クリステルも慎み深く、詫びのため、片膝を地

面に付け礼をとっている。

「わたくしたちはシュウさまに、この世界樹の『導き』を授けてもらいたくて、ここにお連れしたのです」

「世界樹については、エルフたちに対しても、これまで秘中の秘とされてきた。

そのため、前もってシュウ殿たちにお伝えすることは出来なんのだ」

カトヤとクリステルは、これから行う『導き』について、一同に説明をはじめた。

世界樹は、この世界に住むものたちの魔力や精神力を計り、そのものに祝福を与える。

話を聞く限り、その祝福というのはどうも、精霊の加護と人間が呼ぶたぐいの性質のものらしい。

たとえば、世界樹のまわりにあるハイエルフの里に生まれたものは、ほとんど例外なくハイエルフであるが、時折、その周囲に広がるエルフの里にも、とてつもない才能を秘めて産まれてくるものがある。

そうしたものが成人し、世界樹の『導き』を与えられた瞬間に、ハイエルフに変わってしまうことさえあるほどの大きな変化をもたらすことさえあるらしい。

まれに、人間であってもこの『導き』によって変化を受けるものがある。

具体的には、不老不死に近い生命力を得たり、とてつもない精霊加護によって、神業に近い魔法の奇跡を生み出したり。

だが、あるとき、その事実を知った欲深きものたちが、この世界樹を我がものにしようとエルフたちを狩り、ハイエルフと戦争を起こした。

その結果、この里は結界で隔離され、エルフたちが暮らす村さえ、通常の人間は立ち入ることさえ出来なくなったということだ。

伝承によると、エルフたちが祝福を受けたときに比べ、人間族の場合は、その『導き』に大きな差異があるようだった。

恐ろしく強大な力を得るものがある一方、全くなんの『導き』も得られないものも多数にのぼった。

「ところでサラさま」

「……えっ？」

ハイエルフたちが語るおとぎ話のような伝承に聞き入っていたサラは、クリステルの呼びかけに一瞬遅れて答えた。

「サラさまも、よろしければ、『導き』をお受けになられてはいかがでしょうか？」

クリステルは、自身の命を救われた礼をいつかしたいと思っていた。

もし、サラがなんらかの『導き』を得られるとしたら、それに勝る恩返しはないし、別にダメでもともののである。

伝承によると、人間が使う魔術のたぐいをより深く身につけたものにとっては、世界樹の『導き』は、あまり得るものがないようだった。

「わたくしたちが物心ついてからは、一度も人間の『導き』はありませんでしたから、具体的にはわかりませんが、少なくとも、受けたからといって、特別に不利益になることはないようですよ？」

「そうかあ、じゃあ、お願いします」

「では、はじめようか」

グイード老が、二人を招いて、木の幹に右手を触れるように指示をした。

「……これは！」

グイードは、いや、周囲のハイエルフは全員、目を見開いた。

恐ろしい数の妖精たちが、二人のまわりを祝福するように飛んでいる。

妖精の姿がなぜか見えるシュウは、その光景に魅入っている。見えないサラも、なぜか心が沸き立つような気持ちがあった。

「シュウ殿だけでなく、サラ殿もか！」

カトヤは驚いていた。

この里を離れ数百年、カトヤは、ある資質を持った人間を捜していた。

周囲のハイエルフたちでさえ気がついていないが、世界樹の立つ地脈が衰えを見せ、徐々にこの地への祝福が弱まってきている。

すぐどうこうなるわけではあるまいが、それでも、未来のいつか、この世界樹は枯れていくことになるのだろう。

だが、命は巡る。

その種子に選ばれる「勇者」を、カトヤは求めていた。

一族のものにも言えぬ秘密。

保守的な一族にあって、下界に出たがるような『ふしだら』な女は、血族であっても白眼視される。

腹の立つ仕打ちも受けた。悔しい思いも、数えられない。

自分の実の娘からもそうした言葉を浴びせられ、ついにカトヤは、里に帰ることさえなくなっていた。

今日も、カトヤとクリステルを出迎えたのは、グイードを除けば、ここにいるザフィアのみだった。

「うわっ！」

「きゃっ！」

触れていた二人の右手を、なにかが引っ張った。

それに引きずられるように、シュウとサラは、まるで樹に捕食されるように幹に吸い込まれて行きつつある。

「ちっ！」

とっさに動いたのはジルベルだった。

サラとシュウの伸ばす左手をつかみ、引きずり出そうと力をこめる。

「おやめ下さい、ジルベルさま！」

クリステルが、それをやめさせようと、ジルベルの腰を両手で抱え、引きはがそうとする。

その瞬間――

4人の姿は、幹の中からあふれ出す光の中に消えていった。

「久しぶりですね、クリステル」

眩惑が収まると、クリステルの目の前には、かつて成人の儀式の時に出会った、世界樹の樹を守護する妖精の女王が立っていた。

そして、この女王は、クリステルの『導き』の守護者でもある。クリステルは膝を付き拝礼した。

「良きものたちを連れてきたようですね……感謝いたします」

女王は、クリステルの頭に手を当て、心から、感謝の言葉を紡いだ。

そして、傍らに倒れるジルベルを助けおこし、女王はいった。

「人に名を与えられし獣よ。ジルベルよ」

「なんだ」

ジルベルも、やっと視力が戻ったのだろう。うすくまぶたを開き、自分を抱える、この目の前の恐ろしい女に返事した。

「貴女はなぜ、あの少年に惹かれているのですか？」

「知らんわ。だが、我に釣り合うオスなど、久方ぶりに出会った。欲するがメスの性さがというものである」

「ふふ、そうでしょうね。であれば、貴女は、さらなる力を求めねばならなくなるでしょう」

「なぜだ？」

ジルベルは、うめくように問いかける。

自身の強さには絶対の自信を持っているジルベルだ。

この得体の知れない女は確かに、争えば自分より強いだろう。そ

うした野生の恐怖が、ジルの行動を抑制している。

「あの少年は、世界樹の守護者に選ばれました。

かつて私が、この世界樹を守護した男を護ったように、今度は貴女が、あの少年を護ることになるのでしょうか？」

「護らねばならんことになるのでしょうか？」

「それは誰にもわかりません。ですが、貴女はまだ、力が足りません」

妖精の女王は、優しく、恐ろしい瞳に笑みを浮かべて、ジルベルの瞳をのぞき込んだ。

「もし貴女が、あの少年を護りたいと心から望むのなら。

その力を欲するのなら、誇りを捨て、私にひざまず跪き、そして願いなさい」

サラの目の前には、背中から美しい羽根をはやした青白色せいはいくしよくの妖精が浮かんでいた。

幼い容姿だが、どこかしら、冒しがたい威厳さえ感じる。なのに、気まぐれで、浮薄そうないたずらな表情を浮かべている。

「ねえ」

妖精は我慢しきれないといった表情で、サラに話しかけてきた。

「あなた、だあれ？」

「え、えっと、サラです。サーラ・ヨハンセン」

「そう。あたしは、ウンディーネ」

偉大なる水精。サラは思った。それにしては……

「あー、今ちよっと失礼なこと思ってる？」

ぷくっと、目の前の妖精——ウンディーネはふくれた。なんてかわいいのかしら。

「ごめんなさい。あまりに見た目がかわいいから、つい……」

「じゃあ許してあげる。ところでサラ、あなたずいぶんいっぱい魔

法覚えてるのね」

「うん、もともとは聖騎士だったから……」

「でも、あたしたち、人の子の魔法、嫌いなものよ」

「えっ？」

「あのね、サラ。」

ここにサラが呼ばれて、あたしはサラを選んだの。

でも、サラもあたしを選ぶなら、サラは今ある魔法、全部捨てなきゃならないの。

出来る？」

「……」

「もしサラが、魔法捨ててあたしを選ぶんだったら、あたしもサラを選んであげるよ」

ウンディーネが話してくれたのは、サラと彼女の契約の話だった。精霊との契約。本来は、エルフのみにしか為し得ない、秘中の秘術だ。

まれに、精霊の気まぐれによって祝福を得る人間もいるが、必ずしも高位の精霊と契約できるとは限らない。

ウンディーネが語る彼女との契約の果実は、強大なものだった。それこそ、今あるすべての魔法を捨ててもあまりあるだろう。

だがサラは迷った。

今でもサラの持つ魔法は強力なのだ。それをすべて捨て、一から新たな魔法を身につけることは出来るのだろうか？

サラは率直に、ウンディーネに教えを請うた。

ウンディーネは笑った。

「なんだ、そんなこと」

いたずらそうに笑うと、彼女はいった。

「全部、教えてあげる。サラなら大丈夫」

「わかった。じゃあ、お願いします」

サラは頭を下げた。

「サラよ、我が名において、あなたに契約を授けます」

ウンディーネは、目の前で、美しい成熟した女性の姿に変わっていった。

「サラ、ここに寝なさい」

ウンディーネは、サラを優しく横たえると、顔をのぞき込んでいった。

「あなたの体にはこれから、爪の先まですべて、私との契約が刻まれます。」

特に、あなたの頭の中にある人の子の魔法は、私の契約と相克をおこし、ひどい苦痛を伴うでしょう。

最後にもう一度聞きます。あなたはこの苦痛に打ち勝ち、私を受け入れることが出来ますか？」

ウンディーネは、横たわるサラの右手を優しく両手で包んで、サラに静かにそう尋ねてきた。

「私も最後に聞いていい？」

「うん」

ウンディーネは、小さな妖精の姿だったときのあのいたずらな瞳そのまま、サラを見つめている。

「私の今日までの魔法とか、全部捨てても、あなたと契約をしたほうが強くなれるのよね？」

「うん」

「あなたと契約したら、私は、シュウ君をしっかり護ってあげるようになるのよね？」

「約束します、サラ。それはまた、私の願いでもありますから」

「お願いします、ウンディーネ」

「わかりました。サラ、覚悟はいいですね？」

我、水の一柱たるウンディーネの名において、汝、サーラ・ヨハ

ンセンとの間に、契約を結びます」

灼けるような痛みだった。

サラの全身が、何者かによって書き換えられていく。

だが、頭蓋骨の中で起こっている激しい痛みは、体の痛みなどとは比較にならないものだった。

サラの体は、苦痛から逃れたいがためにもがき、痙攣し、硬直し、本人の意志を離れたように暴れ回った。

あまりの苦痛に、サラは、悲鳴も、うめき声さえも漏らせないまま、祈るように、早くこの苦痛から解放されたい。それだけを祈っていた。

彼女の脳から、今日まで必死で覚えたすべての呪文が焼き消されていく。

消えゆくサラの意識に、まるで遠くからささやかれているような優しいウンディーネの声が聞こえた。

「サラ、終わりましたよ——」

同じ頃、誰にも従うことのなかった誇り高き魔獣は、今、激しい苦痛に身を焼かれていた。

ジルベルはあの恐ろしい女王——シルフに、屈辱をこらえ頭を下げた。

シュウを護る力を欲した。

シルフは、自分と契約をすれば、「世界樹の守護者」を護るに足る力を得ることが出来る、といった。

だが——。魔獣であるジルベルにとって、それは激しい変革を強いることになる。

ジルベルは、迷わなかった。

今自分が感じているこの女への恐怖。それさえも、ジルベルにと

って、シュウを護りきれないというシルフの言葉を裏付けていることに、彼女は気づいている。

野生に生まれ、強い魔力に洗われることで銀魔狼に変化^{へんげ}した。それからはずっと、孤高に生きてきた。

ある夜、単なる好奇心で、すさまじい精気を放つ少年が踊るようにオーガの命をむさぼるさまを、たまたま見た。

彼の戦いは美しかった。劣勢を覆し、たった一人で20以上ものオーガを狩っていた。

彼がすべてのオーガを切り裂きながら、力尽きて倒れ込み、瀕死のオーガの一匹に命を奪われそうになったとき、激しい所有欲が湧き出ていた。

あのオスが欲しい。

それは、狼から銀魔狼に変化してから、ジルベルにとって初めての種類の欲望だった。

だから、ジルベルは彼の血をすすり、我が血を彼に与えた。

我が命を与え、彼の寿命を長らえさせようとも思っていた。そのために自分の寿命が半減しようが構わない。

孤高な銀魔狼は、その孤独を埋めてくれるような半身に、はじめて出会ったような気がしていた。

互いの傍らで生きていきたい。そのために、得られるものならばなんでも得たい。

自分より強きものに屈する。

これまで誇りのみで孤独に耐えてきたジルベルにとって、それは、死ぬよりつらい苦痛だった。

だが、その屈辱の中ジルベルは、あらためて、シュウという存在へと向かい合う。

銀魔狼の肉体が限界を迎えていた。

もはや人化を保つことが出来なくなったジルベルは、身につけていた衣服の中で、一匹の獣の姿に戻っていった。

やがて、人間の服の中で苦痛にうごめく彼女が静かになった。

「よく耐え抜きました。ジルベル」

シルフは、服の中から、小さく丸まっていたジルベルを取り出し、抱きかかえ座った。

そして、自らの膝の上に抱くと、その背中を優しく撫でていった。ジルベルの姿は、濃銀の魔狼から純白の美しい毛並みに変化していった。

シルフがジルベルに契約の試練を授けている頃、クリステルも、一柱の精霊から試練を受けていた。

クリステルはかつて、シルフの眷属である風の妖精から、成人の日の儀式ですでに契約を受けていた。

だが、この目の前の精霊——サラマンダーが、先ほどシルフに、この娘をくれ、と声をかけていた。

シルフは、ジルベルと自身が契約を結ぶことに決めていたので、二言なくクリステルの契約を解除した。

エルフ族は一般に、サラマンダーとの契約を好まない。

激しい破壊と衝動の化身である炎の精霊。

その姿は燃えさかる竜に似て、その炎は、焼け落ちた灰さえも灼き尽くす。

それらの性質を、ハイエルフは特に好まなかった。

だが——

ハイエルフの村を飛び出し、人の世界を旅した彼女は、山賊たちに奴隷として捕らえられるというひどい屈辱を受けた後、その精神

を強く成長させていた。

そもそも、ハイエルフの村でも、もはや理解されにくい存在に墜ちているのだ。

——たとえばそれが、世界樹を護るための偽装であったとしても。

祖母と同じように、ふしだらな娘。

エルフの世界では、そういわれ続けていくのだ。

だからこそ、彼女は、自らの伴侶にシュウを選んだ。

クリステルの容姿に見とれるシュウの目には、彼女を蔑んだり哀れんだりする光はなかった。

自らの威厳と、純潔と、生命を救い出してくれた少年。

その強い精気と精神の光に、クリステルはあつという間に魅せられてしまった。

すでに人間の女と、銀魔狼が彼に寄り添っている事を知ってもなお、ハイエルフという肉欲に欠ける、生命としては欠陥品に近い長命種の娘は、生まれて初めて、この少年を渴望した。

どのような形でも構わなかった。

この少年の子を宿したい。

それは、ハイエルフにしては珍しい情動だった。

今、銀魔狼は風の、人間の娘は水の精霊の持つ最大の加護が受け継がれているだろう。

であれば。

自分がそこに並び立つには、この炎の精霊を受け入れ、昇華させてはじめて、対等な立場に並ぶことを許されるのだろう。

炎の精霊との契約は、まさに命とこの身を灼き尽くすような肉体的変化をクリステルに与えていた。

うめきながら、必死でそれを受け入れる。

長年、風の精霊の契約を宿していたことが、さらにクリステルを苦しめる。

だが、彼女は迷わなかった。

燃えさかる炎に肉体を灼かれるような幻覚の中、クリステルは、自分の肉体と精神が、サラマンダーを完全に受け入れられた事を悟り、安堵の中で意識を手放した。

「よく来てくれた、シュウよ」

「はあ、はじめまして」

目の前の老人にぺこり、とシュウは頭を下げる。

「どちらさまでしょう？」

「私は、この樹だ」

そうだろう、シュウは何となくそうだと思っていた。

「そなたの妻たちは、試練を乗り越えたようだ」

「いえ、妻とか全然そういうのじゃないですから」

シュウは苦笑していた。このあたり、彼は18才と思えないほどにまだ幼い。

「それは彼女らが気の毒だな。命をかけてそなたのために精霊を身に宿したというのに」

「はあ、面目ありません」

「まあ、そなたがなんといおうと、縁は固く結ばれていよう。

それより、そなたに頼みがある」

世界樹からの頼みとか、絶対にやっかいごとなんだろうな。シュウは考えている。

「私は、もうじき命を終える」

「えっ。世界樹って永遠の命じゃないんですか？」

「そうでもあるし、そうではない」

「それは」

これを聞けば、泥沼だろうな、シュウは苦笑した。

「我らは、この世界に吹き出す、魔泉と呼ばれる穴に育ち、その魔力を糧にして育つ。」

魔泉は、地脈の集まる地に吹き出し、この世界に魔力を与えている」

「……」

「だが、長いときの中、地脈は時に移ろいゆく。」

私の地脈は、すでにいくつかは枯れ、またいくつかはその道を変えた」

「つまり、あなたは」

「そうだ、やがては枯れる」

たぶん、よく解らないがそれはきっと一大事なのだろう。この世界にとっても。

「地脈を何とかする方法はないのですか？」

「ない。とあるものが地脈を操ってはおるが、それは、本来許さざる行いだ」

「とあるもの、ですか」

「正体は私も知らない。その方法も」

それもまたなんかやっかいごとになりそうだな。シュウは思った。だが、自分がこの世界にいる理由も知らず、たとえば、帰れるのかもさっぱりわからない今の状態だ。

なんらかの手がかりをつかむ前に、この世界が壊れてしまっても困るし、この世界を荒らしてもらっても困る。

だが。

「すいません、まあ僕に何を求めているのかわかりません」

「そうだな」

老人は笑った。

「シュウ。君に、『世界樹の守護者』を頼みたい」
すごい二つ名が来た。

世界樹はいう。

もともと、エルフは世界樹の守護者だった。

エルフと共に世界樹を護っていた精霊たちの加護が、より強く表れたものたちがハイエルフとなった。

だが、かつて起きた不幸な相克によって、エルフは人間たちとのつきあいを絶ち、また、エルフたちとハイエルフたちで役割を分けたため、ほんの一部のハイエルフだけが真実を知る、というあまり好ましくない状況になってしまった。

今の地脈が枯れ、新たな魔泉が生まれると、その魔泉から魔物が生まれ、やがて、それらと人間たちが争うようになるだろう。

世界樹は、その魔泉に根を張り吸い上げ、穏やかな魔力に換え、精霊やエルフ、そして人間などの世界に広げていく。

精霊と神代の人の混血たるエルフはまた、魔泉に晒されたためにオークとなった種族と同根だと、この老人はいう。

銀魔狼なども、魔泉に晒された狼が変化したものだという。

つまり、この世界の魔物は、そのようにして生まれている。

魔泉は大小至る所にある。

その中でも最大の魔泉に赴き、新たな『種』を、世界樹の種を育てて欲しい。

「そんなこと、僕に出来るんでしょうかね？」

「ほかにおらないと思う。だから私はそなたを待っておった」

「はあ」

シュウは困っていた。あまりに大きい話になっていて、自分がどう反応していいかさえもうわからない。

「地脈を操っているものも、その理を知っておる。その上でなにかを成しておるのだろう。私の力の衰えは、もっと長い先のはずだった。」

だがここに来て、急激に力が衰えはじめた」
要するに、あまり時間がないということだろう。

「それで、『世界樹の守護者』というのは、僕があなたを護るために、その誰かと戦うって事でしょうか？」

「そうではない。」

先ほどいったように、そなたには、我らが新しき種を護り、運び、育てて欲しいのだ」

入るが良い。

老人が言うと、見た感じ7—8才くらいの容姿の、かわいい少女がいつの間にか老人の背中から、ひょこつと顔を覗かせている。

そして、シュウを見ると、にこつとはにかんだ。

実にかわいらしく、保護欲をそそられてしまう。

「これが、我が次代の種だ。」

これとそなたに、契約を結んで欲しいのだ」

「契約ってのは、ここに来る前に聞いていた『導き』というの事ですか？」

「そうだ。そなたがこれを守護する代わりに、これはそなたに力を与える。」

それが本来の契約の姿だ。

契約を結ぶ相手が、ここに来た若者を選び、導くゆえ、そのような名前になったのであろう」

「なるほど」

シュウは少し黙考した。

だがまあ、いくら考えたところで、断れる内容ではないだろう。

「わかりました」

シュウは答えた。

老人にうながされ、少女はおずおずとシュウの前に歩み寄った。

そして、

「はいっ」

と、両手をシュウの前に突きだした。その手には、ひとつの種子が握られていた。

「その種が、これだ」

老人は、少女の頭を撫でながらいった。

その種を、そなたの心臓の横に埋めてもらいたい。

「うええー！」

「大丈夫だ、そなたの骸を肥料にしようなどという話ではない」
老人は微笑んだ。

「時が来るまで、そこに隠して欲しいのだ」

しかし、なにか本能的な恐怖がある。

「これがそなたに力を与えよう。」

そなたは、これを護り、魔泉を目指し、これをそこに根付かせて欲しい」

どうやら逃げ場はないようだ。

「……わかりました」

シュウは、少女から種を受け取ると、着ている服をズリ上げて、左胸に当ててみた。

恐ろしい激痛がほんの一瞬、心臓を起点に全身の神経を駆けめぐった。

「……つつ、……くう」

シュウは顔をゆがめ、老人を睨んだ。

「痛いじゃないですか」

「普通はそんなもので済む痛みではないわ」

老人は笑った。

少女が、シュウがあぐらをかく膝の間にすっぽり座った。

そして顎だけ上げて

「だいじょうぶ？」

と見上げた。

「うん、大丈夫」

シュウはその頭を撫でてみた。

少女は、眼を細めると、シュウのお腹に背中をもたれさせた。

「さて、そろそろ行くがよい、シュウよ」

「はあ、わかりました。」

あ、最後にひとつだけ」

「なんだ」

「この子の名前は？」

「ない、必要ならそなたがつけてやるがよい」

「そう、じゃあ、ユーガ、とかどう？」

シュウが少女に尋ねると、彼女はにっこり笑った。

それでいいらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7503y/>

レジナレス・ワールド

2011年11月29日12時03分発行